僕の樹には誰もいない

松村雄策 Yusaku Matsumura

河出書房新社

CamScannerでスキャン

I

七〇年目の十二月八日に向けて　11
ジョン・レノンの秋は生きている　16
凱旋パレードは終わらない　21
一九六一年初夏、まだ何も始まっちゃいなかった　26
ポールを肯定するんだ　32
梅雨と本とビートルズ　37

II

エリック・バードンもジャックスも見た　45
凄い人、ラヴィ・シャンカール　50
〝アイ・ソー・ハー・スタンディング・ゼア〟からの長い旅　55
しかし、酒をやめるわけにはいかない　60
ブライアン・ウィルソンの頭の中　66
一九七一年の春から夏まで　71
まだ吠えることが出来る　76

Ⅲ

グッド・イヴニング・メモリー・オールモスト・フル　83
一〇年目の十一月二十九日　87
秋まで待てない　92
冬に走りまわろう　97
長い坂道を　102

Ⅳ

イエス・アイ・アム・エクスペリエンスト　109
五十年前の夏がやって来る　115
夢をめぐる旅　120
キンクスのスクンキ　125
二回目のツェッペリン　130
一九六九年はいつ終わったのだろうか　134

CamScannerでスキャン

V

ポールのベストを作ろう 143
ポールのベストを作ろう（八〇年代） 148
ハリウッド・ボウルに神がいた 153
ビートルズが生きている 158
闘って、あらがって 164
七十六歳になっても 169

VI

ニール・ヤングの最重要作 179
ー日なんてまぶしかった 183
ー日前、始まった 189
ビートは飛び、ジンジャーは振り回す 194
やはり、六〇年代はビートルズで、七〇年代はツェッペリンだったのだ 199
たった一緒だから 204

VII

時は流れて　211

天才の創りし作品　215

ギターは最も優れた武器だった　220

マーク・ボランは老人にはならない　225

ボブ・ディランのある季節　230

僕だって、泣いたんだ　234

鮮やかな静寂　239

七十五歳の不死身の男　243

ただ空があるだけ　248

火事と学校とフー　253

音楽は続く　258

ジョン・レノン　十月九日と十二月八日と　263

生きていこう　268

Still Alive And...　272

本書について　松村さんの十冊目　米田郷之　278

I

CamScannerでスキャン

七〇年目の十二月八日に向けて

コンビニに行くと、だいたいレジの前あたりにそのときキャンペーンをしている煙草がライター付きで置いてある。前はあのライターは使い捨てライターだったのだけど、最近はガスが補充出来るそこそこのものになっていることが多い。

あれは一か月ぐらい前だっただろうか、そこにウィンストンのものがあったので、思わず手に取って見た。かつて、僕が外国煙草を買うときは、必ずウィンストンかL&Mだったのだ。どちらもどこでも手に入ったのだけど、いつのまにかまったく見なくなってしまった。煙草屋さんに訊いてみたら、もう入荷しないという。いつだったか、ウィンストンがあったので、しめたと思って手に取ったら、タール一ミリなどと書いてあったので、やめにした。L&Mはずっと見ていない。

それが、今度のウィンストンは六ミリである（と思う）。ライターを見ると、縦形と横形と二種類あって、色は赤・白・銀と三種類ある。つまり、六種類ということになる。いつものマイルドセブン・ライトの他に、とりあえず二種類の赤のライター付きを買ってみた。

何故赤かというと、どうも僕のラッキー・カラーは赤のようで、いつも身に付けているとい

いというのだけど、五十八歳のオヤジは赤いものなどちょっと持ち歩けない。で、ライターならいいと思ったのだ。

帰って使ってみたら、縦形は使いやすく、どうも横形は使いにくい。だから、次にコンビニに行ったときには、縦形の白と銀付きを買った。次はどうしようかと思って行ってみたら、また別の形の白があったので、それと縦形の赤を買った。次に行ったら……もうウィンストンのキャンペーンは終わっていた。

というわけで、今ウィンストンのライターが六個あって、だからどうしたという気もして眺めている。考えてみると、こういうものを集めようという人は、見つけたときにそこにある全種類を買って、他のコンビニも回って他の種類も買うのだろう。そういうことに、気がつかないのだ。一週間に一度、いつもの店に行っているだけでは、駄目なのだ（まあ、それほど反省しなければならないことではないけれど）。

ウィンストンというのは、ジョン・レノンの本名がジョン・ウィンストン・レノンだからである。L&Mは、いうまでもなくレノン・マッカートニーである。

ジョン・レノンは一九四〇年十月九日生まれで、一九八〇年十二月八日逝去である。つまり、二〇一〇年は生誕七〇年没後三〇年ということになる。おそらく、二〇一〇年の十月から十二月にかけて、なんらかのキャンペーンが行なわれると思う。そこで、ベスト・アルバムが作られるということになったらと、気になっていることを書いてみたい。

生前のジョンのスタジオ・アルバムは、基本的に『ジョンの魂』、『イマジン』、『サム・タイム・イン・ニュー・ヨーク・シティ』、『マインド・ゲームス』、『ウォールズ・アンド・ブリッジズ』、『ロックンロール』、『ダブル・ファンタジー』の七枚である。

シングルのみで発表されたのは、〝ギヴ・ピース・ア・チャンス〟、〝コールド・ターキー〟、〝インスタント・カーマ〟、〝パワー・トゥ・ザ・ピープル〟、〝ハッピー・クリスマス〟の五曲である。

アルバムにも収録されているシングルは、〝マザー〟、〝イマジン〟、〝ウーマン・イズ・ザ・ニガー・オブ・ザ・ワールド〟、〝マインド・ゲームス〟、〝ホワットエヴァー・ゲッツ・ユー・スルー・ザ・ナイト〟、〝ナンバー・ナイン・ドリーム〟、〝スタンド・バイ・ミー〟、〝スターティング・オーヴァー〟の八曲である。

だから、このシングル十三曲に各アルバムの代表曲を加えたものがベスト・アルバムだと、僕は思っている。ところが、そう簡単にはいかない。最近のジョンのベスト・アルバムには、死後リリースされたものも含まれている。より広いジョン・レノンをということなのだろうけれど、どうも集中力に欠けてしまう。

特に、〝イマジン〟が代表曲のようになってしまってからは、ジョンが矮小化されているような気がしてならない。つまり、白いピアノに向かって、愛と平和を夢想している人である。ギターを抱えて叫ぶ、闘うロックンローラーが僕のイメージである。リアル・タイムでジョンを聴いていた人は、ほとんどがそうだろう。

今迄に出ているジョンのベスト・アルバムは、三種類ある。一枚目は一九八二年の全十九曲の『ザ・ジョン・レノン・コレクション』である。これには、シングルの中で〝マザー〟と〝ウーマン・イズ～〟が入っていない。残りの八曲はすべて生前のものではあるけれど、『ダブル・ファンタジー』から五曲も入っている。

二枚目は一九九七年の全二十曲の『レノン・レジェンド』である。これにはシングル・エディットではあるけれど、〝マザー〟が入り、しかし〝ウーマン・イズ～〟は入っていない。残りの八曲の内、二曲が死後リリースされたものである。

三枚目は二〇〇五年の全三十八曲二枚組の『ワーキング・クラス・ヒーロー』である。これには、さすがにシングル十三曲が入っている。しかし、曲順でちょっとイメージが違う。一枚目の一曲目が〝スターティング・オーヴァー〟で、十九曲目が〝ハッピー・クリスマス〟である。二枚目は〝ウーマン〟と〝グロウ・オールド・ウィズ・ミー〟である。死後リリースのものも六曲ある。

二枚組のベスト・アルバムは便利なのだけど、曲順によってイメージがずいぶんと違ってしまう。はっきりいって、年代順にあるのが、一番親切だと思う。

というわけで、何も決まっていないのに、新しいベスト・アルバムの心配をすることもないのだけど、提案したい（いったい、誰に?）。一枚だったら、ともかく全十三曲のシングルは入れてもらいたい。二枚組だったら、年代順にしてもらいたい。シングル以外の曲も、生前の各アルバムから満遍なく選んでもらいたい。

こんなことを書いていてもしょうがないので、二〇一〇年の十月号には僕が選んだジョン・レノンのベスト・アルバムの選曲を載せたい。今からやれば、なんとか出来るだろう。

（二〇一〇年二月号）

CamScannerでスキャン

1

ジョン・レノンの秋は生きている

生きているのを忘れてしまいそうな、暑い夏だった。ただ暑いだけだったら、なんとかしのげただろう。しかし、いつもよりも、ずっと長い夏だった。去年〔二〇〇九年〕の同じ頃は長袖のシャツを着ていたはずなのに、温度計は三十三度を示している。

そういえば、今年は四月に雪が降った。ようやく暖かくなったなと思ったら、すぐにTシャツと短パンの生活になった。それが、ずっと続いた。ビーチ・ボーイズの『終わりなき夏』は良かったのだけど、今年の夏は水風呂のないサウナのようなものだった。

そんなある日、友人から酒の誘いの電話がかかってきた。かなり、力が入っている。暑気払いといえば聞こえはいいけれど、つまり自棄っぱちになっているのだ。断る理由は何もない、僕も力を入れて酒を飲みに行くことにする。

場所はその友人の仕事場の近くで、普通のJRの駅である。とりたてて繁華街という町ではないのに、駅の近くだけで飲食店がおそらく百軒ぐらいはあるように思われる。考えてみると、おかしな町である。かつては、これほどではなかったような気がする。

この町には、母の実家があった。だから、子供の頃には、よく来ていた。その家には従兄弟

が住んでいるはずなのだけど、彼と最後に会ったのはもう十年ぐらい前になるだろうか。その家に最後に行ったのは、三十年ぐらい前になるだろう。

総勢四人で、午後五時から力を込めて飲み始めた。店がたくさんあるから、二時間もしたら別の店に行く。もう終電だからとひとりは帰ったけれど、残りの三名は勢いがついてしまった。いったいどれぐらい飲んでいるのか、分からなくなっている。

次の店へ行こうと、外に出たときに、僕は「ここから二十分ぐらいのところに母親の実家があるから、それを見に行こう」と提案して、住宅街に向かった。あとのふたりはもうどうでもよくなっているので、フラフラとついてくる。

道はだいたい覚えている。しかし、こんなに狭かっただろうか。昭和時代には、もっと広かったはずだ。ここだと思った家は、あった。ただし、表札の名前は変わっていた。ベロベロに酔っ払って、午前二時に他人の家を眺めている男。

僕が生まれ育った家は、もう僕とは無関係になっている。無関係になってから、その町には一度も行ってない。あるとき、グーグルのストリート・ヴューを見ていて、ふと思い立って探したら、シートに覆われていた。そのとき、その中では、僕が生まれ育った家が、壊されていたのだろう。

すべてがなくなってしまったような気分になった。父も母も、父の家も母の家も、すべてなくなってしまった。喪失感におそわれて、寒気がした。僕達はまた駅前に戻って、始発の電車が動き始めるまで酒を飲み続けた。

1

次の日（正確には、その日の午後）、僕は先週観た映画『ノーウェアボーイ　ひとりぼっちのあいつ』を思い出していた。ジョン・レノンの少年時代だからよく知っているストーリーだと思っていたのだけど、あの映画はそういうことではなかったのかも知れない。

しかし、『ジョンの魂』を聴くには、二日酔いがひどすぎた。まず、水を飲みたかった。

ジョン・レノン生誕七〇年没後三〇年ということで、周知のようにいろいろなものがリリースされる。『ジョンの魂』、『イマジン』、『サムタイム・イン・ニュー・ヨーク・シティ』、『マインド・ゲームス』、『ウォールズ・アンド・ブリッジズ』、『ロックン・ロール』、『ダブル・ファンタジー』（オリジナルとストリップト・ダウン・ヴァージョンと、二枚組）、『ミルク・アンド・ハニー』のリマスター。

『ザ・ヒッツ～パワー・トゥ・ザ・ピープル』というベスト・アルバム（CD一枚と、CDとDVDのセットがある）。『ギミ・サム・トゥルース』という四枚組。『ジョン・レノン・ボックス』という十一枚組。

前回リミックス／リマスターをしたのが二〇〇〇年だったから、ちょうど十年経ったということになる。この十年ではそれほど音は良くならないのではないかと思って聴き比べてみたら、今回のリマスターの意味するところがよく分かった。

初期のものはもう三十年近く経って、音が古く聴こえるから、リマスターすることにしたと、前回ヨーコは言っていた。たしかに音はずっと良くなったけれど、レコードをずっと聴いてい

CamScannerでスキャン

た人間には若干の違和感があった。

今回はそうではなくて、レコードの音に近いようにリマスターしているのである。去年のビートルズと、同じことなのだろう。これなら、音も良くなっているし、違和感もない（となると、全作僕がヨーコにインタヴューしたライナー・ノーツの、あの箱入りシリーズはどうなっちゃうのだろうか）。

さて、『パワー・トゥ・ザ・ピープル』というベスト・アルバムである。まず、ジャケットがいい。『レノン・レジェンド』も『ワーキング・クラス・ヒーロー』も、暗かった。しかし、今作はイラストとジョンの写真であって、ポップである。

ところで、数か月前に、僕は〈十月にジョンのベスト・アルバムが発売されるだろうから、そのときに僕が考えるジョンのベスト・アルバムを選曲する〉と書いた（「七〇年目の十二月八日に向けて」）。曲は選んだ。しかし、曲順までは出来なかった。申しわけない。

理由はというと、今月号を見れば分かってもらえるだろう。やたらと、僕の原稿が載っている。ビートルズとジョン・レノンとドアーズだから。ポール・マッカートニーが延期になって、助かった。

そういうわけなので、とりあえず曲目だけ書いておく。曲順は、そのうちに。

インスタント・カーマ

マザー

ワーキング・クラス・ヒーロー
リメンバー
ウェル・ウェル・ウェル
パワー・トゥ・ザ・ピープル
ギミ・サム・トゥルース
ハウ?
ウーマン・イズ・ザ・ニガー〜
ニュー・ヨーク・シティ
ホワット・ユー・ガット
スケアード
ノーバディ・ラヴズ・ユー
スタンド・バイ・ミー
グロウ・オールド・ウィズ・ミー

なお、来月号から、〈ロックの名盤を語る〉というような連載が始まることになった。いろいろと考えているので、期待してもらいたい。

〈二〇一〇年十一月号〉

CamScannerでスキャン

凱旋パレードは終わらない

ピンク・フロイドが初めて「ロッキング・オン」の表紙になったと、五月号〔二〇一三年〕に書いてあった。また、ビートルズやローリング・ストーンズは創刊以来何度も表紙になったとも書かれてあった。

それは間違っていないのだろうけれど、いちおう書いておくと、七〇年代八〇年代には、ビートルズは一度も「ロッキング・オン」の表紙にはなっていないはずである。これは、おそらく間違ってはいないだろう。

七〇年代には、ジョージ・ハリソンとジョン・レノンが一回ずつ表紙になったのは、覚えている。それだけである。ポール・マッカートニーが表紙になったのは、一九九〇年の来日のときが初めてである。ほぼ同時期に来日したローリング・ストーンズが表紙になったのだから、ポールも表紙にすべきだろうと僕が強硬に主張したのである。

それまでにビートルズは表紙になってはいなかったのだから、七〇年代八〇年代には一回もなかったはずである。どうしてそうだったのかというと、「ロッキング・オン」も含めて当時のロック・ファンの間では〝ビートルズなんて……〟というような風潮があったというしかな

い。

これは前にも書いたことがあったと思うのだけど、七〇年代には僕はビートルズばかり書くということで「ロッキング・オン」の読者にも編集部内にも変な目で見られていた。ああ、思い出してきた。

一度我慢が出来なくなって、二〇代中頃に〝俺は五十歳になっても、ビートルズを聴いている。お前たちも五十歳になっても、EL&Pを聴いていろよな〟と書いたことがあった。今では、いうまでもなく、僕はとっくに五十歳なんか過ぎていて、あと二年経つと『サージェント・ペッパーズ』のB面の二曲目が現実になる。

ときどき、昔からの読者だという人に声をかけられることがあって、そういうときに僕がちょっと身構えてしまうのは、こういうことがあったからである。かといって、〝一九七五年に、ビートルズを馬鹿にしていなかった？〟と訊くわけにもいかない。

こういうように、七〇年代のビートルズ・ファンやポール・ファンには、一種の被害妄想のようなところがある。これはもう一生変わらないんだろうな。

1

ポール・マッカートニーのアーカイヴ・コレクションの第四回目（五枚目）は、『ウイングス・オーヴァー・アメリカ』になった。通常版はSHM-CD二枚組で、三千八百円。いつものように、スーパー・デラックス・エディションというボックスもある。本篇のSHM-CD二枚、カウパレスでの未発表曲八曲のSHM-CD、『ウイングス・オーヴァー・ザ・ワール

CamScannerでスキャン

ド」という当時のCBSテレビの七十五分のドキュメンタリーDVD、四冊の豪華ブックレットで、一万八千円。

それと同時に、映画『ロック・ショウ』も発売される。DVDが四千五百円、ブルーレイが五千五百円。Tシャツ付きのヴァージョンは二千円高くなって、六千五百円と七千五百円。これまでビデオやレーザー・ディスクには未収録だった七曲も含めて、全二十八曲約二時間十分ということになる。

つまり、通常盤CDとDVDなら、八千三百円。スーパー・デラックス・エディションとTシャツ付きブルーレイなら、二万五千五百円。

悩むだけ悩みなさい、同志達よ。

いうまでもなく、『ウイングス・オーヴァー・アメリカ』も『ロック・ショウ』も、ポール・マッカートニー・アンド・ウイングスの一九七六年のアメリカ・ツアーのライヴである。

前述のように、七〇年代はビートルズは嫌な目で見られていて、ジョン・レノンとジョージ・ハリソンはそれでもソロ・ミュージシアンとして評価されていたというのに、はっきりいってポール・マッカートニーはロック・ファンになめられていたのである。

それが、『バンド・オン・ザ・ラン』がスーパー・ヒットになって、それ以後発売するレコードもみんなビッグ・ヒットになって、もはや誰も何も言えなくなって、それで行なって大成功したツアーなのである。三枚組のレコードは、ずっしりと重かった。

I

一曲目の〝ヴィーナス・アンド・マース～ロック・ショウ～ジェット〟を聴いたときには、「ザマーミロ、バカヤロー」と思った。誰がザマーミロで誰がバカヤローなのかというと、もちろんポールをなめていた奴等である。

つまり、これは単なるスーパースターのハッピーなライヴ・アルバムではないのである。かつて世界の一番上にいた人が、バンドが解散して、それ以後のロック・ファンになめられて、そこから六年かけて戻って来たというライヴ・アルバムなのである。

これと同じことが、もう一度あった。ウイングスが解散して、八〇年代後半ポールは無視されるようになった。それで行なったのが一九八九年からのワールド・ツアーである。その結果が、三枚組レコード『トリッピング・ザ・ライヴ・ファンタスティック』である。リチャード・レスター監督の、一時間半の映画『ゲット・バック』なのである。

僕にとってのポールのライヴ・アルバムは、『ウイングス・オーヴァー・アメリカ』と『トリッピング・ザ・ライヴ・ファンタスティック』である。ポールのライヴ映像は、『ロック・ショウ』と『ゲット・バック』である。

それ以後も、ポールのライヴCDやライヴDVDは、いくつも発表されているけれど、それは僕には重要ではない。もはや、ロック界の超大物として認められているからである。

つまり、『ウイングス・オーヴァー・アメリカ』と『トリッピング・ザ・ライヴ・ファンタスティック』は、パンチを受けるだけ受けてからの、ストレートのノック・アウト勝利なのである。凱旋パレードなのである。

なんとなく、被害妄想がこんがらがっちゃったような気がしないでもない。今ここに、本物のウイングス・オーヴァー・アメリカ・ツアーのプログラムがある。貰ったのには間違いはないのだけど、誰がくれたのだろうか。当時の数少ない同志だったのに。

ちなみに、ポールが着ている衣装は、山本寛斎がデザインしたものである。〝ザ・ロング・アンド・ワインディング・ロード〟の間奏がバロックふうなのは、このときだけである。あと、なんかなかったかな……。

〈二〇一三年七月号〉

1

一九六一年初夏、まだ何も始まっちゃいなかった

ついに、ポール・マッカートニーのジャパン・ツアーが、十一月〔二〇一三年〕に決定した。実をいうと、数年前から、今年はポールの来日があるらしいという希望的観測を含んだ噂が毎年流れていて、そして空しく消えていっていた。ようやく、それが本当になったのだ。二〇一三年はポール・マッカートニーとリンゴ・スターが来日した年として、ファンには記憶されることだろう。

最近のポールは一週間から十日間ぐらいの移動距離の短いツアーしかやってはいなくて、もうワールド・ツアーは行なわれないのではないかと思われていた。しかし、一週間ずつでも、続けていけば、それはワールド・ツアーになるということなのだろう。

ここのところのメニューを見ると、〝アンド・アイ・ラヴ・ハー〟、〝エイト・デイズ・ア・ウィーク〟、〝ビーイング・フォー・ザ・ベネフィット・オブ・ミスター・カイト〟、〝ラヴリー・リタ〟、〝ユア・マザー・シュッド・ノウ〟、〝オブ・ラ・ディ・オブ・ラ・ダ〟、〝オール・トゥゲザー・ナウ〟などが演奏されている。

また、〝アナザー・デイ〟、〝ハイ・ハイ・ハイ〟、〝ジュニアズ・ファーム〟、〝リッスン・ト

ゥー・ホワット・ザ・マン・セッド〟なども歌われていて、楽しみである。ともかく、なんとしてでも十一月までは生きていなければならない。

しかし、なんとなく憂鬱な気分にもなっている。ポールのステージを見るのは、これが最後になってしまうような気がするのである。もちろん、もうポールが来日しないとか、演奏しなくなるということではない。それをいうなら、来日しても僕が見に行けなくなる可能性のほうが強い。

だから、根拠はないのである。根拠はないのだけど、僕がポールのコンサートを見るのはこれが最後だという気がしてならない。なんだか、分からない。分からないけれど、憂鬱なのである。

とりあえず、最後のアビイ・ロード・メドレーが終わったら、ポールに五十年間ありがとうと言おうと思っている。

一九六四年に〝抱きしめたい〟を聴かなかったら、僕の人生はいったいどういうものになっていたのだろうか。

先月はレイ・マンザレクが亡くなったことを書いたのだけど、今月はトニー・シェリダンが亡くなったことを書くことになった。トニー・シェリダンは二月十六日に、ハンブルクで亡くなったという。七十二歳だったそうだ。ということは、一九四〇年生まれということになるわけであって、ジョン・レノンと歳が同じだったのである。

1

トニー・シェリダンといえば、なんといっても正式にレコード・デビューする前のビートルズをバックにして、一九六一年六月にハンブルクでレコーディングしたというのが、ロック史に残る出来事になった人物である。

このレコードは発売当時にはほとんど話題にもならなかったのだけど、その後ビートルズがスーパースターになったために注目されて、以後五十年あまりも何度もタイトルを変えて発売され続けているという、不思議な一枚なのである。

当時、トニー・シェリダンのバック・バンドはビート・ブラザーズと名付けられていて、誰が演奏してもそれは変えられなかった。そのために、六〇年代初めには、トニー・シェリダンのLP約二枚分の曲のバックはすべてビートルズだと思われていたときもあったのだけど、八〇年代後半に、ビートルズは八曲しか演奏してはいないということが明らかになった。

それにしても、このレコードが奇妙なのは、トニー・シェリダンのレコードなのに、ジョンがリード・ヴォーカルの〝エイント・シー・スイート〟があったり、ジョンとジョージの共作のインストルメンタルの〝クライ・フォー・ア・シャドウ〟があったりすることである。

いったい、どういうことだったのだろうか。トニー・シェリダンはイギリス人で、この頃にはドイツに行っていて、そこそこの人気があったから、レコードを作ったのではなかったのか。

ちなみに、このレコードからシングル・カットされたドイツ盤の〝マイ・ボニー〟を欲しがった客がいたために、レコード店の店長だったブライアン・エプスタインがビートルズに興味を持ったというエピソードは、よく知られている。

ビートルズがスーパースターになってから、このレコードから何曲もシングル・カットされていて、イギリスでもアメリカでも、かなりのヒットになっている。まず、〝マイ・ボニー〟はイギリスではチャートの三十八位まで行き、アメリカでは二十六位まで行っている。〝エイント・シー・スイート〟は明らかにヴォーカルがジョンだと分かったためか、イギリスでは二十四位でアメリカでは十九位というスマッシュ・ヒットになっている。〝ホワイ〟も発売されて、アメリカで八十八位になっている。

当時、日本でも八枚のシングルが発売されていたのだけど、実際にビートルズが演奏していたのは三枚だけで、つまり六曲だけだった。今回、そこに残りに二曲で一枚作って、全九枚の日本のシングル・ボックス・セットが発売されることになった。

タイトルは『ビートルズとトニー・シェリダン／シングル・ボックス』なのだけど……なんだかなあ。いちおうトニー・シェリダン追悼企画なのだから、『トニー・シェリダン（とビートルズ）／シングル・ボックス』くらいが正しかったのではないだろうか。

全九枚十八曲の内、ビートルズが演奏しているのは四枚八曲なのだから。はっきりいって、他のバンドが演奏している五枚十曲はどうでもいい。おそらく、一回聴いたら、もう生涯聴くことはないだろう。ビートルズだけの全四枚八曲にすれば、『ビートルズとトニー・シェリダン／シングル・ボックス』でもおかしくはなかったのに。

それでも、いろいろなヴァージョンを集めているところは、びっくりした。〝マイ・ボニー〟などは、ステレオとモノラル、イントロありとイントロなし、それが英語と独語と、六ヴァー

ジョンも収録されている。全九枚で五十三ヴァージョンというのは、たいしたものだ。しかし、ビートルズは二十六ヴァージョンだからね。

今回、久しぶりに聴いてみて、気がついたことが多かった。まず、ビートルズが演奏している八曲以外は、トニー・シェリダンもバック・バンドも、明らかに生彩を欠いている。誰もが知っているスタンダード曲を、ロックンロールに崩して歌うというのが、トニー・シェリダンのスタイルなのだけど、それがまったく生かされていない。ビートルズと比べると、他のバンドは格が違い過ぎる。

ビートルズは正式レコード・デビューの約一年半も前であって、ドラマーもピート・ベストなのだけど、すでに六〇年代前半のブリティッシュ・ビート・グループになっていて、かっこいいっちゃありゃしない。エルヴィス・プレスリーのフォロワーのトニー・シェリダンを生かしているのは、ビートルズだけである。

あの〝マイ・ボニー〟のリード・ギターはジョージだとずっと思われていたのだけど、実はトニー・シェリダンだという。一九六一年にこれだけのソロが弾けたというのは、トニー・シェリダンはかなりのギタリストだったのではないだろうか。

それにしても、〝エイント・シー・スイート〟のジョンのヴォーカルが凄い。このとき、まだ二十歳のガキだぜ。どうして、こんなヴォーカルが出来たんだろう。ジョンとポールのバック・コーラスが出来上がっているのにも、驚いちゃうよね。

二十歳のジョンと十八歳のポール、まだ何も始まっていなかったのである。

〝抱きしめたい〟を聴く二年前の出来事であって、僕は始めることさえ考えたことはなかった。

（二〇一三年九月号）

CamScannerでスキャン

ポールを肯定するんだ

十一月十八日〔二〇一三年〕、東京ドームに到着したのは、午後四時半だった。待ち合わせていた友達と、すぐにグッズ売場のテントに向かう。少なくとも、プログラムとTシャツぐらいは買いたい。前日までみんなで情報交換して、四時半に並べば五時半には買えて、十時までの長丁場だから、軽く食事をしようということになったのだ。

で、行列に向かったのだけど、最後尾が分からない。延々と歩いて行ってその位置が分かったときに、僕達は諦めた。これでは開演時間の七時になっても、辿り着けないだろう。とりあえず、あっちこっちでプログラムだけは売っているので、それを確保する。買うときに「中では、Tシャツは売ってないの?」と訊ねると、係員が「数は少ないけど、売ってますよ」と言う。これに賭けるしかない。

こういうふうに外のテントでグッズを売るようになったのは、前回の二〇〇二年の〈ドライヴィング・ジャパン・ツアー〉からだろう。一九九〇年の〈ワールド・ツアー〉も一九九三年の〈ニュー・ワールド・ツアー〉もこんなものはなくて、ドームの中の売店で普通に買うことが出来た。前回は列に並ぶ時間がなくて一度は諦めたのだけど、中でプログラムだけは買うこ

とが出来た。Tシャツは買えなかった。

ともかく、あわてて食事をして、開場時間の五時過ぎに戻ったのだけど、列がなかなか進まない。入場出来たのは、五時半を回っていただろう。しかし、幸いなことに、Tシャツを買うことは出来た。荷物も多かったので、二十一日の楽しみのために一枚だけにした。これが失敗だった。二十一日には、狙っていたTシャツは、ソールド・アウトになっていた（プログラムも売り切れで、とりあえずプログラムとTシャツ一枚は買うことが出来たので良しとすることにした）。

ようやく落ち着いて、トイレに行ったり煙草を吸ったりする。自分の席に向かうと、思っていたようにやたらと友人知人と逢う。で、つい話し込んでしまう。これは二十一日も同じことだった。

ステージでは、ビートルズの曲やポールの曲やカヴァーの曲でDJをやっている。しかし、白い服を着たその男がいなくなっても音は続いていたから、あいつはエアDJだったのだろう。隣に座った青年が大阪も福岡もみんな行って来たというので、話を聞く。ホワイト・アルバムのポスターのような映像が流れ始めて、青年が「あと二十分ぐらいですよ」と言うので集中する。

そして、ポール・マッカートニーが登場する。もちろん、〝エイト・デイズ・ア・ウィーク〟である。ほぼ、呆然自失となる。一九六六年、一九九〇年、一九九三年、二〇〇二年と、ライヴを見ている。一九八二年三月二日には、ロンドンで会って握手もしている。一九六四年以来

CamScannerでスキャン

1

ずっと音楽を聴いているその人が、あそこにいる。
三曲目の〝オール・マイ・ラヴィング〟を聴いて、僕はこれでいいんだと激しく肯定した。今までに何度か見た〝オール・マイ・ラヴィング〟は、決して納得出来るものではなかった。ヴォーカルは引き摺り気味で、母音が強すぎる。青春のラヴ・ソングの思いが、まったくしなかった。しかし、今回はそうではなかった。あのルックスだから耳元でささやいたらどんな女の子でも落とせただろう二十一歳のラヴ・ソングを、三回目の結婚をしたばかりだとはいえ七十一歳のおじいさんが歌っているのである。そうだ、肯定するんだ。ポール・マッカートニーなんだ。
二時間四十分の間には、声が掠れることもあったし、リズムがずれることもあったのだけど、それがどうした。ポール・マッカートニーという五十年間ロックンロールで走って来た人が、今ここにいるんだ。その存在を肯定するべきだろう。あそこにいるのが、ポール・マッカートニーなんだ。
どうして、いつも〝レット・ミー・ロール・イット〟をやるのか。あのリフが弾きたいのだろう。どうして、いつも〝死ぬのは奴らだ〟をやるのか。爆発させたいのだろう。一曲終わる度にするポールのどや顔が、とてもいい。そうだ、ポールは「どうだ、見たか」と言ってもいいんだ。
〝ペイパーバック・ライター〟のときに「この曲のレコーディングで使った」と言って、エピフォンを弾く。ということは、あのリフはポールだったということになる。ビートルズ日本公

演でジョンとジョージが弾いていたものと、同種のものだろう。どうして、ビートルズは、ひとりが買うと、みんなが買うんだろう。

〝アンド・アイ・ラヴ・ハー〟はオリジナルどおりのアレンジで、素晴らしかった。『アンプラグド』のように、ブルースっぽくやる必要はない。これも青春のラヴ・ソングだ。違和感はまったくない。

来日したときに高見展と内田亮〔いずれもロッキング・オン〕と〝ジュニアズ・ファーム〟と〝ユア・マザー・シュッド・ノウ〟が楽しみだと言っていたのだけど、メニューから押し出されてしまった。しかし、〝アナザー・デイ〟も〝オール・トゥゲザー・ナウ〟も、どうして演奏するのか分からない〝ビーイング・フォー・ザ・ベネフィット・オブ・ミスター・カイト〟も、みんな良かった。

今回よく分かったのは、ウィックスがバンドをまとめて引っ張っているということだった。一九八九年から二十四年間も、ポールがいっしょに行動している意味が分かったような気がした。

最初のアンコールの一曲目が〝デイ・トリッパー〟というのも、凄まじい。もう、〝ハイ・ハイ・ハイ〟も〝ゲット・バック〟も飛んでしまった。

最終曲が〝ゴールデン・スランバーズ〟からのメドレーだということは、もちろん知っていた。しかし、「ワンス・ゼア・ア・ウォズ・ア・ウェイ……」と始まったら、異空間に行ってしまった。そう、かつては家に帰る道があったんだけど、もうないんだ。だけど、泣いちゃあいけ

ないんだ。

一九六九年秋、あなたが「ボーイ、ユーアー・ゴナ・キャリー・ザット・ウェイト」と歌った頃、僕は高校を退学になった。そして二〇一三年冬、ここにいる。

安田顕さんは前回大阪で見て、「六〇のおっさんを見て、三〇のおっさんが泣いたんですよ」と言っている。今回、七十一歳のおじいさんを見て、六十二歳のおじいさんが泣いている。

ポール・マッカートニーの存在の歴史の中に、僕のほとんどの人生は入っている。少なくとも、一九六四年から二〇一三年まで、僕の人生の約六分の五は、ポール・マッカートニーの音楽の中にある。

ポール、五十年間、ありがとう。もう少し、生きてみようと思っています。

〈二〇一四年一月号〉

梅雨と本とビートルズ

それまで部屋の中を走りまわっていた三歳の孫が、ビールを飲んでいる僕の横に来て、真面目な顔になって、言った。
「どうして、髪の毛を白くしてるの?」
それを聞いて、娘が笑っている。
「あのね、これは白くしたんじゃなくて、白くなっちゃったんだよ」
孫は分かったような分からないような表情になって、自分の母親（つまり、僕の娘）のところに行った。
そりゃあ、白くもなるさ。六十三歳だからね。来年、〝ホエン・アイム・シックスティー・フォー〟である。「ホエン・アイ・ゲット・オールダー、ルージング・マイ・ヘアー」である。がんばれ、ザック・ジャパン。僕がザッケローニに親近感を持っているのは、数年後にはああいうヘア・スタイルになるだろうと思っているからである。
他の人のことは分からないけれど、僕の友達の年齢層は広い。同じ六〇代はもちろんであって、五〇代もいるし、四〇代もいるし、三〇代もいるし、二〇代とだって、いっしょに酒を飲

んでいる。

それはいいのだけど、僕には飲んでいるうちに相手と同じ年代だと思い込んでしまうという性癖がある。だから、絶対に説教などはしない。しかし、三〇代二〇代といっしょになって騒いだりしてしまう。本当は、止める立場なのに。

同年代といっしょだと、まあ落ちつく。同年代の友達は、だいたいが音楽関係か出版関係が多い。そういう人間にとっては、同年代でも他の仕事をしている人が分からない。もうすぐ定年退職だけど、やることがないと言う。趣味を探さなきゃと言う。意味が分からない。だいたい、趣味というのは、探すものなのだろうか。好きで、ずっとやってきたものなのではないだろうか。

我々には、音楽と本がある。実際に、CDと本があれば、僕は三日ぐらいは家に閉じこもっていられるだろう。あと、酒と煙草か。三日も経てば、冷蔵庫の中が寂しくなるから、買い物に出かけて、また三日は閉じこもっていられるだろう。

買ってくる食料だって、どうっていうことはない。友達によく言われるのが、安上がりという科白(せりふ)である。僕の大好物は、崎陽軒のシウマイなのである。あの十五個五百五十円の奴だ。消費税が八パーセントになってからはまだ買ってないけれど、上がっても十円か二十円だろう。崎陽軒のシウマイがあれば、僕はずっと酒を飲んでいられる。

ここで音楽について語ってもしょうがないので、本にしよう。かつては一月に二十冊は読んでいたのだけど、今では十冊前後だろう。

最近読んで面白かったのは、『禿鷹の要塞／荒山徹』、『夜の旅その他の旅／チャールズ・ボーモント』、『「大相撲八百長批判」を嗤う／玉木正之』、『新宿末廣亭うら、喫茶「楽屋」／石川光子、石井徹也』などである。

今迄に、どれだけのビートルズ関係の本を読んできたのだろうか。十冊や二十冊ではなくて、三十冊や四十冊でもなくて、五十冊や六十冊でもないだろうし、分からない。

最初に読んだのは、ビリー・シェファードの『これがビートルズ』である。これはイギリスのビートルズのファン・マガジン「ザ・ビートルズ・マンスリー」に連載されたものをまとめた一冊で、一九六四年一月にエド・サリヴァン・ショーに出演したところで終わっている。日本で出版されたのは、一九六五年三月である。おそらく、これが最初のビートルズ・ストーリーだと思う。

ビートルズ・ストーリーの決定版といったら、やはりハンター・デヴィスの『ビートルズ』だろう。現在は増補版が出ていて、これは最重要だろう。

『ザ・ビートルズ・リヴァプール／ロン・ジョーンズ』はリヴァプールのインフォメーションで買ったもので、タイトルどおりにリヴァプール時代のビートルズについて書かれている。さすがに地元で、学校の集合写真まで載っている。

『オール・トゥゲザー・ナウ／ハリー・キャッスルマン、ウォリー・ポドラジック』を見つけたときは、嬉しかった。これはイギリスとアメリカのディスコグラフィーで、僕が買ったのは

I

一九七五年で、おそらく新しい版が出ているはずで、洋書店に行く度に探している。
『ア・ハード・デイズ・ナイト』は同名映画のシナリオと写真が載ったもので、アメリカに行った友達が買ってきてくれた。これなんか、日本版を出せばいいのに。
アラン・オルドリッジの『ザ・ビートルズ・イラストレイテッド・リリックス』は、おなじみのビートルズのイラストと詞の本である。これも、日本版は出ていなかったよね。
アンディー・バビアックの『ビートルズ・ギア』は、ビートルズの楽器と機材について書いたものだ。一番のギター・フリークは、やはりジョージだったようだ。
個人のものでは、まずジョンの『イン・ヒズ・オウン・ライト』と『ア・スパニアード・イン・ザ・ワークス』だろう。日本語版も出ているけれど、ペンギンで入手出来るだろう。
『レノン・リメンバーズ』はヤン・ウェナーにジョンが語ったもので、『ビートルズ革命』、『回想するジョン・レノン』に続く第三版である。
『ジョン・レノン　家族生活』はジョンとヨーコのアシスタントだった西丸文也の写真集で、ジュリアンがショーンを抱いているという珍しい写真まである。
『ジョン・レノン　ロスト・ウィークエンド』はメイ・パンの書いたもので、なんてったってビートルズ解散後のジョンとポールのツー・ショットが載っている唯一の本だろう。
『ポール・マッカートニー　メニイ・イヤーズ・フロム・ナウ』はポールがビートルズ時代までを語ったもので、ロッキング・オンで出版した。
『ジョージ・ハリソン自伝』はタイトルどおりだけど、あまり内容は多くはなくて残念である。

周囲の人のものでは、まずジョージ・マーティンの「メイキング・オブ・サージェント・ペパー」だろう。同名のビデオもあるけれど、本のほうが面白い。

「もう一人のビートルズ」はピート・ベストのもので、シンシア・レノンには「瓦解へのプレリュード」と「ジョン・レノンに恋して」と二冊ある。

ビートルズのスタッフだった人のものは、「ビートルズも人間だった／デレク・テイラー」、「ビートルズ　ラヴ・ユー・メイク／ピーター・ブラウン、スティーヴン・ゲインズ」、「想い出のビートルズ／アリステア・テイラー他」、「ビートルズ売り出し中！／トニー・バーロウ」などがある。第三者が書いたものでは、イアン・ピールの「ポール・マッカートニーとアヴァンギャルド・ミュージック」と恩蔵茂の「ビートルズ日本盤よ、永遠に」が面白い。

もちろん、まだまだあるけれど、とりあえずここまでにしよう。

そして、今回、井上ジェイと藤本国彦の共著で、「ポール・マッカートニーUK盤コンプリート・ガイド」が出版された。これはポールのレコード、CDのイギリス・オリジナルのコンプリート・ガイドで、版違いまで載っている。井上君は三年前に同じシリーズでビートルズをやっていて、正に労作である。はっきりいって、これはもう図鑑である。

実は、先日、この出版記念の会があった。初めは同年代の同業者と話していたのだけど、気がついたらハワイから来たという大学生四人と話し込んでいる自分を発見した。

〈二〇一四年八月号〉

CamScannerでスキャン

Ⅱ

CamScannerでスキャン

エリック・バードンもジャックスも見た

前号にこれまでに見てきたコンサートの中から素晴らしかったものを五つ挙げるという頁があったのだけど、僕は一番目のビートルズしか書かなかった。書いているうちにのめり込んでしまったわけで、だから今号では残りの四つについて書くことにする。
だいたいが、五つ挙げろといわれて、迷った。そりゃあそうだろう。六〇年代からどれだけの数のコンサートを見てきたのか分からない。なおかつ、前にも書いたことがあったけれど、見たのか見ていないのかはっきりとしないものもある。なんらかの括りを作らなければ、とても五つ挙げるなどということは出来るわけがない。
それでまず考えたのが、僕が中学生高校生のときのヒーローである。ブリティッシュ・ロックの五大バンドである。つまり、ビートルズ、アニマルズ、ローリング・ストーンズ、キンクス、フーである。最初に見たのがビートルズで一九六六年、最後に見たのがフーで二〇〇四年。これはひとりの男の人生の半分以上の時間にもなる。三十八年を費やして見た五つのバンド。これはドキュメンタリーになる。ということは……一頁で書くことなどは出来ない。
だいいち、ニール・ヤングはどうする、ロイ・ブキャナンはどうする、ニック・ロウはどう

CamScannerでスキャン

する、ロン・セクスミスはどうする。それよりも、ポール・マッカートニーはどうする、ジョージ・ハリソンはどうする。そういうわけで、ほぼ混乱状態だったわけで、ビートルズだけでも書けたのは、それが一番であることに間違いはなかったからである。それでも、なんとか五つ挙げたのだから、残りの四つについて書くことにする。では、始めます。

★エリック・バードン・アンド・ブライアン・オーガー・バンド

エリック・バードンはもちろんアニマルズのヴォーカリストで、その歌唱力の凄まじさはたとえようがない。僕は古今東西一番のシンガーだと思っている。この一九九一年の来日に合わせて僕が企画してエリック・バードンとアニマルズのCDを五枚作ってもらって（四枚は日本初のCD化）、そのライナー・ノーツに〝生涯一歌手〟と書いた。もちろん、当時の野村克也の〝生涯一捕手〟にかけたわけで、担当のKさんは嫌がっていたけど。

彼の一回目の来日はアニマルズで一九六五年で、僕はテレビでしか見てはいない。二回目はエリック・バードンとアニマルズで一九六八年で、僕はチケットも買ってあったのだけど、これもテレビでしか見てはいない。つまり、これがあのアンディー・サマーズがメンバーだったときのやつで、ツアーの途中で帰国してしまったのだ。当日会場に行ってそれを聞かされた、高校二年生の僕が不憫である。三回目が一九八三年のオリジナル・アニマルズのリユニオンで、初めて見たエリックは予想通りに素晴らしかった。そして、四回目が一九九一年のエリック・

バードン・アンド・ブライアン・オーガー・バンドである。
このときの僕は密着取材と称して、ほぼ追っかけだった。彼が東京にいる間は、昼頃にはホテルに行って、他の人の取材を受けるといえばいっしょに行って、買い物をするといえば銀座まで連れて行って、サウンド・チェックも見たし、食事もした。主催はスマッシュで、日高さんは呆れたのか「ステージに上がって、MCをしろ」と言った。で、やりました。
それでよく覚えているのは、演奏前にステージで喋っていたら、客席の後ろのドアが開いて、渋谷が入って来るのが見えたことだ。で、喋っているのが僕だと分かった途端に、あいつはゲラゲラ笑い出してロビーに出て行ってしまった。まったく、失礼な奴だ。どれだけ、動揺したことか。
東京では二回コンサートがあったはずで、もちろんどちらも素晴らしかった。リユニオン・アニマルズでは他のメンバーに気をつかって抑えているようなところがあったけれど、このときはエリックのヴォーカルは大爆発した。というよりも、やりたい放題といったほうが正しいかも知れない。ブライアン・オーガーがバンドをまとめていて、うまくコントロールしていた。
このメンバーでは一九九三年カリフォルニアでの『アクセス・オール・エリアズ　ライヴ』という二枚組のCDが出ていて、これを聴くとあの至福の日々を思い出す。エリック・バードンはあれ以来日本には来ていないわけで、もうそろそろ聴いてみたい。フジ・ロックでどうですか、日高さん？

などと書いているうちに、原稿用紙の五枚目も終わりに近づいてきてしまった（現在のロッキング・オンで、原稿用紙に字を書いているのは僕だけらしい）。あと三つも書けるのだろうか。もう六枚目に入ってしまった。それでは、最後に書いたジャックスを。

★ジャックス

前号には一九六六年と書かれていたのだけど、もちろんこれは間違いで一九六九年である。これが僕が見た唯一のジャックスのコンサートで（この約四か月後に解散）、今でもよく覚えている。というのは、終わって会場の外に出たら、世界がまったく違って見えたのである。ほんの数時間前の新宿とは、別のように思えたのである。

それだけ、ジャックスの世界は圧倒的だったということだろう。もちろんそれまでにもレコードは毎日のように聴いていたけれど、やはりライヴというのは伝わるものが違うのだろう。当時、日本語でロックが出来るか否かなどという、今では信じられないような論争があったのだけど、そんなものは一曲目の〝からっぽの世界〟でぶっ飛ばしてしまった。限りない未来が見えたといっても、言い過ぎではない。

僕の人生に影響を与えたということでは、ビートルズとジャックスのコンサートが双璧ということになる。なんていったって、このジャックスのコンサートを見た次の日（つまり、一九六九年四月一日）、僕は初めてのオリジナル曲を作って、それは最終的に〝傷だらけのガラス

ま」という曲になって、レコードやCDにも収録されている。

つまり、ジャックスを見なければ、僕は曲を作ったり、歌ったりしていなかったのである。まったく異なった人生になっていたかも知れないのである。やはり、ロック・コンサートは鑑賞するものではない。人生にかかわるものなのである。

（二〇〇九年十二月号）

凄い人、ラヴィ・シャンカール

ラヴィ・シャンカールについて論評出来る人は、日本にどれぐらいいるのだろうか。実際にシタールを演奏している人、そしてその研究をしている人。百人とはいわなくても、千人は難しいのではないだろうか。数百人というのが、いいところだろうと思われる。

しかし、ラヴィ・シャンカールの知名度は、圧倒的に高い。特に、我々のように、六〇年代七〇年代のロックを聴いてきた人間は、全員知っている。そうではなくても、ビートルズのファンならば、みんな知っている。いうまでもなく、ジョージ・ハリソンが彼に師事して、ビートルズにシタールを導入したからである。

ビートルズが取り入れれば他のバンドも取り入れるというのは、あの当時は当たり前の風潮だった。かなりのバンドが、シタールを使ったレコードを作っているはずだ。しかし、ジョージのように、時間をかけて習得したわけではないから、あくまで一過性のものだった。彼等にとってのシタールは、一種の〝気分〟だったのである。

どういう気分だったのかというと、それまでの西洋音楽では考えられなかった音色やフレーズだから、異世界を表現するものだった。当時の異世界といったら、ドラッグである。ラー

ガ・ロックなどという言葉もあった。つまり、サイケデリックな演奏には、便利なものだったのである。

ロック・バンドだけではなくて、六〇年代後半のヒッピーやフラワーというのは、西洋文明の否定ということもあったから、インドのシタールは飛びつくのにはぴったりだった。サイケデリックな世界も、ヴェトナム戦争で兵士の恐怖感を和らげるために、アメリカ軍が意図的にマリファナを配布していたという話もあるから、若者の間では周知のことだったのである。

なんてったって、ラヴィ・シャンカールはモンタレー・ポップにもウッドストックにも出演しているのである。そう、ジミ・ヘンドリックスのような流行だったのである。今、アメリカの資料を見たら、ラヴィ・シャンカールは他のバンドにとってはファッショナブル・ギミックと書いてあった。これが正しかったのだろう。

もちろん、シタールにしっかりと向き合ったバンドもいただろう。東洋の思想を学んだミュージシャンもいただろう。しかし、七〇年代も中頃になると、誰もいなくなった。そういう言動をしているのは、最初に始めたジョージだけになった。

たとえば、エレキ・シタールという楽器がある。つまり、シタールの音色が出せるエレキ・ギターである。そう、彼等が欲しかったのは、効果音としてのシタールの音色である。ジョージ以外は、そんなものだったのである。

実は、歌手をやっていた頃に、僕もシタールに触ったことがある（シタールを弾いたなどとは、絶対に言えない）。ミュージシャンの友人の家に遊びに行ったら、あったのだ。ともかく

大きくて、当然ギターよりも重い。ジョージがやっているように座って構えたのだけど、バランスをとるのさえ難しい。

弦は針金のように固い。ピックは指に嵌めるようになっていて、これがきついというよりも痛い。大きさが合っていないのかと思ったら、それが普通なのだという。つまり、痛みに耐えて、鉄のピックで針金の弦を弾くようなものなのである。その友人も借りてきたと言っていたから、本当は違うのかも知れない。ただ、ジョージは凄いなあとだけ思った。

そういうわけだから、我々の世代はレコード棚を探せば、ラヴィ・シャンカールは一枚や二枚は出てくるはずだ。しかし、いったい何回聴いたのだろうか、買ったときに一回、それから四十年で二〜三回といったところだろう。聴けばなるほどと思うのだけど、それからどうすればいいのか分からない。

つまり、インド音楽の法則も分からなければ、形式も分からない。畏敬の念は持っていても、どうすることも出来ない。ラヴィ・シャンカールのレコードを持っている九十パーセントの人は、僕と同じだろうと思われる。結論は、ジョージは凄いなあである。

ラヴィ・シャンカール&ジョージ・ハリソン名義の『コラボレーションズ』というボックス・セットが発売される。もちろん詳細な解説がつくのだろうけれど、今は資料らしい資料もない。CD三枚とDVD一枚があるだけだ。だから、間違いがあっても、許していただきたい。

ダーク・ホース時代に、ジョージがプロデュースしたラヴィ・シャンカールの作品である。そ

れぐらいは分かる。

まず、『シャンカール・ファミリー・アンド・フレンズ』。ダーク・ホース・レコードの第一回発売作品として、一九七四年九月に発表されている。ラヴィ・シャンカールとインドのミュージシャン。そして、ジョージ・ハリソン、リンゴ・スター、ビリー・プレストン、クラウス・フォアマン、ジム・ケルトナー、ニッキー・ホプキンス、トム・スコットが参加している。といっても、インド音楽とロックが融合しているなどというものではなくて、あくまでもラヴィ・シャンカールである、前半（つまり、レコードのA面）はインドの古謡のようで、後半（B面ね）はラヴィ・シャンカールが書き下ろしたバレエ音楽だという。

次は、『ミュージック・フェスティヴァル・フロム・インディア』で、一九七六年五月にダーク・ホースから発表された作品である。二十人ぐらいのインドのミュージシャンが参加している、完全なインド音楽である。

DVDの『ミュージック・フェスティヴァル・フロム・インディア』は、そのレコーディングの前にロイヤル・アルバート・ホールで行なわれたコンサートである。まずこのコンサートが目的でレコーディングは次だったから、このタイトルなのだろう。映像は散逸していたものを、なんとか集めたのだという。最初の一時間ぐらいは映像も音楽もあるのだけど、後半の一時間半ぐらいは静止画像で音楽になっている。

そして『チャント・オブ・インディア』。資料に、一九九七年作とも、一九七七年作とも書かれていて、分からない。ダーク・ホース・レコードの活動は実質的には一九七八年までだか

CamScannerでスキャン

ら、一九七七年が正しいのではないだろうか。これも、完全にラヴィ・シャンカールの世界である。

なお、DVDのボーナス映像に、これらの作品の編集をしているラヴィ・シャンカールが登場する。一九二〇年生まれだから、九十歳である。小太りだった身体は痩せているけれど、元気そうである。ビートルズに関係している人の中では、一番の長生きである。

いっしょにいるのは、おそらくオリヴィア・ハリソンと、やはりシタール奏者の一九八一年生まれの次女のアヌーシュカ・シャンカール。一九八一年ということは、六十一歳のときの子供だ。一九七九年、五十九歳のときの子供が、長女のノラ・ジョーンズである。ちなみに、ノラ・ジョーンズは四人目のパートナーとの子供で、アヌーシュカ・シャンカールは五人目のパートナーとの子供である。

やはり、ラヴィ・シャンカールは凄い人なのだ！

〈二〇一一年三月号〉

〝アイ・ソー・ハー・スタンディング・ゼア〟からの長い旅

東日本大震災の被災者の方々の中には、当然「ロッキング・オン」を読んでくれていた人もいるだろう。昨日までビートルズやクイーンやクラッシュやオアシスを聴いていた人が、津波に呑み込まれて生命を奪われたというのは、なんと言ったらいいのか分からない。被災者の方々はこうしてもらいたいああしてもらいたいということを、どうか遠慮なく言っていただきたい。僕達はそれを、出来る限りやろう。

三月十一日、東京は震度五だったのだけど、僕はついに東京直下型地震が起きたと思った。地震があるといつも本棚を押さえていて、数十秒経つと治まる。しかし、今回は治まるどころかどんどん激しくなって、娘にもう逃げようと言われて、あわてて三階から走り下りて、気がついたら靴下のままだった。僕の六十年弱の人生の中で、もっとも激しい地震だった。

本棚を押さえるというのは、大きい地震が来たらこれは絶対に倒れると思っていたからだ。寝ているときだったら、僕の上に倒れて動けなくなるだろうと思っていた。ところが、本棚もCD棚も、戸がついているものはまったく倒れなかった。中にぎっしりと入っていたからかも知れない。戸がついていないものは、本やCDやDVDやビデオが落ちて散乱した。ピアノは

数十センチ動いていた。
一晩中、テレビをつけっ放しにして、どうにか片づいたのは翌朝だった。本棚やCD棚は倒れなかったけれど、何か所か壊れていた。外出していた妻と息子は、電車が止まって帰れなくなり、友人の家に泊まって、翌日戻って来た。もちろん、被災地を思ったら、こんなことはなんでもない。
僕の先祖は南部藩の侍だったというから、青森や岩手である。いつか先祖の住んでいた所に行って、調べてみようと思っていた。どうでもいいんだ、そんなことは。もうそろそろ具体的に考えようかなとなっていたのだけど、当分無理だろう。
こういうときに、何を書けばいいのだろうか。やはり、僕はジョン・レノンがどうしたとかポール・マッカートニーがこうしたとか書くべきだろう。

ビリー・ジョエルの『ライヴ・アット・シェイ・スタジアム』(CD二枚DVD二枚)は、シェイ・スタジアムが取り壊されることになって、その最後のさよならコンサートで、二〇〇八年七月に行なわれた。
二〇〇九年十二月に発売されたポール・マッカートニーの『グッド・イヴニング・ニューヨーク・シティ』(やはり、CD二枚DVD二枚)は、そのシェイ・スタジアムに替わって、新しく作られたシティー・フィールドの最初のコンサートで、二〇〇九年七月に行なわれた。
この一年の時間をはさんだふたつのコンサートは、つまりつながっているのだ。ビリー・ジ

ョエルのコンサートにはポール・マッカートニーがゲストで出演して、ポール・マッカートニーのコンサートにはビリー・ジョエルがゲストで出演している。

演奏されたのは、どちらも〝アイ・ソー・ハー・スタンディング・ゼア〟である（一九六四年二月九日、『エド・サリヴァン・ショー』でビートルズが演奏した一曲である）。シェイ・スタジアムでは、最後に〝レット・イット・ビー〟も演奏されている。一九六四年にオープンしたシェイ・スタジアムで、最初に行なわれたコンサートが一九六五年八月のビートルズだった。だから、最後もビートルズで終わりたかったと、ビリー・ジョエルは言っている。

シェイ・スタジアムには、他にもゲストが多数参加している。トニー・ベネット、ガース・ブルックス、ジョン・メイヤー、スティーヴン・タイラー、ロジャー・ダルトリー、ジョン・メレンキャンプ。

ポール・マッカートニーだけは、別格である。前記のように、ゲストでもトリであり、最後曲まで演奏している。はっきりいって、ビリー・ジョエルの態度も、他の人とは明らかに違う。「エド・サリヴァン・ショー」でビートルズを見て俺もこういうことをやるんだと決めたというから、こうなるのは当然だろう。

なんてったって、DVDが始まって、まず僕がニヤッとしたのは、ビリー・ジョエルがジャケットの胸に、保安官の星形のバッジをつけていたことだった。一九六五年のシェイ・スタジアムで、ビートルズもこのバッジをつけていたのだ。ポール・マッカートニーが出演する前にも、ビリー・ジョエルは〝シー・ラヴズ・ユー〟や〝ア・ハード・デイズ・ナイト〟を歌って

いる。こんな人だったっけと、思ってしまうぐらいである。

DVDの一枚はビリー・ジョエルとシェイ・スタジアムの歴史を追ったものではあるけれど、そこにポール・マッカートニーが登場するまでのエピソードもある。ビリー・ジョエルが会場入りするときにポール・マッカートニーから電話があって、今飛行機の中なのだけどニューヨークに着くのは十一時だから出演は無理かも知れないという。

それから何があったのか分からないのだけど、ポール・マッカートニーの乗った飛行機は十時半に着陸して、その十一分後には彼はシェイ・スタジアムにいたという。ポール・マッカートニーがヘフナーを持ってセッティングが終わったとスタッフに聞かされたビリー・ジョエルのあわてぶりも、申し訳ないけれどおかしい。

おそらくデビュー当時の二倍ぐらいの体重で、バンドのメンバーとの打ち合わせにガニマタでステージを走り回るビリー・ジョエルはドナルド・ダックである。ユーモラスで、彼の人間性がよく分かる。いっしょに演奏していながら、ずっとポール・マッカートニーを見ている。よっぽど、嬉しかったのだろう。観客の反応も、凄まじい。ビリー・ジョエルをただのミーハー・ファンにしてしまうポール・マッカートニーというのは、やはり素晴らしい。

それにしても、ビリー・ジョエルの人気も凄いものだと思う。一九九三年の『リヴァー・オブ・ドリームス』を最後にオリジナル・スタジオ・アルバムを作っていないというのに、五万五千人の会場が二日間フルハウスである。彼が求めれば、観客全員の大合唱が行なわれる。美しい。

いうまでもなく、演奏されるのは名曲のオン・パレードである。"素顔のままで"や"オネスティー"がないのにだ。もうそろそろ、なんとかしてもらいたい。二〇一三年で二十年ぶりということでもいいから、新しい作品を聴かせてもらいたい。

（二〇一一年五月号）

CamScannerでスキャン

しかし、酒をやめるわけにはいかない

だいたい毎日、明け方に酒を飲んでいる。新聞を読みながらとかテレビを見ながらとかいうこともあるのだけど、ぼうっと考えていることもある。この前は、あのエキサイティングだった、かつてのプロレスのことを考えていた。そういえば、何人かのプロレスラーにインタヴューしたこともあったなあ。

天龍源一郎にインタヴューしたときは、その頃背中に、〝Catch us if you can〟と書いてあるジャンパーを着てリングに登場していたので、デイヴ・クラーク・ファイヴの〝Catch us if you can〟をテープに録って行って、聴いてもらって感想を訊いた。「僕は相撲からドロップ・アウトした人間だから」というような言い方をする人で、やはり同世代なんだなと嬉しくなった。

阿修羅・原は大怪我をして入院して、ようやく試合に出られるようになった頃だった。退院した日にそのまま道場へ行って、バーベルを持ち上げようとしたら、まったく動かなくて、目の前が真っ白になったという。いろいろな噂のある人なのだけど、おだやかで飾り気がない話し方をする人だった。人生の裏も表もすべて見てきたような、味のある人だった。

CamScannerでスキャン

越中詩郎はテープを回す前にビートルズ・ファンだということが分かって、ふたりで一時間ぐらいビートルズの話をしてしまった。あの越中の口からマハリシ・マヘシ・ヨギの名前が出てくるのだから、楽しくなる。そのせいで約束の時間内に終わらなくなったのだけど、最後までつきあってくれた。終わった後、「ちょっと、走って来ますから」と言って、新日本の道場から多摩川へ向かう後ろ姿がかっこ良かった。

獣神サンダー・ライガーは、明るく楽しい人だった。それでいてリングでは激しく強く、僕は〈正しいプロレスラー〉と呼ぶことにした。彼が描いてくれたアントニオ猪木やジャイアント馬場の似顔絵は、今でも大切にしている。インタヴューの場所までマスクを持ってきてくれたのは、さすがマスクマンの第一人者である。

ロック・ミュージシャンのことも、思い出してみよう。まず、ポール・マッカートニーである。場所はロンドンのエアー・スタジオで、『タッグ・オブ・ウォー』が完成した直後だった。目の前にポールが立ったとき、僕は完全に中学一年生に戻ってしまった。ひょっとしたら、口をぽかんと開けて、ポールを見ていたかも知れない。リンゴ・スターはアトランタで、だからなんとか大人でいられるようにした。

ジョージ・マーティンにはビートルズに関する質問はほとんどせずに、プロデューサーとしての質問をたくさんした。それで気に入ってくれたようで、サインを頼んだら僕の名前を漢字で書いてくれるという。ずいぶん苦労して、この面倒臭い名前を書いてくれた。同席していたカメラマンも頼んで、名前が井上だというと、これは簡単だと言ったので、全員大笑いになっ

た。

オノ・ヨーコは、最初に会うときは怖かった。しかし、何度も会ううちに、冗談も言う人だと分かった。初めのうちは「村松さん」と言うので困ったのだけど、最近は「松村さん」と言ってくれる。元気である。ジュリアン・レノンにも、ほとんどジョンのことは訊かなかったので、「これは初めて話すんだけど」と言って、ジョンが殺された夜の話をしてくれた。いつもマネージャーに騙されていたのだけど、元気にしているのだろうか。

エリック・バードンは一回目はオリジナル・アニマルズの再結成のときで、二回目はスタッフのようなふりをしていた。六〇年代の面白い話を、いろいろと聞かせてくれた。いっしょに、お土産を買いに行ったりもした。そういえば、チャス・チャンドラーはもういないんだな。ミック・ジャガーはパリのホテル・ジョルジュ・サンクで、やはりオーラのある人だった。レイ・デイヴィスは噂どおりに変わった人で、デイヴ・デイヴィスはそれとは対照的な人だった。ビートルズ、アニマルズ、ローリング・ストーンズ、キンクス、フーというのが僕の中学高校時代の五大バンドで、だからロジャー・ダルトリーにインタヴューした後に奇妙な脱力感があった。他にも、レイ・マンザレク、ジョーイ・モーランド、ニック・ロウ、ロン・セクスミスなどが、強く記憶に残っている。

で、最初にインタヴューしたのは誰だったかというと、これがよく分からない。おそらく、コージー・パウエル、クリス・スペディング、ロリー・ギャラガー、ケイト・ブッシュの四人の内の誰かだと思う。ケイト・ブッシュはレコード・デビュー直後だった。まだカリスマ性は

CamScannerでスキャン

なかったのだけど、とても同じ人間だとは思えない不思議系美少女だった。

あとの三人は、いうまでもなく七〇年代のブリティッシュ・ロックそのもののような人達である。三人とも、ステージの激しさとは違って、おだやかな人達だった。そうか、コージー・パウエルもロリー・ギャラガーも、もういないのか。なんなんだ、ロックンロールっていうのは。

ロリー・ギャラガーに会ったのは一九七七年十一月に来日したときで、ステージと同じチェックのシャツを着ていたのが印象に残っている。あの塗装の剝げたギターについて質問したら、あれが一番ぴったりくるんだと言っていた。それなら塗装すればいいのにと思ったのだけど、そんなことをしたら音が変わってしまうと考えていたのかも知れない。このジャパン・ツアーが終わった後、ロリー・ギャラガーはサンフランシスコに行ってレコーディングすることになる。

ロリー・ギャラガーの『ノーツ・フロム・サンフランシスコ』という二枚組が発売される。一枚目は前記の一九七七年十二月からサンフランシスコでレコーディングして、発表されなかったものである。二枚目はその二年後の一九七九年十二月にサンフランシスコで行なわれた、ライヴ・アルバムである。つまり、未発表のスタジオとライヴの、サンフランシスコの二枚組なのである。

この一枚目が何故発売されなかったのかというと、どうもロリー・ギャラガーが拒否したら

CamScannerでスキャン

しい。どうやらこれはアメリカ向けに作られたもののようで、彼もそのつもりでレコーディングしたのだけど、完成したものを聴いてみたら、やはり嫌になったということのようだ。イギリスのハード・ロックが、そのままアメリカで受け入れられるわけではない。そういえば、レインボーも変えたことがあった。

この後ロリー・ギャラガーはすぐに次のレコーディングを始めて、一九七八年に『フォト・フィニッシュ』を発表している。『フォト・フィニッシュ』には、この一枚目に収録されている曲の内四曲が再レコーディングされて入っている。しかし、僕のように鈍感な人間には、『フォト・フィニッシュ』ヴァージョンが良くて未発表ヴァージョンがそうではないなどとは思えない。これはこれでいいと思う。

しかし、やはり本人はそういうわけにはいかなかったのだろうな。ロリー・ギャラガーといえば、真性ブリティッシュ・ロックだからね。それでも、名作『コーリング・カード』の後に、このアルバムがリリースされていたら、ちょっと面白かったかも知れないとも思う。ビッグ・ヒットになったりして。

二枚目のライヴ・アルバムに関しては、何も言うことはない。ロリー・ギャラガーのライヴ・アルバムで、良くなかったものは聴いたことがない。一九七九年一九八〇年のライヴを集めたものに、一九八〇年の『ステージ・ストラック』がある。おそらく、これもそのつもりで、レコーディングされたのだろう。これが未発表だった理由は分からないのだけど、いつもよりも少し声が出ていない曲もあるので喉を痛めていたのかも知れない。それでも、僕は充分に満

CamScannerでスキャン

足できる。

ロリー・ギャラガーは一九九五年に四十七歳で亡くなっている。長年の過度の飲酒で肝臓を痛め、移植手術を行なったのだけど合併症を起こしたのだそうだ。そうなのかと思う。ロリー・ギャラガーを思いながら、僕は焼酎をコップに注ぐ。

〈二〇一一年八月号〉

CamScannerでスキャン

ブライアン・ウィルソンの頭の中

こういう時代だというのにCDラジカセを愛用しているということは、しばらく前に書いた。友達と酒を飲みながらその話をすると、みんな〝困ったもんだな、こいつは〟という顔をして無口になる。それでもめげずに話し続けていたら、最近友達がふたりCDラジカセを買ったという。このふたりはおたがいに面識はなくて、つまり別々に僕の話でその気になったのである。

ふたりとも神奈川の人間なので、それでは〝京浜ラジカセ愛好会〟を作ろうかと考えた。当然、会長は僕で、エバる。しかし、活動内容が分からない。というか、活動することがない。活動しないで会長になってもしょうがないので、思いついて三分後にやめにした。で、どうして僕がCDラジカセ愛好者になったのか、詳しく書きたい。

まず、亀渕昭信さんがNHKのラジオで、「いくつになってもロケンロール！」という番組を始めたということを知った。亀渕さんはもちろん元ニッポン放送社長なのだけど、僕が高校生の頃は「オールナイトニッポン」のDJをやっていた。深夜放送がブームになり始めたときで、いろいろな番組があって、一番イギリスアメリカのロックが流れていたのが、亀渕さんの番組だった。六〇年代終わりから七〇年代初めで、毎週新しいバンドや曲が紹介されたのであ

る。

あの当時、僕が毎週必ず聴いていたのは、この番組と落語中継だけだった（今、立川談志が亡くなったと、ニュースが言っている。落語ファンはみんなそうだろうけれど、いちおうは分かっていた。古今亭志ん朝も同じことで、一時期しょっちゅう観に行っていたので、悲しい思いと、全盛期は聴けたという感もある）。

そういうわけだから、亀渕さんの番組を聴こうとしたら、家の中にラジオがないということに気がついた。そういえば、数年前にトランジスタ・ラジオを落として、壊しちゃったんだ。で、家電量販店へ行ったら、当然ラジオはあった。MDラジオなんてのもあったし、なんだか分からない今ふうの録音再生機能がついたものもあった。

そこで、CDラジカセを見つけたのだ。おそらく精神的なもので、その頃僕はCDプレイヤーでCDを聴くのが辛くなっていた。だから、間近の仕事のものしか聴いていなかった。これなら楽に聴けるだろうと、思った。落語とクラシックのカセット・テープもたくさんあって、これもどうしようかと考えていた。それらが解決する。

そのとおりになった。神奈川の入会権利を持つふたりも言っていたのだけど、昔と比べると音が実に良くなっている。なんてったって、ラジカセが流行ったのは、七〇年代終わりから八〇年代初めぐらいだもんな。三十年も経てば、音も良くなる。亀渕さんの番組はもう終わってしまったけれど、最後の数回はカセット・テープに録音した。ラジオ番組を録音したのは、「ビートたけしのオールナイトニッポン」以来だろう。

それ以来、自分の部屋にいるときは、ラジオをかけていることが多い。そういう中で、今一番面白いのは、「菊地成孔の粋な夜電波」という番組である。菊地成孔はフリー・ジャズのサックス・プレイヤーで、ともかく話がおかしい。音楽についてもまともに論じて、それもジャズだけではなくて、クラシックや現代音楽、昭和歌謡や少女時代……。

その場で自分でレコードやCDをかけるので、曲を間違えるのが二時間番組で三回はある。番組内で、ミックスをやったりもする。興味を持って彼のCDを聴いてみたら、これも良かった。しかし、この人、やたらとユニットを作っていて、どれが本線なのかよく分からない。

それでも、彼の影響で、ちょっと触れたことがあったぐらいの現代音楽や、まったく知らなかったフリー・ジャズを聴いたりもしている。

今回発売されたビーチ・ボーイズの『スマイル』を聴いて、戸惑っている。考えれば考えるほど、混乱してくる。当時のビーチ・ボーイズの評価も、現在のロック史の中のビーチ・ボーイズの評価も、その周辺でさえも、違和感を持ってしまう。どうすりゃいいんだ。

いちおう説明しておくと、『スマイル』というのは一九六七年にビーチ・ボーイズ（ブライアン・ウィルソン）がレコーディングしたもので、結局完成出来なくて、ロック史上最大の未完成作品といわれているものである。これが完成出来なかったことと、ビートルズが『サージェント・ペッパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』を作ったことで、ブライアン・ウィルソンはドラッグに走り、人間をやめちゃったんだ。

CamScannerでスキャン

ブライアン・ウィルソンはカムバックの狼少年と言われていて（僕が言ったんだ）、それでも一九九八年の『イマジネーション』で本当にカムバックしたとファンは認めていると思う。そして、二〇〇四年、彼は彼のツアー・バンドといっしょに、『スマイル』をレコーディングし直して、すべてはメデタシメデタシとなった。

ところが、今回、当時の一九六六年一九六七年のテープだけで、なんとビーチ・ボーイズの『スマイル』が発表されたのだ。一回聴いただけで、二〇〇四年の『スマイル』は、消え去ってしまった。なんなんだ、このめちゃくちゃなパワーは。なんなんだ、この異様な気の流れは。

このアルバムは、三つの組曲で出来上がっている。そんなことはファンは二〇〇四年版でも分かっていたのかも知れないけれど、各々に核となる曲が二曲ずつある。〝英雄と悪漢〟と〝キャビン・エッセンス〟、〝ワンダフル〟と〝サーフズ・アップ〟、〝ヴェガ・テーブルズ〟と〝グッド・ヴァイブレーション〟。その二曲の間を、三十秒から三分のサウンド・コーラスが飛びまわっているのである。

これはもう『ペット・サウンズ』からの進歩というものではないし、『サージェント・ペッパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』との比較も出来ないし、フィル・スペクターとも遠く離れているし、違うところへ行っている。つまり、計算されつくした現代音楽やフリー・ジャズのようなものなのではないだろうか。

かつてこれを完成出来なかったのは、ブライアン・ウィルソンが細かいところばかりに神経がいって全体像が見えなくなってしまったのではないだろうか。その結果、『スマイル』は行

CamScannerでスキャン

くところがなくなってしまったのだろう。しかし、これが一九六七年のアメリカで受け入れられるのは、難しかっただろう。『ペット・サウンズ』も受け入れられなかったのだから（チャートの十位が、ノー・ヒットか否かの問題はある）。

しかし、イギリスでは受け入れられただろう。狂気の大傑作と、讃えられただろう。ブライアン・ウィルソンは『ペット・サウンズ』で彼の中のブリティッシュ・ロックをやりたかったのだと、僕は思っている。だから、アメリカでのビーチ・ボーイズの代表作は、『サマー・デイズ』だとも、考えている。

なんか、自分でも分かりにくいことを書いているなと思う。それだけ、混乱しているのである。なんと書けばいいのかな。この写真でしか観たことがなかった有名なジャケットが本当に存在するというのは、素晴らしいことである。このジャケットは、一九六七年ではない。二〇一一年である。

〈二〇一二年一月号〉

一九七一年の春から夏まで

ドアーズの『L.A.ウーマン』の、〈四〇周年記念エディション〉が発売される。しかし、これはおかしいだろう。『L.A.ウーマン』のオリジナル・レコードが発売されたのは一九七一年だから、四〇周年なら二〇一一年で去年ということになる。どうして、今年なのだろうか。ただただ単純に遅れたということなのだろうか。たしかに、かつてドアーズにはそういうこともあった。一九六八年に発表された三枚目の『ウェイティング・フォー・ザ・サン』には、収録される予定だったのに完成出来なかった曲が二曲ある。

一曲はジャケットに歌詞まで載せた〝ザ・セレブレイション・オブ・ザ・リザード〟で、結局一九七〇年のライヴ・アルバム『アブソルトリー・ライヴ』で演奏されている。もう一曲はなんとタイトル曲の〝ウェイティング・フォー・ザ・サン〟で、これも一九七〇年の『モリソン・ホテル』に入っている。

完成出来なかったのなら、歌詞を載せなければいいし、タイトルも変えればいいのだけど、ドアーズはそうはしないのだ。しかし、〈四〇周年エディション〉である。完成させなければならない曲などは、ない。二枚組で、一枚はオリジナル・アルバムもう一枚はオルタネイト・

CamScannerでスキャン

ヴァージョンと未発表曲である。

そこで思いつくのは、〈四〇周年〉というのは後からつけた理由なのではないかということだ。まず『L.A.ウーマン』のスペシャル・エディションの発売があって、そこに無理矢理口実をつけたのではないだろうか。そういうことなら、それでもいいから。〈四〇周年〉などといわれると、こちらも四十年前のことを思い出してしまうから。

一九七一年なら、僕は二十歳だ。週に二度の練習と月に一度の仕事が、僕のロック・バンドの活動だった。自作曲もあったのだけど、ドアーズのカヴァーもやっていた。〝ブレイク・オン・スルー〟、〝エンド・オブ・ザ・ナイト〟、〝ライト・マイ・ファイアー〟は記憶がある。

ジム・モリソンの死亡のニュースを聞いても、特に驚かなかった。後年のジョン・レノンやジョージ・ハリソンのように、泣いたりもしなかった。ジム・モリソンはいつ死んでもおかしくはないと、思っていたのだろう。ロックの迷宮の奥に入ったら、死ぬものだと考えていた。

洋書店へ行って、「ローリング・ストーン」紙（まだ新聞だった）のジム・モリソン特集号を買った。僕の部屋のどこかに、それはまだあるはずだ。あれから四十年か。よく生きているな。

ジム・モリソンが存在したドアーズは、一九六七年から一九七一年までの五年間に、六枚のスタジオ・アルバムと、一枚のライヴ・アルバムを残している（ベスト・アルバムも一枚ある）。

その中で現在名作といわれているのは、一枚目の『ザ・ドアーズ』と、二枚目の『ストレンジ・デイズ』と、この六枚目のラスト・アルバム『L.A.ウーマン』だろう。で、僕が好きなレコードは、三枚目の『ウェイティング・フォー・ザ・サン』と、五枚目の『モリソン・ホテル』と、ライヴの『アブソルトリー・ライヴ』ということになる。

先月号の「レコード棚いっぱいの名盤から」では『ザ・ドアーズ』を取り上げたのだけど、これはそのまま七か月間順にドアーズを書き続けようと思っていたからだ。しかし、どうもそういうわけにはいかないようだ。そういうことなら、好きな三枚から選べば良かった。まあ、そういうことだ。

先月も書いた〔「秋まで待てない」〕ように、一枚目はほとんどスタジオ・ライヴ一発だったという。しかし、二枚目の『ストレンジ・デイズ』のレコーディング直前に、ドアーズはビートルズの『サージェント・ペッパーズ』を聴いて、自分達もスタジオで出来る限りのことをやろうと、マッド・サイエンティストになった（レイ・マンザレク談）そうだ。

プロデューサーのポール・A・ロスチャイルドは一種の完璧主義者で、一発録りのライヴならともかく、そういうレコーディングをするならと、一曲に何百テイクも要求したらしい。また、ジム・モリソンの飲酒がひどくなり、酔っ払ってスタジオに来るようにもなったという。

その結果、予定していても完成出来ない曲が出てくるというのは、前記の『ウェイティング・フォー・ザ・サン』でも分かるだろう。ともかく、ドアーズのレコーディングには時間がかかって、『モリソン・ホテル』は九か月の時間が必要だったそうだ。

それがぶつかってしまったのが、「L.A.ウーマン」だった。ポール・ロスチャイルドはこんな演奏しか出来ないバンドのプロデュースはもうやめたと言って、スタジオを出て行ってしまったらしい。普通なら、ドアーズが詫びを入れるところだ。しかし、何百回も同じ曲をやらされていたドアーズは、逆に喜んだのではないだろうか。

エンジニアのブルース・ボトニックを共同プロデューサーにして、自分達でレコーディングすることにしたのだ。ドアーズのオフィスにあるリハーサル・ルームで、録音は行なわれた。そして、なんと六日で終わらせたという。つまり、ほとんど数テイクの、スタジオ・ライヴのようなものだった。

それでもこれだけの作品になったというのは、それだけ集中していたのだろう。ただ、ジム・モリソンの声が、酒のためか掠れている曲がいくつかある。それが、逆に迫力を出している曲もある。ブルースの〝クローリング・キング・スネーク〟や〝ビーン・ダウン・ソー・ロング〟や〝カーズ・ヒス・バイ・マイ・ウインドウ〟がそれだ。

そういう意味では、〝チェンジリング〟や〝L.A.ウーマン〟は、僕には少し辛い。また、〝ラヴ・ハー・マッドリー〟や〝ヒヤシンスの家〟のようなポップな曲は、ドアーズには珍しいヴォーカルになっていて、興味深い。

そして、なんといっても、このアルバムを代表する曲は、〝ライダーズ・オン・ザ・ストーム〟だろう。ここまで感情を殺したジム・モリソンというのは、今迄にはなかったはずだ。このアルバムのレコーディングが終わって、まだミキシング中にジム・モリソンはパリへ行って

CamScannerでスキャン

しまう。そして、亡くなる。

この最終曲の〝ライダーズ・オン・ザ・ストーム〟を聴いていると、ジム・モリソンが深い森の中へひとりで歩いて行くのを見ているような気がしてしまう。もう帰って来ないのだ。

結果、『L.A.ウーマン』はヒット・チャートの九位まで上がるヒット・レコードになり、ドアーズの代表作の一枚になった。ヒットしてから、ポール・ロスチャイルドに会ったら、「お前達なら、出来ると思っていたよ」と言われたと、レイ・マンザレクは笑いながら話してくれた。

（二〇一二年四月号）

まだ吠えることが出来る

五月〔二〇一三年〕にリリースされる予定のCDのリストを見て、僕はびっくりした。その中に、『ティル・ユア・リヴァー・ランズ・ドライ／エリック・バードン』という一枚があったからである。エリック・バードンは、僕が世界で一番素晴らしいと思っているシンガーである。つまり、僕が世界で一番好きなシンガーということになる。

エリック・バードンのアルバムがメジャー・レーベルからリリースされるのは、いったい何年ぶりになるのだろうか。おそらく、オリジナル・アニマルズの再々結成盤『アーク』（一九八三年）が、最後のオリジナル・スタジオ・アルバムだろう。ライヴでは、そのツアーの『グレイテスト・ヒッツ・ライヴ』（一九八四年）ということになるだろう。つまり、約三十年ぶりなのである。

それ以後は、主にドイツのマイナー・レーベルからのリリースになる。もちろん、オリジナル・スタジオ・アルバムもある。しかし、こういう実績がある人がマイナー・レーベルから求められるのは、かつてのヒット・ソングの再レコーディングである。そういうレコードが何枚かリリースされて、それがイギリスやアメリカでも発売されるときに、タイトルやジャケット

が変えられて編集されて、同じようなものが何枚も存在するということになった。

エリック・バードンのものだったら、見つけたらなんでも買っていたのだけど、そういうことが重なって、あまり気にしなくなってしまった。また、最近はそれほど輸入CDショップに行かなくなったということもある。だから、僕が持っている最新のオリジナル・スタジオ・アルバムは、『アイ・ユースト・トゥー・ビー・アン・アニマル』（一九八九年）である。ライヴは、ブライアン・オーガー・バンドとの『アクセス・オール・エリアズ』（一九九三年）である（その後、『マイ・シークレット・ライフ』（二〇〇四年）と『ソウル・オブ・ア・マン』（二〇〇六年）がリリースされているという）。

ともかく、すぐに『ティル・ユア・リヴァー・ランズ・ドライ』を入手して、聴いて驚いた。エリック・バードンは一九四一年生まれだから七十二歳なのだけど、声はまったく衰えていない。二十年前の『アクセス・オール・エリアズ』と、変わっていないのである。それどころか、凄みが増している。

もともとブルースの人だから、年齢を重ねれば重ねるほど、渋みは増すのだろうけれど、エリック・バードンは当たり前のようにシャウトしているのである。吠えているのである。同世代のシンガーを、あの人この人と考えると、これだけ声が出るというのは、モンスターである。ものの けである。

ジミ・ヘンドリックスの親友だったためか、ヘヴィメタみたいなギタリストを好むことが多かったのだけど、今作はそれもなくて、じっくりと聴くことが出来る。そして、声だけで僕が

持って行かれてしまうのが、ジョン・レノンとエリック・バードンである。
一曲目の〝ウォーター〟の最初のエリック・バードンの声を聴いただけで、僕は持って行かれてしまった。僕はちょうどエリック・バードンの十歳下ということになるわけであって、このところちょっと暗い気分になっていたのだけど、こんなことはしていられないという気分になって、ビールからウイスキーにした。

ここまで書いてエリック・バードンをよく知らない人がいるかも知れないと気づいたので、少し説明をしたい。前記のようにエリック・バードンは一九四一年にニュー・キャッスル・アポン・タインで生まれて、アート・スクールに通っているときにブラック・ミュージックに目覚めたという。いくつかのバンドを経験してから、一九六四年にアニマルズでレコード・デビューする。その二枚目のシングル〝朝日のあたる家〟が世界中で大ヒットして、ブレイクする。
大ヒットしたといっても、アメリカとイギリスのヒット・チャートで第一位になったというだけではない。一九六四年の夏は、どこに行っても〝朝日のあたる家〟が流れていたのである。イーグルスの〝ホテル・カリフォルニア〟を思い出してもらいたい。ああいうようなヒットだったのである。
つまり、一九六四年の夏は、ビートルズと〝朝日のあたる家〟だったのである。ローリング・ストーンズの〝サティスファクション〟が世界的に大ヒットするのは、一九六五年である。キンクスとフーは、イギリス国内だけだった。しつこいようだけど、一九六四年の夏は、

〝ア・ハード・デイズ・ナイト〟と〝朝日のあたる家〟だったのである。
アニマルズ名義では二枚目の『アニマリズムズ』（一九六六年）が素晴らしくて、「レコード棚いっぱいの名盤から」でも書いた。エリック・バードンとアニマルズ名義になってからは『エヴリ・ワン・オブ・アス』と『ラヴ・イズ』（どちらも、一九六八年）が素晴らしくて、そのうちあの頁でやらなければならない。一九九一年に来日したときにインタヴューしたら、エリック先生が好きなのもこの二枚だった。好きなシングルは、〝炎の恋〟だそうだ。
二十曲ものヒットを放ってアニマルズを解散した後は、ストリート・バンドとエリック・バードン・アンド・ウォーを結成する。二枚のアルバムを作ってエリック様は脱退するのだけど、その後のウォーがどうなったのかは説明の必要はないだろう。
一九七四年にはエリック・バードン・バンドを結成して、メジャー・レーベルからやはり二枚のアルバムをリリースする。それ以後は、主にドイツのマイナー・レーベルということになる。
ともかく、エリック・バードンはブラック・ミュージックの人である。ブルース、リズム・アンド・ブルース、ロックンロール、ファンク……。『ティル・ユア・リヴァー・ランズ・ドライ』は、それが結実した一枚である。本当は今年のアルバム・オブ・ジ・イヤーと言いたいのだけど、とりあえず上半期のということにしておこう。
もうひとつ、書いておきたいことがある。あれは何年前のことだっただろうか、コンサート

会場でKさんという人に声をかけられた。学生時代にアニマルズのレコードについての質問の手紙を、僕に送ったのだという。「僕、返事、書いた？」と訊いたら、「ちゃんと、いただきました。いい若い者が、アニマルズなんか気にしてないで、女の子のことでも考えろよと、最後に書いてありました」ということだった。

「仕事は、何をやってるの？」と訊ねたら、「フジテレビにいて、『笑っていいとも』なんかをやってます」という答だった。しばらく経ってからそのことを思い出して、「笑っていいとも」の最後のクレジットを見たら、Kさんは普通のプロデューサーではなくて、その上のチーフ・プロデューサーだった。あるとき「スマップスマップ」を見たら、これもKさんだった。今では、チーフ・プロデューサーの上になっているようだ。

Kさん、エリック・バードンとアニマルズの一九六八年の日本公演は、フジテレビが主催ですよ。実際に、フジテレビで放送されました。僕は見ました。つまり、フジテレビのどこかに、一九六八年のエリック・バードンとアニマルズのライヴ・ビデオがあるのです。

エリック・バードンの『ティル・ユア・リヴァー・ランズ・ドライ』のリリースを記念して、再放送してくれませんか。

〈二〇一三年六月号〉

Ⅲ

CamScannerでスキャン

グッド・イヴニング・メモリー・オールモスト・フル

今、僕の部屋の中には、十数個のダンボール箱がある。ドアを開けた前にも、同じぐらいある。ベランダの物置きの中にも、同じぐらいある。そう、引っ越しをしたばかりなのである。とはいっても、もう数週間経っている。毎日、これらのダンボール箱を見て、僕は考えている。引っ越しの荷物というのは、こんなにも片づけるのに時間がかかっただろうか。いや、独身のときには、翌日か翌々日には片づいていたような気がする。結婚して、もう少しかかるようになった。子供が生まれて、もう少しかかるようになった。しかし、数週間経っても、まだこれほど残っていることはなかっただろう（もちろん、今、言っているのは僕のダンボール箱だけであって、他のダンボール箱もおそらく同じぐらい家のあっちこっちに積んである）。

簡単にいえば、荷物が増えたのである。前回の引っ越しは十一年前であって、つまり十一年間に増えた荷物が大量にあるのだろう。だいたいが、僕が使えるのは一部屋である。引っ越しをする度に部屋数は増えるのだけど、僕が使えるのは一部屋だけというのは変わらない。それで荷物が増えれば、どうなるか。考えなくても、分かる。

そういえば、前回の引っ越しのときに、中を調べてこれは片づけられないと思って、廊下に

積んでおいたいくつかのダンボール箱を、今回もそのまま持ってきた。十一年もそのままだったのだから、もう捨てても良さそうなものだけど、その中は分かっていて、大量のプロレスと落語のビデオもある。アントニオ猪木対ハルク・ホーガンの第一回ＩＷＧＰ決勝戦もあるはずだ。古今亭志ん朝の「火焔太鼓」もあるはずだ。捨てるわけにはいかない。捨てたら、泣くぞ。

残っているダンボール箱の中は、だいたい三種類になる。ＣＤ、本、そして雑誌などの資料である。引っ越しの数週間前、レコード会社勤務の友人と酒を飲んで、ＣＤと本の置き場所に困るという話をしたのを思い出す。部屋が一杯になり、廊下に溢れて、他の部屋にも侵出して、家族に嫌がられるので、なんとかしなければならない。

今回、僕は決心した。ＣＤも本も資料も、もう必要ないとなったら捨てる。それまでは、そんなことはとても出来なかった。というのは、一枚のＣＤ一冊の本を作るのが、どれだけ大変なことなのか知っているからである。しかし、もうそんなことは言っていられない。よし、捨てるぞ。

通常、一部屋には四つの壁面がある。そこに、ドアもあるし、窓もある（床までの窓もある）。となると、並べられる収納家具の数も限られる。そこで、ＣＤや本が入り切らなくなる。それらはいくつかの山になって、家具の前に立ちふさがる。あのＣＤはあったはずだと分かっていても、どこにあるのか分からない。へたに探し始めたら、後から大変なことになる。

そういったことは、もうやめたいのである！　ＣＤ、本、雑誌などは、収納出来る数だけにしたいのである！　残りは物置きに入るだけにして、捨てる！　もちろん、ベランダが物置き

CamScannerでスキャン

だらけになることも、避ける！

今回、『グッド・イヴニング・ニューヨーク・シティ』を観て聴いて、ポール・マッカートニーは、自分が作ってきた大量の曲をどのように整理しているのだろうかと気になった。メモリー・オールモスト・フル……。つまり、一九六二年から四十七年間に作ってきた大量の曲を、どのように整理しているのかということである。メモリー・オールモスト・フル……。

一回のコンサートで演奏出来るのは、まあ三十曲前後である。その中には、〝イエスタデイ〟や〝ヘイ・ジュード〟や〝レット・イット・ビー〟や〝死ぬのは奴らだ〟や〝マイ・ラヴ〟や〝バンド・オン・ザ・ラン〟のように、必ず演奏される代表曲もかなりある（だいたい、シングルのA面曲を全部演奏するだけでも、三十曲ではおさまらない）。

すると、残りの曲は、どのように選ぶのだろうか。今回、ビートルズでは〝デイ・トリッパー〟が初めて演奏された。それでも、〝ホールド・ミー・タイト〟がある。〝アイム・ルッキング・スルー・ユー〟がある。〝ユア・マザー・シュッド・ノウ〟がある。〝ホエン・アイム・シックスティー・フォー〟がある。〝オー・ダーリン〟がある……。

ビートルズでさえ、こうである。ウィングスやソロになったら、手のつけようがなくなるだろう。〝アナザー・デイ〟がある。〝トゥモロウ〟がある。〝愛しのヘレン〟がある。〝ひとりぼっちのロンリー・ナイト〟がある。〝ブレス〟がある。〝オフ・ザ・グラウンド〟がある……。

数え切れない、大量の名曲。メモリー・オールモスト・フル……。あれらはライヴで演奏さ

れることはないのだろうか。メモリー・オールモスト・フル……。ポールはどういう基準で演奏する曲を決めているのだろうか。メモリー・オールモスト・フル……。

ちなみに、この原稿は床に座って（寝そべったりもして）書いている。今月号に書いた他の原稿も、同じである。机と椅子はセットしてあるのだけど、何故かそこで書く気になれない。おそらく、部屋の中が落ちつくまでこうなのだろう。

〈二〇一〇年一月号〉

CamScannerでスキャン

一〇年目の十一月二十九日

ここのところ、ずっと歯医者に通っている。診察カードを見るというと去年〔二〇一〇年〕の七月からだから、もう十五か月も治療に行っていることになる。こういう年齢だからこの先来ることもないかも知れないから、悪いところはすべて治してくださいと頼んだのだ。おそらく、これが僕の人生で最後の歯医者通いだろうと思っている。

最近は、何をやっても、これが人生で最後かも知れないと思ってしまう。あまり行かない所へ行っても、この町へ来るのはこれが最後だろうなという気になる。そういう目で見るということ、なんとなく懐かしいような感じがしてくる。思い出なんか、何もないんだけどさ。

逆に、この頃はジャズを聴くことが多い。中学の同級生でレコード会社でジャズをやっていた友人が、定年退職だという。酒を飲んでジャズの話をしていたら、この歳になってお前とジャズの話をするなんて思ってもいなかったと言われた。先がないから、面白そうなものには早く首を突っ込まなければならないんだよ。

ある雑誌で老後について書いてくれといわれて、次のように書いた。僕の仕事には、定年はない。だからいつまでも働けるようだけど、実は仕事がなくなったらそれで終わりだ。そうな

ったら、多摩川の川原でブルー・シートで暮らすか、多摩川に飛び込むしかない。編集者は分かったような分からないような顔をしていた。

このあいだ、久しぶりに吉祥寺で酒を飲んだので、帰りに三鷹でラーメンを食べていこうと思った。二〇代のとき武蔵境に住んでいたので、週に一回は行っていたラーメン屋がある。数年前に行ったら、あの頃と同じ人がラーメンを作ってくれた。なんとなく、嬉しかった。

ところが、今回行ったら、店の名前が変っていて、あの人もいない。訊いてみたら、あの御主人は亡くなって、その人が後を継いだのだという。考えてみたら、僕よりもひとまわりぐらい年齢が上のようだったから、そういうことにもなる。スープがなくなったということで、ラーメンも食べられなかった。

実を言うと、この原稿を書いている今、二〇代から行っていた自由が丘の居酒屋の御主人の御葬式が行なわれているはずだ。早く原稿を書かないから、こういうことになる。落ちついてから、改めてうかがおうと思っている。申し訳ありません。

さて、歯の治療をしていて、これはいつ治したのですか？　と先生に訊かれることが何度かあった。で、僕は少なくとも十年は前ですと答える。前回、歯医者に通ったのは、ぴったり十年前なのだ。それを覚えているのには、理由がある。

夕方、歯医者に行こうとしたら、テレビのニュースがジョージ・ハリソンさんが亡くなりましたと言ったのだ。しばらく前から危ないと言われていたので、覚悟は出来ていた。それで、自転車に乗って夕方の町を走っていたら、突然涙があふれた。ジョージはもういないんだと思

ったら、涙は止まらなかった。歯医者の待合室では、泣いているのが分からないようにずっと下を向いていた。そうしたら、看護師さんに大丈夫ですか？　痛みますか？　と言われてしまった。

あれから、もう十年になるのだ。この間にリリースされたCDは、録りためてあった『ブレインウォッシュド』と納得いかない選曲の『ベストソングス』だけである。生前から始まっていたいわゆるデラックス・エディションは、『オール・シングス・マスト・パス』、『バングラデシュ・コンサート』、『リヴィング・イン・ザ・マテリアル・ワールド』だけだ。

DVDも『バングラデシュ・コンサート』と『ダーク・ホース・イヤーズ　1976－1992』と『コンサート・フォー・ジョージ』だけだ。十年目なのだからそれなりのリリースがあるだろうと思っていたら、とてつもないものがあらわれた。

『リヴィング・イン・ザ・マテリアル・ワールド』、つまりジョージ・ハリソンのアンソロジーである。監督はマーティン・スコセッシで、もちろんローリング・ストーンズの『シャイン・ア・ライト』のようなものではない。ビートルズの『アンソロジー』を作っているとき、ジョージは自分のそれを考えていたのだという。しかし、いつから始めたのだろうか。

水の中のジョージの写真は、初めて見るものだった。ヘアースタイルからすると一九六五年だろうと思って字幕監修をした藤本国彦さんに訊いたら、映画『ヘルプ！』でしょうということだった。このように、見たことがない写真や映像がいっぱい出てくる。あの一九七三年のア

メリカ・ツアーの映像も出てくる。

それにしても、さすがにインタヴューを受ける人も凄い。ポール・マッカートニー（天然にもほどがある）、リンゴ・スター、ニール・アスピナル、クラウス・フォアマン、アストリット・キルヒヘア、ジョージ・マーティン、エリック・クラプトン、ヨーコ・オノ、エリック・アイドル、トム・ペティー……。

パティー・ボイドが出てきたのには、ちょっと驚いた。フィル・スペクターが栄養のいい爬虫類のような顔で喋るのにも、びっくりした。捕まったのは二〇〇三年だから、その前かもしくは起訴されなかったのか。もちろん、オリヴィアとダーニも話してくれる。

流れてくる音楽も、未発表のデモが多い。ジョージはこの種のものが少ないから、興味深い。ダーニが喋っている後ろの壁にジョージのものと思われるギターが飾ってあって、あれを一台ずつ詳しく見せてもらいたかった。シタールもシンセもウクレレも。

で、終わったら、もう終わりなのかと思って、それが不思議だった。前篇一時間三十五分後篇一時間五十五分の、全三時間半なのに。考えてみたら、よくあるように一時間半や二時間でまとめてあったら、それで納得したのだろう。ところが、三時間半なら、もっともっとあるはずだと感じてしまうのだろう。ビートルズの『アンソロジー』のときと同じように思ったな。

この映画は十一月十九日から十二月二日までの二週間限定で、全国で公開される。音も良いので、ぜひ観ていただきたい。そして、ソフトは、十二月二十三日に、DVD二枚組とブルーレイが、どちらも四千七百円で発売される。DVD二枚とブルーレイに、映画で使われた未発

表デモ十曲収録のSHM－CD、九十六頁のブックレット、リトグラフ二枚（ボックスがフォト・スタンドにもなる）が、一万六千円で発売される。

〈二〇一一年十二月号〉

秋まで待てない

基本的に僕はアトピーで、定期的に医者に通っている。とはいっても、症状は落ちついていて、飛躍的に良くもならないけれど、それほど悪くもならない。だから、定期的といっても、まあ数か月に一度ぐらいのことだ。たいしたことはないといっても、いいだろう。

これがアトピーだと分かったのは三十代の頃で、つまりそれまで世の中ではアトピーが認識されていなかったのだ。当然、僕も知らなかったわけで、分かってから考えてみたら、この症状は十代の頃からあった。

その頃幼かった僕の娘のほうが症状は悪くて、いくつかの医院へ行っても病名さえ分からない。そこで行ったある大学病院の医者が言ったことを、僕は今でも覚えている。ようやくアトピーが取り沙汰され始めたときだった。僕は「これはアトピーというものなのではないでしょうか?」と訊いた。

すると、その医者は「そんな病気はない。親がそんなことを言うから、子供が病気になるんだ」と言った。こんな非科学的で乱暴な人間が、医者になってもいいのだろうか。続けて、この医者はアトピーの存在を主張する人達を小馬鹿にした発言をした。ああ、腹が立ってきた。

CamScannerでスキャン

そのしばらく後に、小学生が給食の蕎麦を食べて急死するという可哀そうな出来事があって、アトピーの存在が明らかになった。あのニュースを聞いて、あのヤブ医者はどう思ったのだろうか。今からでも行って、訊いてみたい。とりあえず、友人知人には、あの大学病院だけは行くなと言ってある。

ちょっと重い話になってしまったけれど、そんなつもりではなかった。単なる導入部だったのだ。マクラだ。イントロだ。

去年の夏、皮膚に赤いところが出てきて、これはアトピーが悪化したのだと思った。症状は落ちついているとはいえ、たとえば春から夏になって急に暑くなったりするとこういうふうになることがある。

しかし、いくらアトピーの薬を使っても、良くはならない。医者へ行ったら、これはアトピーではないという。で、皮膚科へ行ったら、尋常性乾癬というものだということが判明した。その薬を使ったら、一か月ぐらいで治った。

ところが、十二月ぐらいから、また症状が出てきた。残っていた薬を使っても、良くはならない。困ったなと思っていたら、今年の冬の東京は乾燥していて、肌が荒れる人が急増していると、新聞に書いてあった。そういうことだったのか。

それで、化粧水を買いに行った。買い慣れないので、千円ぐらいのでいいだろうと決めた。これはつけたときピリピリしたのだけど、とりあえずおさまった。しかし、効くのは二〜三時間で、乾くと元の木阿弥だった。

CamScannerでスキャン

ううむと唸っていたら、テレビでどんなものでもいいからクリームを塗りなさいと医者が言った。で、また買いに行った。クリームも、やはり千円ぐらいだった。前回使い慣れない化粧水を買って、二〜三回使っただけでそのままになっている。

ともかく使ったことがあるものはないかと見ていったら、あった。ニベアである。どんなものでもいいと言っていたから、これにした。百九十八円である。これなら、効かなくても腹は立たない。これが、効いたのである。

もちろん使い続けるのだけど、百九十八円である。ニベア、偉い！　百九十八円、安い！　やはり、慣れているものを使ったほうが、いいのだろう。

ポール・マッカートニーのニュー・アルバム『キス・オン・ザ・ボトム』が発表される。インタヴューも載っているので、もうスタンダード曲のカヴァー集だということは分かっているだろう。

ポールはずっと前から考えていたのだけど、真似したと思われるといけないから、ロッド・スチュワートの『ザ・グレイト・アメリカン・ソングブック』が一段落するまで、待っていたと言っている。

たしかにそれもあったのかも知れないけれど、それをやろうと決定したのは、トニー・ベネットの『デュエッツ：アメリカン・クラシック』だったのではないかと、僕は思っている。ポールも参加している作品である。

CamScannerでスキャン

去年発表された『デュエッツⅡ』は大ヒットして、ヒット・チャートの第一位になっている。これは孫のようなレディー・ガガやエイミー・ワインハウスやノラ・ジョーンズやマライア・キャリーとのデュエットで、トニー・ベネットは素晴らしいパフォーマンスをしている。『デュエッツ：アメリカン・クラシック』のほうは二〇〇六年に発表されていて、ヒット・チャートの第三位まで行き、グラミー賞の最優秀アルバム賞を受賞して、三百万枚の大ヒットになっている。

この『デュエッツ：アメリカン・クラシック』で、ポールはトニー・ベネットと〝ザ・ヴェリー・ソート・オブ・ユー〟をいっしょに歌っている。おそらく、この経験が、ポールをスタンダードに向かわせたのだろうと思われる（この『デュエッツ：アメリカン・クラシック』もCDとDVDの二枚組スペシャル・エディションが二〇一一年一月に発売されている）。

さて、『キス・オン・ザ・ボトム』は、インタヴューでも言っているように、プロデュースもアレンジもすべて専門家にまかせて、ポールはシンガーに徹している。『ロックンロール』のジョン・レノンのような立場である。

このヴォーカル・スタイルというのが、ちょっと今迄のポールとは異なっているのだ。僕もちょっとジャズを聴いているのだけど、いわゆるジャズ・ヴォーカルとも違う。もちろん、これまでのロックなポールでもない。強いていえば、十年ぐらい前あたりからアルバムに一曲はある、あまり口を開けずに小さく歌う、ジャズではウィスパリングというのと近いかも知れない。

オリジナル曲二曲はそうではなくて、〝オンリー・アワ・ハーツ〟は少しその気はあるのだけど、〝マイ・ヴァレンタイン〟はいつものポールに近くて、こちらは分かりやすい。どうして、スタンダードはこういうスタイルにしたのだろうか。

やはり、スタンダードはこういうスタイルで歌うという、ポールの美学があるのかも知れない。こういうものこそいつもの慣れているポールのスタイルで歌えばいいのにと、僕は思っているのだけど。

そういうわけだから、僕はエリック・クラプトンのギターがかっこいい〝マイ・ヴァレンタイン〟を中心に聴いている。

今年は、ビートルズのレコード・デビュー五〇周年である。きっと、秋は大変なことになるのだろう。ポールやリンゴが今のうちに作品を発表したのも、そういうことだと思われる。さあ、飲めや歌えやで、大騒ぎしようぜ！

〈二〇一二年三月号〉

冬に走りまわろう

引っ越しをして、今日でちょうど三週間目になる。それで、まだ開けていない段ボール箱が、三十個はある。いちおうの家具の位置は決まったのだけど、どうも使い難いところがあって、もう少し生活をしながら、考えたほうがいい。仕事をしながらだから、まとまった時間がとれなくて、唸ってもしょうがないけれど、どうしてもこうなってしまう。

今回の引っ越しで失敗したのは、パッキングの最後のほうであわてて、手当たり次第になんでもつっこんで、内容を箱に書かなかったことだ。だから、必要なもので、まだ見つかっていないものがけっこうある。二週間ぐらいで片づくだろうと思っていたのだけど、とても無理だった。十一月いっぱいでも、難しいだろう。とりあえず、年内には、なんとかしたいと思っている。年は越したくないもんね。

引っ越しをした当初、いろいろな用事があって、つまりガスのチェックや電話のチェックやテレビのチェックや水道のチェックなどで、それにさまざまな届けもあったりして、朝しっかりと起きるようにしていて、それが今でも続いている。早ければ午前六時に遅くても午前八時には起きて、午前中から動いている。

午後はなるべく家にいて、片づけることに専念する。それで、だいたい午後十時ぐらいから酒を飲み始めると、午前一時には眠くなってしまう。ラジオの深夜放送をつけて布団に入るのだけど、おそらく十分も聞いていないだろう。だから、伊集院光もバナナマンもオードリーも、ほとんど聞いていない。

この原稿も、昼間に書いている。四十年間も深夜に仕事をしてきたから、なんとなく新鮮である。坂の多い町だから、自転車が役に立たなくて、電動自転車を買おうか、いっそのことオートバイの免許をとろうかとも考えている。しかし、ああいうものには、年齢制限があるのかな。

引っ越しを知らせたら、じゃあ久しぶりに飲もうかという旧友もいる。僕達のような年齢になると、そういうことでもないと会う機会がない。先日は、二十五年前に『苺畑の午前五時』を担当してくれた元編集者と飲んだ。今は、まったく違う仕事をしている。そこで話題になったのが、我々が初めて会ったのが新宿の末廣亭だったということだ。たしか、膝替わりが先代の林家三平で、取りが先代の金原亭馬生で、「船徳」が素晴らしかったのを思い出した。

また、今回僕は初めて県民になったわけで、同じ神奈川県民には友達が多くて、無茶苦茶なことを言う。「松村さん、神奈川県民になったんだから、これからはＤｅＮＡベイスターズのファンにならなきゃだめですよ。ヤクルト・スワローズの応援をしたら、住民届けを破棄しますからね」

中畑ベイスターズか……最下位か……。とりあえず、一回は横浜球場に行ってみようか。Ｄ

eNAベイスターズ対ヤクルト・スワローズ戦だろうな、やっぱり。それで、三塁側に座っていたりして。

そういうわけだから、ずっと本も読んでいなかった。一か月に少なくとも十冊で多ければ二十冊は読んでいたわけで、こんなに読まなかったのも初めてなのではないだろうか。で、引っ越しをして最初に読んだのが、『ニール・ヤング自伝　I』(白夜書房　二千六百六十七円+税)だった。これが面白かった。

明らかに、ニール・ヤング自身が書いたものである。というのは、まとまった流れがないからだ。プロのライターが手を加えたら、絶対にこんなふうにはならないだろう。本人だけが理解していることを、なんの説明もしないで当たり前のように書いている。そこが面白い。実に、ニール・ヤングらしい。

自伝といっても、きちんと時系列で書いているわけではない。気分のままに書いたエッセイととらえたほうが、正しいかも知れない。もちろん、子供時代、アマチュア・バンド時代、バッファロー・スプリングフィールド時代、クロスビー、スティルス、ナッシュ・アンド・ヤング時代、ソロ時代が書いてあるのだけど、それがメインではない。ニー様が興味を持っている人や物が、面白いのである。

物に関しては、かなりの鉄道模型のマニアであること。ピュアトーンという音響システムを開発していること。自転車やバスや船のマニアであること。それも、ヴィンテージ物を見つけて、何年もかけて修復や改造を行なっていること……。

CamScannerでスキャン

プールで爪先の骨を折ったので、ステージから離れて、ハワイでこの本を書き始めたというようなことも、記されている。ニール・ヤングとハワイ……似合わないな。最近ハッパと酒をやめたので、十八歳以来一番綺麗な身体になっているとも書かれている。そのために、曲が書けなくなったという。これが去年のことである。いいですか。

人に関しては、やはりクレイジー・ホースが一番興味深い。クレイジー・ホースは他では行けないコズミックな場所に連れて行ってくれる乗物なのだそうだ。そして、クレイジー・ホースには目的地を定めてはいけないらしい。また、指示してもいけないという。何度も出て来る詩神は、そこから生じるようだ。そして、クレイジー・ホースとセッションを始めようと、ニール様は考えている。これが去年のことである。いいですね。

今年の六月にリリースされた『アメリカーナ』が、それだろう。アメリカのトラディショナル・ソングだけを集めた作品だった。曲が書けなかったのだから、そういうことになる。そして、今度はオリジナル曲で、タイトルが『サイケデリック・ピル』である。これにどういう意味があるのだろうか。考えたって、しょうがないけど。

内容は自伝でニール・ヤングが書いたとおりになっている。おそらく、目的地はないのだろう。誰も、指示していないのだろう。つまり、暴走である。馬群から離れただけではない。競馬場から出て行っちゃったんだ。町を走りまわっちゃってるんだ。空へ飛んで行っちゃったんだ。

ディスク1の一曲目の〝ドリフティン・バック〟から、ディスク2の四曲目の〝ウォーク・

ライク・ア・ジャイアント〟まで、飛んじゃってる。なかには〝フォー・ザ・ラヴ・オブ・マン〟という美しい曲もあるけれど、暴走の二枚組であるということに間違いはない。

聴いたことのあるメロディーと聴いたことのある歌詞と聴いたことのあるギターのフレーズが、曲のサイズに関係なく走りまわる。こうなったら、もはやそこに身をまかすしかないだろう。何度もまかせていると、詩神に逢えるかも知れない。好むか好まないかは、あなた次第である。

（二〇一三年一月号）

CamScannerでスキャン

長い坂道を

ひとりで暮らすようになってから、そろそろ一年になる。多いときには六人で少ないときでも三人で、三十年近く暮らしてきたので、どうかなと思っていたのだけど、ほとんど一か月で慣れた。その約三十年の前の十年ぐらいはひとりで暮らしていたので、その感覚が戻ってきた。ひとりの生活というのは、静かである。

基本的に、炊事、洗濯、掃除は苦にならないので、なんとかやっている。朝は午前八時には目が覚める。ゴミは八時までに出さなければならないというので、そうしていたのだけど、収集車が来るのは十時過ぎだと分かったので、目が覚めてもすぐには起きない。そのまま、本を読んだりしている。

ゴミを出したら、洗濯機を動かす。ひとりなので、毎日洗濯をする必要はないのだけど、晴れている空を見ると、洗濯ものを干さなきゃという気になる。冬の間は、ジーパンなどは朝干しても夕方になっても湿り気が残っていたけれど、この三十五度の暑さの夏は、Tシャツなどは二時間もしないうちに乾く。猛暑を有効に利用しているようで、エコな気分になる。

洗濯機を動かしたら、掃除機を使う。掃除が終わる頃に洗濯も終わるので、洗濯ものを干す。

それから、ゆっくりと朝刊を読むと、十一時ぐらいになって、食事を作る。食べ終わったら、仕事を始める。
もう何十年も仕事は夜にしていたので、昼間に文章を書くのは妙な気分だった。夕方になって空腹だったら、食事を作る。そうでなかったら、作らない。午後十時ぐらいに一食分ぐらいの料理を作って、酒を飲み始める。すると、早ければ午前一時に、遅くても午前三時には、眠くなる。それで、一日が終わる。
一日三食というのは、惰性のような気がする。僕の場合は、一日二食一酒か一日一食一酒ということになる。それで、体調はいい。快食快眠快便である。現在、体重は六十三・五キロである。二十年ぐらい前に一番太っていたときは八十六キロあったのだから、これはちょっと自慢してもいいだろう。
一メートル七十六センチで六十三・五キロというのは、BMI（体重÷身長÷身長）では約二十・五になる。二十五以上が肥満だというのだから、痩せていると言っても非難はされないだろう。なんてったって、三年前には太ってきつくなったジーパンを友達にあげていたのに、今年は痩せてゆるくなった短パンをあげているのだから。LLがLになったという感じである。
僕の住んでいるところは丘の上で、最寄りの駅までは十分坂道を下りて行く。ということは、帰りは十分坂道を上がって来るということになる。これが辛かった。わざわざ、遠まわりのバスに乗ったりもした。当初は、みんなに歩いたほうが身体にいいと言われて、いまさら身体を鍛えるつもりはないと怒っていた。今では、十分間登っても、息が切れなくなった。

しかし、十分下って十分上るのは、面倒くさい。自分で料理を作るのは偉いと言われるのだけど、駅前まで行かなければ飲食店がないからであって、下り上りが面倒くさいから、自分で作っているのである。近くには蕎麦屋が一軒あるだけで、不味かったからもう行かない。カフェ・バーもあるけれど、僕には無縁だ。

スーパーは駅前にあるのだけど、丘の上にもう一軒あるということが分かった。行ってみて、駅前よりも値段が若干高めだということに気がついた。やはり、これは品物を坂の上まで運ぶからなのだろうか。つまり、面倒くさい。

まあ、ここにずっと住む気はなくて、数年後には他のところに引っ越すだろう。考えてみたら、生まれ育って二十代前半まで住んでいた家を出てから、これが七回目の引っ越しということになる。ずっと東京で、ここが初めての神奈川である。次は、東京に戻るか、神奈川のもっと西に行くか。

どちらにしろ、平地に住みたい。引っ越して来たときに持ってきた自転車には、まだ一度も乗っていない。

いつだったか、ロンドンの坂道を車で走っていたら、同乗していた友達が、ここらへんがマスウェル・ヒルだよと言った。いうまでもなく、レイ・デイヴィスとデイヴ・デイヴィスの兄弟が生まれ育ったところである。車を止めて少し歩いてみたかったのだけど、急いでいたのでそういうわけにもいかなかった。窓から見た感じでは、下町っぽかった。

一九六四年にレコード・デビューしたキンクスは〝ユー・リアリー・ガット・ミー〟や〝オール・デイ・アンド・オール・オブ・ザ・ナイト〟をヒットさせて、ブリティッシュ・ビート・バンドとしての評価を安定させた。

しかし、一九六六年の『フェイス・トゥー・フェイス』からは、ビート・バンドを卒業して、美しくひねくれた音楽を作るようになる。時期的にいっても、明らかにビートルズの『ラバー・ソウル』の影響を受けているはずなのだけど、本人に訊ねたら、絶対に否定するだろう。六〇年代には、レイ・デイヴィスが他のバンドを誉めるということはなかった。ポール・マッカートニーやピート・タウンゼントがキンクスを讃えても、レイ・デイヴィスはビートルズやフーを評価する発言はしていない。

いわゆるコンセプト・アルバムにのめりこんでいくのは、一九六八年の『ヴィレッジ・グリーン・プリザヴェイション・ソサエティー』からで、これもビートルズの『サージェント・ペッパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』の影響だろうと思うのだけど、レイ・デイヴィスは違うと言うだろう。タイトルからして、そうとしか考えられないのに。

結局、キンクスのコンセプト・アルバムは、八年間で十枚発売される。現在では、この時代のレコードがもっとも評価されている。しかし、当時はまったく人気がなかった。レイ・デイヴィスの病気の時代とさえ、言われている。

『マスウェル・ヒルビリーズ』は一九七一年の発表で、この時期のキンクスの代表作といってもいいだろう。生まれ育ったマスウェル・ヒルがイメージのルーツになっているのは、間違い

ないだろう。

レイ・デイヴィスが子供の頃には、オールド・アメリカン・ミュージックが、ロンドンのマスウェル・ヒルで、このようになっていたということだろう。ビートルズの〝ホエン・アイム・シックスティー・フォー〟の世界だと言ってはいけないのだろうな、やっぱり。

問題は、これが一九七一年だということである。つまり、レッド・ツェッペリンやディープ・パープルのハード・ロック、マーク・ボランやデヴィッド・ボウイのグラム・ロック、ピンク・フロイドやエマーソン、レイク・アンド・パーマーのプログレッシヴ・ロック……そういうミュージック・シーンで、どうしてノスタルジックなミュージック・ホールのようなレコードを作ったのかということである。病気の時代のレイ・デイヴィスである。分かるわけがない。

その『マスウェル・ヒルビリーズ』の、二枚組のデラックス・エディションがリリースされる。何も考えずに、一度は聴いておいたほうがいいだろう。

〈二〇一三年十月号〉

CamScannerでスキャン

Ⅳ

CamScannerでスキャン

イエス・アイ・アム・エクスペリエンスト

佐藤泰志の「海炭市叙景」が映画化されて、もうすぐ公開される。佐藤泰志は芥川賞で五回三島賞で一回候補になって、受賞出来なかった悲運の小説家だった。過去形で書いているのは、彼はもういないからである。一九九〇年十月九日、彼は自殺した。

いうまでもなく、一九九〇年十月九日というのは、生きていればジョン・レノンの五〇回目の誕生日である。だいたい、彼の最初の著書であり最初の芥川賞候補作の題名というのが、「きみの鳥はうたえる」なのである。〝アンド・ユア・バード・キャン・シング〟。僕が惹きつけられたきっかけである。

きっと、ビートルズが好きな人なのだろう。しかし、たしか一周忌の彼を偲ぶ会で、夫人に訊ねたら、好きなのは彼女で、レコードをかけると彼も聴いていたということだった。嫌いだったら、題名にはしないだろう。もはや確かめる術はなくて、やはり一度だけでも会っておきたかった。

その日の二次会で、彼の小説仲間らしい人達が〝商業誌〟と言うのが、分からなかった。そのうちに、通常の文芸誌のことを言っていることに気がついて、唖然とした。まるで、小説は

同人誌に書くものではないとでも言っているかのようだった。

佐藤泰志は『新潮』にも『文藝』にも『文學界』にも『すばる』にも書いていたので、そんなふうには思ってもいなかっただろうけれど、彼がそういうトラブルに巻き込まれたことがあったことを、後から知った。

周囲の人間関係が違っていたら、彼は死ななくてもすんだのではないかと思った。その後、何かで誘われたのだけど、僕は応えていない。

佐藤泰志の著書は、生前には三冊しか出ていなくて、その死の翌年に三冊出た。この六冊がすべてで絶版になっていたのだけど、二〇〇七年十月九日に『佐藤泰志作品集』がクレインから発売された。これが三千三百円というのは、実に安い。その投げ込み（月報のようなもの）に書いてくれと依頼されたけれど、何も書けなかった。

その作品集を読んだ彼の故郷函館の人達が製作実行委員会を設立し、市民参加の映画ということで協賛金一千百万円集まったという。熊切和嘉監督はワイルドな映画を作る人らしいのだけど（『編集部の』小川がそう言っていた）、ここではとても美しい。

佐藤泰志の小説は、ほとんどが青春小説といってもいいだろう。もちろん、現在氾濫している単純なそれではなくて、深く屈折したものである。手応えが大き過ぎて、何も言えなくなってしまう。他に、こんな青春小説はないだろう。

『海炭市叙景』は彼の最後の作品で、函館と思われる土地で起こる悲しい出来事が十八篇連作で描かれている。彼にしては珍しく青春小説だけではなくて、それらが微妙に関係している。

映画ではその中から五篇が使われている。このセレクトも難しかっただろうと思う。

この映画公開にともなって、『海炭市叙景』は初めて小学館で文庫になる。実は、彼の死後、僕はその著書の文庫化をいくつかの出版社に働きかけて不調だったので、これは嬉しい。出来れば、続けて後の著書も文庫化してもらいたい。単行本未収録作品も、たくさんあるはずだ。

この映画の音楽はジム・オルークで、予想していたように静謐なものだった。しかし、その間から僕の頭の中に流されていたのは、ジミ・ヘンドリックスのギターだった。あの攻撃的なようでいて、寂寥感のあるジミ・ヘンドリックスのギターである。この映画を見たとき、ずっとジミヘンを聴いていたからかも知れない。

ジミヘンのギターにそういう感覚を持ち始めたのは、彼の伝記『ジミ・ヘンドリックス 鏡ばりの部屋』（チャールズ・R・クロス著 ブルース・インターアクションズ発行 二千五百円）を読んでからかも知れない。僕もずいぶんとミュージシャンの伝記を読んでいるけれど、これほどの少年時代は読んだことがない。

父親のアルが二十三歳で母親のルシールが十七歳のときに、出来ちゃった婚でジミは生まれた。アルの父親は奴隷の母が主人の白人にレイプされて、生まれた。母親の何代か前は、チェロキーだった。ルシールの父親も主人に奴隷がレイプされて、生まれた。母親の先祖も奴隷とチェロキーだった。

アルとルシールとジミの一家の生活は楽ではなくて、ルシールはしょっちゅう家出をしてい

た。しかし、遠くまで行くことはなく、酒場で別の男といるところをアルに見つかると、そのままいっしょに帰ってきた。

そういう生活なのに、一家には六人の子供が出来た。しかし、長男のジミと次男のレオン以外は、みんななんらかの障害があって、里子に出されたり施設に引き取られたりしている。

父親が酒浸りになって帰って来なくなるときもあって、母が家出して両親ともいないジミ兄弟は栄養失調になり近所や親戚をたらい回しにされる。結局、両親は離婚して、ジミ兄弟は父親と暮らし、母親は再婚するのだけど、ジミが十八歳のときに亡くなる。

ジミは十五歳からギターを始め、学校をサボり退学になる。毎日廃棄するハンバーガーを貰いにいくようになり、車を盗む。それを何度か繰り返したために、刑務所に入れられることになる。軍隊に入ると司法取引してくれることを知り、ジミは陸軍に入る。

もちろん軍隊など楽しいところではなくて、ジミは同性愛者だと偽って一年後に除隊する。後は、誰もが知っている、ジミ・ヘンドリックスのストーリーである。

凄まじい。それでも、ジミは母親を聖母のように思っていて、〝エンジェル〟をはじめとして何曲も母親がテーマの曲を作っている。シアトルに帰ると、必ず父の家に泊まって飲み明かしている。彼のギターがあれだけ攻撃的なのも、分かる気がする。そこに寂寥感を見るのも、分かるだろう。

ずっとジミヘンを聴いていたというのは、三月に続いてまた大量にリリースされるからだ。

まず、『ウエスト・コースト・シアトル・ボーイ〜ジミ・ヘンドリックス・アンソロジー』、CD四枚DVD一枚のボックス・セットである。

この一枚目が面白くて、ソロ・デビュー前のバック・ギタリストだったときのものを集めている。特に興味深いのは、一九六四年のドン・コヴェイの〝マーシー、マーシー〟である。これは一九六五年にローリング・ストーンズがカヴァーしている。つまり、それとは知らずに、ブライアンやキースは、ジミヘンの音をレコードから採っていたのである。

後の三枚は、未発表の嵐である。未発表曲、未発表ヴァージョン、未発表ライヴ……。よくこれだけ集めたと、感心する。だって、ジミヘンの活動期間は、たった四年なんだぜ。スタジオでもライヴでも、いつもテープを回していたのだろうか。本当に、どうなっていたのだろうか。

DVDは『ヴードゥー・チャイルド』というタイトルで、監督はやはりボブ・スミートンである。考えてみたら、ジミヘンのライフ・ストーリーは、これが初めてかも知れない。九十分が、実に短く感じる。当然だろうけれど、少年時代はサラッと流している。

この他にも、かつて発売されていたものが、新しいパッケージでリリースされる。『BBCセッションズ』は二CD一DVD。『ブルース』は一CD一DVD。『ライヴ・アット・ウッドストック』は二CDのまま。

つまり、僕は限られた時期に、ジミヘンを九枚のCDを聴き三枚のDVDを見ていたのである。そこに、『鏡ばりの部屋』を読んで、『海炭市叙景』を見るというのも加わった。とりあえ

CamScannerでスキャン

ず、もう少し深くジミヘンのギターが聴けるようになったと思う。そして、佐藤泰志の小説の評価が高くなることを願っている。

〈二〇一〇年十二月号〉

CamScannerでスキャン

五十年前の夏がやって来る

大相撲五月場所［二〇二二年］は、僕達（六人）は初日に行った。だから、そのときには、西前頭七枚目の旭大鵬が優勝するとは、夢にも思っていなかった。僕は稀勢の里に期待していたのだ。それにしても、三十七歳八か月での初優勝というのはミラクルのようなもので、実にたいしたものである。三十五歳の若の里も三十四歳の雅山も、もうひと踏ん張りしてもらいたい。あと、三十六歳の高見盛も。

相撲が終わったら、当然僕達は酒を飲みに行く。終わるのは六時過ぎだから、それから終電まで、移動時間も入れて、五時間半ぐらいだろうか。しばらくは両国のちゃんこ屋に行っていたのだけど、去年の九月場所には珍来という店に行った。これは一日一本必ず相撲に懸賞を出す店で、「ラーメンとギョウザ八十年、珍来」とアナウンスされる。すると、僕達は「どこにあるんだよ」と言うことになる。気になっているけれど、場所が分からないのだ。

毎日懸賞を出すぐらいだから、それなりの大きさの店だろう。いや、ラーメンとギョウザがメインなのだから、相撲好きのオヤジがやっている大衆店かも知れない。僕達みんなが探していたのだけど、分からない。ところが、インターネットをいじっていて、ふと思いついて検索

したら、すぐに分かった。総武線で千葉方面に向かって、何軒もあるチェーン店だった。つまり、王将を小さくしたようなものだったのだ。

ともかく、何年も気になっていたから、僕達は予約してから行った。後から、そっち方面出身の人に「珍来に予約してから行く人なんていませんよ。部活の帰りにラーメンを食べに行く店ですよ」と言われてしまった。なるほど、食べて飲んで、おそろしく安かった。それに味をしめて、五月場所では王将に行った。

両国近辺でそうやって飲んでから、大井町でもう一軒行くことになっている。大井町というのは不思議に思われるかも知れないけれど、交通の便がいいのだ。僕達は多摩地区、城南地区、横浜地区とバラバラなので、ここで分かれるとちょうどいい。いちおう言っておくと、この事実を見つけたのは僕である。

最近は行ってないのだけど、ここに何回か行ったある店がある。この店の人達について、僕達はあるストーリーをこしらえている。主人は五〇代前半ぐらいで、その奥さんは三〇代半ばぐらいで日本語がぎこちない。奥さんによく似たおばあさんがいて、赤ちゃんを抱いて座っている。そこで、僕達は主人が若い中国人のお嫁さんをもらったのだと決めた。赤ちゃんが生まれたから、中国からおばあさんが来たのだということにもした。

次に行ったときには、奥さんによく似た若い女性がいた。次に行ったときには、奥さんによく似た若い男性もいた。心なしか、主人に覇気がなくなっているように見えた。それを見逃す僕達ではない。新しいストーリーが続けられる。つまり、中国人の若いお嫁さんをもらったら、

そのお母さんも妹も弟もやって来て、主人は唖然となっているということにした。

もちろん、このストーリーはまったく違うのかも知れない。おばあさんは主人のお母さんで、この人は中国人留学生を積極的に雇用している立派な人物なのかも知れない。そういったストーリーを作らなければと思っているうちに、別の店に行くようになってしまった。だって、あの店は日曜は休みなんだもん。

で、四月に、久しぶりにその店に行った。主人と奥さんと妹（と決めている人）はいたけれど、おばあさんと弟（と決めている人）はいなかった。びっくりしたのは、三つか四つぐらいの子供がメニューとおしぼりを持ってきたことだった。あのおばあさんに抱かれていた子が、もうこんなに大きくなっているのだ。

そのときにその店にいっしょに行ったのは、現在はお医者さんでかつては同じバンドでドラマーをやっていた奴だった。日本平大八車といっても、分からないだろうな。あることがあって、三十年ぶりぐらいに会うことになったのだ。大井町の駅で待っていて、ふと横を見たらそいつがニヤニヤして立っていた。その途端に、「あのさあ」と三十年前と同じ口調で喋り始めた。僕も三十年前と同じように話した。

いっしょにバンドをやっていた仲間というのは、三十年経っても関係はまったく変わらないのだなと思った。ビーチ・ボーイズが再結成して作った『ゴッド・メイド・ザ・ラジオ～神の創りしラジオ』を聴いて、僕はそのことを思った。

ビーチ・ボーイズが再結成したというのは、おかしいだろう。解散はしていないはずだから。

ちょっと、ビーチ・ボーイズのメンバー・チェンジを、おさらいしてみよう。結成したときにいたのは、ブライアン・ウィルソン、デニス・ウィルソン、カール・ウィルソン、マイク・ラヴ、アル・ジャーディンである。

メジャー・デビュー直前にアル・ジャーディンが脱退して、デヴィッド・マークスが加入する。この五人でアルバム二枚作ったところで、アル・ジャーディンが戻ってくる。だから、三枚目は六人である。その後、ウィルソン兄妹の父であるマネージャーにいびられて、デヴィッド・マークスが辞める。

そのまま『ペット・サウンズ』までこの五人だったのだけど、ブライアン・ウィルソンがツアーに行かなかったために、その代わりの人間が何人か入って、結局ブルース・ジョンストンになる。彼の名前は『スマイリー・スマイル』から正式メンバーとして記されて、六人になる。『カール・アンド・ザ・パッションズ～ソー・タフ』では、ブルース・ジョンストンが脱退してブロンディー・チャップリンとリッキー・ファター（たしか、ラトルズのリンゴ役だ）が加入している。七人である。『15ビッグ・ワンズ』には、ブロンディー・チャップリンとリッキー・ファターの名前はない。五人である。

ブルース・ジョンストンが戻って来るのは『L.A.』で、ここにはブライアン・ウィルソンの名前はない。次の『キーピン・ザ・サマー・アライヴ』にはブライアン・ウィルソンの名前もあり、六人になる。その後、デニス・ウィルソンが亡くなり、最後のメジャー・アルバム『スティル・クルージン』は五人になる。『サマー・イン・パラダイス』というのは日本で発売

されたのだろうか、メンバーは分からない。

その後、カール・ウィルソンが亡くなり、ブライアン・ウィルソンが去り、アル・ジャーディンも去り、マイク・ラヴとブルース・ジョンストンのビーチ・ボーイズはフジ・ロックでも演奏した。

何を書いてるんだかという気が自分でもしているけれど、つまりビーチ・ボーイズは解散していないから再結成ではないのである。ブロンディー・チャップリンとリッキー・ファターが入っていないということは、全盛期の六〇年代の生き残りのブライアン・ウィルソン、マイク・ラヴ、アル・ジャーディン、デヴィッド・マークス、ブルース・ジョンストンの五人ということになる。

『ゴッド・メイド・ザ・ラジオ』は素晴らしい。六〇年代の明るさと七〇年代の手堅さと、ビーチ・ボーイズの良い部分だけで出来ている。かつてのビーチ・ボーイズのメロディーも出てくるし、ビーチ・ボーイズではないメロディーも出てくる。バックはブライアン・ウィルソンのバンドのようだから、はっきりいってビーチ・ボーイズよりもしっかりしている。

つまり、ブライアン・ウィルソンがスタジオ・ミュージシァンに演奏させビーチ・ボーイズに歌わせた、あの全盛期そのままということになる。この号が発売される頃には、もう流れているだろう、〝ゴッド・メイド・ザ・ラジオ〟が。

〈二〇一二年七月号〉

夢をめぐる旅

あれは去年〔二〇一二年〕の十月の中頃だっただろうか、ポール・デルヴォーの展覧会を見に行った。デルヴォーはベルギーのシュールレアリスムの画家であって、十九世紀の終わりに生まれて二十世紀の終わりに亡くなっている。

僕はこの画家の絵が好きで、個展が行なわれると必ず見に行くようにしている。しかし、今、年譜を見てみたら、彼の個展は東京では今迄に四回行なわれていて、僕は一九七五年と一九八九年の二回だけしか行っていなかったということが判明した。

デルヴォーの個展だけではなくて、たとえば「ベルギーの画家達」とか、たとえば「シュールレアリスムの画家達」とかいった展覧会も、僕は見に行っている。だから、もう何回も行っているような気になっていたのだろう。

地方へ行く仕事が多かったときには、時間があるとこまめにその地の美術館へ行って、思いもしなかったところでデルヴォーの作品と出逢って、びっくりしたこともあった。そういったこともあって、もう何回も見ているような印象があったのかも知れない。

もちろん美術の世界に詳しいわけではないから、そういった展覧会の情報も確実にとらえて

CamScannerでスキャン

いるわけではない。今回だって、偶然にどこかでその開催を知ったのだろう（もう、忘れているということである）。

場所は府中市美術館というのだから、そのときに住んでいたところとは近かった。しかし、府中に美術館があるなんて、まったく知らなかった。もう十数年も住んでいるというのに、名前を聞いたこともなかった。ひどいものである。

近隣の市で美術館があるところも、なかっただろう。どうして、府中にはあるのだろうか。考えるまでもなく、府中には競馬場がある。みなさんの外れ馬券のおかげで、こういう施設が充実しているのだろう。

それにしても、府中市美術館がどれくらいの規模なのか、分からない。小さな会場で十点とか二十点ぐらいしか出品されていなくて、がっかりしたことも何回かある。しかし、府中市美術館は、ちょっとしたものだった。約八十点は出品されていた。

実は、これは二〇〇七年にベルギーのポール・デルヴォー美術館で行なわれた「夢をめぐる旅」展を、日本向けにアレンジしたものだという。僕があとベルギーだけには行きたいと思っているのは、この北海の近くにある美術館に行ってみたいからである。

デルヴォーの絵についてちょっと触れてみると、たとえば遠くに古代ギリシャの神殿のようなものがあって、近くには裸の女性が何人か無表情で立っていて、その間には路面電車が走っている。遠景が海だった時期もあった。

そこが家の中であると、白衣を着た研究者のような男がルーペでアンモナイトのようなもの

を見ている。そこが家の外であると、帽子をかぶったスーツの男が新聞を読んでいる。家といっても、駅の待合室のようにも見える。それどころか、プラットホームかも知れない。汽車の横に佇む、後ろ姿の赤い服の女の子もいる。日常生活を送っている、何体かの骸骨達もいる。

それらのほとんどが、遠近法で描かれている。その遠近法は確かなものなのだろうけれど、じっと見ていると目眩いがしてくるようなところがある。正しいはずなのに、おかしいのである。おかしいはずなのに、正しいのである。

デルヴォーの絵は舞台装置のようだと言った人がいた。また、映画のセットのようだと言った人もいた。つまり、人工的なのである。その中でどういう物語があるのか知らないけれど、不自然であることに間違いはないだろう。

つまり、デルヴォーの世界は、どこにもない世界である。だから、「夢をめぐる旅」なのだろう。

それにしても、この個展のキャッチコピーが「夢に、デルヴォー。」というのは、どういうことなのだろうか。デルヴォー愛好家は、このコピーを読んでどういう顔をすればいいのだろうか。

この個展は府中では十一月までだったのだけど、それ以降も巡回されていて、これからは三月までは埼玉で、四月五月は岡崎で、七月八月は秋田で、各々行なわれることになっている。興味のある人には、すすめたい。

CamScannerでスキャン

今回の出品作品の中では、「森の小径」、「エペソスの集い　II」、「トンネル」、「夜の使者」が素晴らしかった。

デルヴォーの世界で目がくらんだようになって、僕は府中の駅に向かった。来るときはバスに乗ったのだけど、道のだいたいの見当はついていたので帰りは歩くことにした。

十月の中頃というと、おかしな頃だった。十月五日に『苺畑の午前五時』が文庫で発売されていて、十月二十五日に発売される『ウィズ・ザ・ビートルズ』は書き終わっていた。

普通だったら少しゆっくりしてもいいはずだったけれど、それどころではなかった。十月中に引っ越しをすると自分で言っておいて、まだ引っ越し先が決まっていなかったのである。というよりも、まだ探してもいなかったのだ。デルヴォーの絵なんか見に来ていて、良かったのだろうか。

歩きながら、今どうなっているのだろうかと思った。これからどうなっていくのか、まったく分かっていなかった。まるで、デルヴォーの絵の中にいるようだった。それが今でも続いている。

また、ジミ・ヘンドリックスの〝ニュー・アルバム〟が発売される。『ピープル、ヘル＆エンジェルス』というタイトルで、これで四枚目ということになる。最初の『ファースト・レイズ・オブ・ザ・ニュー・ライジング・サン』は、理解出来た。二枚目からは、もう分からない。

その死の直後にあれだけたくさんのレコードが発売されたのだから、それだけの素材があるということは分かる。そういったいいかげんにリリースされたものを、オリジナルに近い形で発表したいというのも分かる。しかし、それらは未完成なのである。ジミヘンの意図していたものは、うかがうことは出来ないのである。

それでも、発表されると、聴いてしまう。ただただ、ぼうっとして、聴いてしまう。ともかく、ジミヘンが聴こえる。それでいいのかも知れない。まるで、ジミヘンの夢の中に入ってしまったようだ。何を考えているのだろうか。

ジミヘンは一種のドラッグなのかも知れない。人間をやめなくてもいいドラッグなのだろう。このギターは夢の中に決まっている。どうなっているのだろうか。

〈二〇一三年四月号〉

キンクスのスクンキ

立川談志が亡くなったのは二〇一一年十一月二十一日だから、もうすぐ三年ということになる。亡くなった次の年から、談志の思い出を綴った本が、相次いで出版されていて、目についたら読むようにしている。

ここで面白いのは、弟子が書いたものが多いということだ。古今亭志ん朝や三遊亭圓楽では、そういうことはなかった。なんといっても、談志自身が著作が多かったし、弟子もずいぶんと本を書いている。立川流のトップ・スリーといわれている志の輔、談春、志らくはもちろんのこと、談四楼は小説も書いていてどちらが本職か分からないぐらいである。

今回出版されたものを読むと、その弟子と談志との関係が分かって興味深い。弟子になるぐらいだから、みんな談志に憧れていたのだろうけれど、実際に師弟の関係になると、うまくいく人とそうではない人がいる。

立川流はすべてが談志の一存で決まってしまうから、談志とうまくいかなかった人の落語家人生は厳しいものになる。落語協会や芸術協会とは、そこが違う。読んでいくと、そこらへんが見えてくる。うまくいかない人は、大変な思いをする。

おそらくは才能もあって談志の思考も理解して、兄弟子の談春よりも先に真打ちになっている。『談志のことば』を読むと、それがよく分かる。談志が好きだからと、懐メロを覚えたりもしている。志の輔や談春と同じように独演会のチケットが入手しにくい人だから、頭も良いのだろう。

談幸の『談志の忘れもの』には、あまりそういったところはない。各々の関係も違うのだろうけれど、わりとさらっと書いている。

立川流第四の男といわれている生志の『ひとりブタ』になると、ちょっと違ってくる。なんといっても、なかなか真打ちにさせてもらえなかった人だ。周囲の人がいくら薦めても、談志は首を縦に振らなかった。ようやく真打ちになったときのエピソードが、面白い。談志につけてもらった笑志という名前を、生志に変えたのだ。談志の気が変わって、名前を返せと言い出すかも知れないから。

快楽亭ブラックになると、これは凄まじい。落語界のアンダーグラウンドの帝王といってもいい人なのだけど、破門されている。『立川談志の正体』という題名でも予想出来るように、談志の裏の顔が記されている。悪口雑言ばかりでも、読んでいくと談志ならこれぐらいのことはやるかも知れないというような気になってくる。

松岡弓子は談志の長女で、『ザッツ・ア・プレンティー』は一種の闘病記である。もう声が出なくなって筆談になっても、談志はテーブルに向かって原稿を書いていたという。松岡はその前に座って、この日誌を書いていたようだ。なんといえばいいのか、分からない。

CamScannerでスキャン

そのときに談志が書いていたのが、おそらく『立川談志自伝　狂気ありて』だろう。当然未完なのだけど、前記のように談志の著作は多数あるので問題はまったくない。それよりも、そういう状態になってもまだ原稿を書いていた、談志の表現者としての執念を感じる。文章が乱れていなくて、落ちついているのにも驚かされる。

最後に談志が弟子達と会ったのは八月で、それ以後は家族以外には誰とも会ってはいない。二十一日に亡くなって密葬が行なわれて、二十三日に家族が記者会見をしている。ほとんどの弟子は師匠の死を知ったのは、そのときだったらしい。ある弟子は談志の長年の友人である毒蝮三太夫に談志の容態を訊ねられて、困っているときにそのニュースを聞いたそうだ。

生前、談志は弟子に、俺が死んだときの新聞の見出しは〝談志が死んだ〟だろうと言っていたという。〝だんしがしんだ〟、回文である。

ロック・バンドが亡くなって（無くなって）、解散してから本が発表されることはある。面白いものは、やはりそのバンドに在籍していた人物が書いた本だろう。たとえば、ビートルズだったら、ポール・マッカートニーの「メニイ・イヤーズ・フロム・ナウ」。たとえば、ドアーズだったら、ジョン・デンズモアの「ドアーズ」。

レイ・デイヴィスには「エックス・レイ」という著作があるのだけど、SF的自伝という変則的なものである。なおかつ、キンクスは解散してはいないのだ。最後のコンサートは、一九九六年六月である。最後のアルバムは、一九九六年十月の「トゥー・ザ・ボーン」である。

しかし、キンクスが解散したという発表は、一度もない。つまり、十八年間、活動を休止しているだけなのである。数年に一度、メンバーの誰かが活動再開に向けて動いているというニュースがある。難しいバンドなんだよね、キンクスは。

キンクスがレコード・デビューしたのは一九六四年だから、今年で五〇周年ということになる。そこで、現在ソニー・ミュージックのカタログになっている、一九六四年から一九七一年までの十枚の作品が、レガシー・エディションで発売されることになった。

それにしても、フーといっしょで、キンクスはリイシューの回数が多い。今迄に、いったい何回あったのだろうか。おそらく、コアなファンは、ひとつの作品を三～四枚は持っているだろう。今回のレガシー・エディションが、決定版になればいいんだけどな。

その第一弾が、『ローラ対パワーマン、マネーゴーラウンド組　第一回戦』（一九七〇年）である。二枚組というので、二枚目を見たら『パーシー』（一九七一年）だった。つまり、全十枚を二枚ずつ発売していくということなのだろう。これはレコード会社の資料には書いていなかったから、ひょっとしたら違うのかも知れない。『ローラ～』は本篇が十三曲で、ボーナス・トラックが七曲。『パーシー』は本篇が十二曲で、ボーナス・トラックが十曲。

『ローラ～』には、それまでのキンクスのヒストリーのようなところがある。もちろんサクセス・ストーリーではなくて、どちらかといったらミュージック・ビジネスでの軋轢の軌跡である。実際に、この頃、キンクスはマネージャーやプロダクションと裁判をしている。このタイトルも、『ローラ対権力者と搾取』くらいに考えたほうがいいだろう。

CamScannerでスキャン

『パーシー』は同名の映画のサウンドトラック盤で、ヴォーカルがある曲が七曲とインストルメンタル曲が六曲である。ビートルズのアメリカ盤の『ア・ハード・デイズ・ナイト』や『ヘルプ!』のように、それがごちゃまぜになっているから集中しにくい。『イエロー・サブマリン』のように、A面ヴォーカルB面インストルメンタルだったら良かったのに。しかし、CDだから、曲順をセットして聴けば、それでいい。

『ローラ～』の〝ディス・タイム・トゥモロウ〟と、『パーシー』の〝ザ・ウェイ・ラヴ・ユースト・トゥー・ビー〟は名曲である。

ということは、次は『ヴィレッジ・グリーン・プリザヴェイション・ソサエティー』と『アーサー、もしくは大英帝国の衰退ならびに滅亡』ということになるのかな。

（二〇一四年十月号）

二回目のツェッペリン

僕がレッド・ツェッペリンの原稿を書くのは、これが二回目ということになる。最初に書いたのは「ロッキング・オン・ブックス」の『レッド・ツェッペリン』で、今〔二〇一四年〕から五年前である。おそらく、そのときの担当者はそれまで僕がツェッペリンのことを書いたことがないとは思っていなかっただろう。年代的に考えてもそれなりに書いているはずだと思っても、おかしくはない。

僕に割り当てられたのは八百字ぐらいのレヴューで、『レッド・ツェッペリン』と『永遠の詩（狂熱のライヴ）』の二本だった。それほど苦労しないで、書いたような気がする。書いたことがなかったから、書きたいことがあったのだろう。この感じだったら、あと二〜三本追加されても出来るなと思った。

四十年以上もこういう仕事をしてきてツェッペリンを書くのは二回目というのは、不思議に思われるかも知れない。簡単にいうと、機会がなかったのである。ジミ・ヘンドリックスを初めて書いたのも、十年ぐらい前だったような気がする。デヴィッド・ボウイも同じようなものだろう。

いうまでもなく、こういう仕事は依頼がなければ書くことはない。頼まれなければ、一生触れることもないのである。「レコード棚いっぱいの名盤から」のように、ある程度選ぶことが出来れば書ける。グランド・ファンク・レイルロードやエレクトリック・ライト・オーケストラを少しまとめて書いたのは、あの頁が初めてだろう。

一度記しておきたかったバンドも、あの頁で書くことが出来た。ハーマンズ・ハーミッツやウォーカー・ブラザーズやメラニーなどは、いくら待っても依頼はないだろう。寺内タケシのような重要人物も、同じことだ。来年はロック誕生六〇年だというのにさ。

チープ・トリックを書いていて、七〇年代のいろいろなことを思い出した。あの時代には、このバンドはこの人が書くというような、ある種の暗黙の了解があった。たとえば、ローリング・ストーンズはAさん、キンクスはBさん、フーはCさん……というように。僕はビートルズとドアーズだった。

今、考えると、これはおかしなことで、当時は音楽雑誌が数誌あったのだから、ひとりでみんな書けるわけはない。それが分かっていても、なるべく人のテリトリーは侵さないようにしていた。クイーンとセックス・ピストルズは大貫憲章で、ヘヴィーメタルは伊藤政則で……。そういうところには、あまり行かないようにしていた。

そうではなくなったのは、音楽誌が少なくなったからだろう。そうなると、今迄あまり取り上げなかったバンドも、「ロッキング・オン」で書かなければならない。僕がストーンズやキンクスやフーを書き始めたのは、そうなり始めてからだろう。七〇年代には、それほど書いて

CamScannerでスキャン

はいないはずである。

で、レッド・ツェッペリンである。テリトリーの中心にいるのは、渋谷陽一である。ジミー・ペイジと意気投合して、ロバート・プラントの悪口を言っている。僕が書く必要はないのは、道理である。

ところが、今月は他にいいテーマがない。内田［ロッキング・オン］がツェッペリンと言うので、こういうことになったのである。

こういうことになって、ツェッペリンのディスコグラフィーを見て、最初に思ったのは、〝良かった、全部聴いたことがある〟ということだった。前述のように、ずっと渋谷が書いていたから、僕は熱心に聴いてはいなかったのである。

レコードも、全種持っているわけではない。なんてったって、六〇年代終わりから七〇年代というのは、素晴らしい作品が毎月のように発表されていた。僕は一九七一年で二十歳で、それを全部買えるわけがない。友達の家で聴いたり、貸し借りをしていた。

今回、リマスターされた三枚では、『レッド・ツェッペリン』と『レッド・ツェッペリンⅡ』は持っていたけれど、『レッド・ツェッペリンⅢ』はなかった。持っていないどころか、最初から最後まで聴いたのは二〜三回だと思う。

順番に聴いていって、やはりびっくりしたのは『レッド・ツェッペリン』の音が素晴らしいことである。それでいて荒削りな感じが残っているところが、あの時代っぽくて嬉しくなる。

CamScannerでスキャン

たとえば、第一期ジェフ・ベック・グループでは、二枚目の『ベック・オラ』のほうが完成度は高いのだけど、一枚目の『トゥルース』のほうが生々しいというのと同じことである。デビュー・アルバムでまだ準備も整っていなくて、オリジナル曲も少ない。しょうがないので、前のバンドで演奏していた曲もレコーディングする。ブルースの名曲に少し手を加えて、オリジナルだと言い張る。そういう感じが、楽しい。

そういうわけだから、『レッド・ツェッペリンⅡ』は完成度は高いけれど、『ベック・オラ』と同じ感じがある。おそらく、これが僕が一番聴いた回数が多いツェッペリンだろう。ある意味で、聴き慣れているから、衝撃は大きくない。二番目に聴いたから、音の良さにも慣れてしまった。『レッド・ツェッペリンⅢ』はあまり聴いていなかったから、新鮮だった。当時はアコースティックで不評だったといっても、今ではツェッペリンの全体像が知られているわけで、後のレコードにつながるその位置が分かって、面白い一枚だと思う。

今回のリマスター三枚では、個人的には『レッド・ツェッペリン』、『レッド・ツェッペリンⅢ』、『レッド・ツェッペリンⅡ』の順に興味深かった。あの当時は『レッド・ツェッペリンⅡ』が一番だと思っていたのだから、面白い。

次は、『レッド・ツェッペリンⅣ』、『聖なる館』、『フィジカル・グラフィティー』になるわけで、もう設計図ががっしりしている三枚である。それがこれだけ音がはっきりするのは、楽しみである。いつになるのか、知らないけどさ。まあ、僕が書くことは、もうないでしょうし。

（二〇一四年九月号）

一九六九年はいつ終わったのだろうか

一九六九年。それはもちろん一九六八年からつながってくるのであって、また一九七〇年につながっていくのである。もっとはっきり言えば、一九六八年からの数年間は、世界もロックも大きな変革の時期だったのである。ここを見落としてはならないだろう。

今の「ロッキング・オン」の若い読者に、こういうことを説いても、はたして通じるのだか分からないのだけど、ともかく書いていこう。そして、その時代のロックを論じる前に、世界と日本の動きを記さなければ、意味はない。

アメリカと日本の間には、日米安全保障条約というのがあって、つまり日本はアメリカに助けてもらう代わりに、アメリカの言いなりにならなければいけなかった。一九七〇年にそれを延長させようとしていた政府自民党と、それに反対する一般市民との間には大きな距離があった。

まず、ベトナム戦争に反対するべ平連（ベトナムに平和を！市民連合）が、反戦運動を始める。また、学費の値上げから、日本中の大学の自治会が反対運動を始め、それが反戦運動へと

CamScannerでスキャン

つながっていく。そして、成田空港の建設のために、国が強制的に農地を取りあげようとしたために、そういった学生が農民の支援をして、三里塚闘争が起こる。こういったことを書いても、知らない人には分かるのか不安だ。

つまり、今書いていることは、政府自民党が警察や機動隊を動かして、反対している人達に襲いかかるということなのだ。そこにいるというだけで、警棒で殴られ引き摺りまわされ逮捕されるのだ。要するに、国が権力を使って、国民に暴力をふるうのである。考えられないだろう。

当然、一般市民もそれに対抗する措置をとらなければならない。すると、凶器準備集合罪という法律で、棒を持って数人でいると逮捕された。そうなると、学生の中にはより過激になる集団も出てくることになる。原因を作ったのは、あくまでも国なのである。

こういった運動が起こったのは、もちろん日本だけではない。実際にベトナム戦争に駆り出されるアメリカでも、反戦運動は起こった。全世界規模で起こった。パリのカルチェ・ラタンは、学生の解放区になった。

反戦デモも、毎日のようにあった。ロンドンでジョン・レノンがデモに参加したのは、有名だろう。別のデモに、ミック・ジャガーも参加している。ミュージシャンも、黙ってはいられなくなったのだ。

そういうふうに積極的に参加しないまでも、戦争から離脱したのがヒッピーだった。山の中などにコミューンを作り、農業をして生活した。そこには今ほどうるさくなかった、マリファ

ナもあった。反戦、ヒッピー、マリファナというのは、そういう意味があったのだ。

一九六九年二月頃に、ベ平連が毎週土曜日の夜に、新宿駅の西口広場で、反戦フォーク集会を始めた。始めたときに集まったのは二千人ぐらいだったのだけど、すぐに七千人もの人が集まるようになった。

すると、そこに警察が乱入してきた。いいですか、フォーク・ソングを歌っているだけなのですよ。「ここは通路だ。解散しろ!」と言う。いいですか、ここは通路ではなく西口広場なのですよ。そして、警官は襲ってくる。僕も追いかけまわされて、新宿中央公園まで逃げたことがある。

一九六八年も一九六九年も、国際反戦デーの十月二十一日の新宿は、武装した機動隊と、分派して分からなくなった学生達の戦場になった。店はシャッターを下ろして、町には誰もいなくなった。そこで、数千人の戦いがあった。線路の上で闘うので、電車は止まった。

また、学生は抗議のために、学校の体育館などに籠もって、バリケード封鎖した。最盛期には、バリケード封鎖した大学は、全国で百四十校にもなった。

最初は様子を見ていた大学も、大学の自治などかなぐり捨てて、学内に機動隊を導入して、バリケード封鎖を解き学生を逮捕させた。一九六九年一月には、この戦いの象徴だった東京大学安田講堂を襲い、学生達を逮捕した。以後、日本中の大学が同じことをした。一九七〇年六月、日米安全保障条約は自動延長になって、いちおうの決着を見た。

一九七二年二月、あさま山荘事件で、連合赤軍が逮捕され、この一九六八年からのストーリ

い。戦争であった。強さを求められた。負けてはならなかった。

暴力への問題を片付ける為の自衛隊、機動隊、警察、学校に対する違和感は、今でもある。そういう魂は、いっぱいいるだろうと思う。また、現在六十歳以上の人は、こういったことをあまりにも知っているのだろうか。または、知らないのだろうか。

一九六九年、そんな世界情勢の中で、ロックはどうだったのだろう。ビートルズは一九六八年に「レヴォリューション」を発表した。一九六九年には、ジョン・レノンが『ギヴ・ピース・ア・チャンス』を歌った。

ローリング・ストーンズは『ストリート・ファイティング・マン』をリリースした。エリック・バードン・アンド・ジ・アニマルズは『スカイ・パイロット』（一九六八年）を叫んだ。反戦フォーク・シンガーのボブ・ディランは沈黙した。ビーチ・ボーイズのブライアン・ウィルソンはドラッグの夢の中にいた。ドアーズは一九六八年に『名もなき兵士』を発表した。ジェファーソン・エアプレインは『ヴォランティアーズ』を歌った。

もしかすると、この時代を代表するのは、MC5（モーター・シティー・ファイヴ）の『キック・アウト・ザ・ジャムズ』かも知れない。スライ・アンド・ザ・ファミリー・ストーンの『スタンド！』もあった。

ロック・ミュージシャンとしてこの時代を象徴するのは、間違いなくアル・クーパーだろう。

CamScannerでスキャン

一九六九年に、なんと三枚のアルバムをリリースしているのである。『アイ・スタンド・アローン』と『孤独な世界』。そして、マイク・ブルームフィールドと『フィルモアの奇蹟』を。クリーデンス・クリアウォーター・リヴァイヴァルも『バイヨー・カントリー』、『グリーン・リヴァー』、『ウィリー・アンド・ザ・プア・ボーイズ』と三枚のLPを作っている。エリック・バードン・アンド・ジ・アニマルズも、一九六八年に『ザ・トゥエイン・シャル・ミート』、『エヴリ・ワン・オブ・アス』、『ラヴ・イズ』と三枚作っている。

また、一九六九年七月三日にブライアン・ジョーンズ、一九七〇年九月十八日にジミ・ヘンドリックス、一九七〇年十月四日にジャニス・ジョプリン、一九七一年七月三日にジム・モリソンが死亡している。みんな頭文字がJなので、次は俺かとミック・ジャガーは怖がっていたという。

キンクスやフーはそういう世の動きからは離れて、自分の世界に入っていた。しかし、『アーサー、もしくは大英帝国の衰退ならびに滅亡』は話題にならず、『トミー』は大ヒットして代表作になった。

ニール・ヤングはまだ今のように政治的な発言は少なく、しかしこれも代表作のひとつ『アフター・ザ・ゴールド・ラッシュ』をリリースした。マーク・ボランもデヴィッド・ボウイも、まだメジャーになっていなかった。

一九六九年八月十五日から三日間、ウッドストック・ミュージック・アンド・アーツ・フェスティヴァルが行なわれた。日本とは、大きな違いだ。そして、レッド・ツェッペリンのデビ

CamScannerでスキャン

ー・アルバムが発売された。ここから、七〇年代はハード・ロックの時代になる。

一九六九年十月、僕は高校三年生だった。文化祭の実行委員になって、それまで学校が御膳立てしていた案をすべて拒否して、生徒のアイデアだけで成功させ、最後の片付けにも元気いっぱいだった。

それが面白くなかったのか、展示に使ったたくさんの棒を、ひとりの教師がゲバ棒だと騒ぎ、数人の実行委員と数十人の教師との対立になった。そして、退学になった。隣がバリケード封鎖していた青山高校だったので、恐れていた教師もいたのかも知れない。しかし、文化祭の片付け中の数時間で、退学させるというのは常識では考えられないだろう。

僕は現在六十七歳で、あのときから約五十年の時間が経っている。しかし、今でもあのときのことを思い出すことがある。もう、あのときの教師は、みんな死んでいるだろう。もし生き残っていたら言ってやりたい、「早く死にやがれ」と。

一九七〇年の夏頃には、新宿によく行っていた。僕は「セラヴィ」というブルース酒場に行っていたのだけど、何人かの友達は「ソウルイート」という近くのロック喫茶に行っていた。

そこでDJをやっていた渋谷陽一が新しいロック雑誌を作るので、メンバーを集めているという。僕はその店には二～三回しか行ったことがなかったので、メンバーになるつもりはなかった。自滅回路というバンドをやっていたし。たしか、渋谷と話したこともなかったはずだ。

しかし、友達に誘われて、最後にそのメンバーに入った。たぶん、二十番目ぐらいだっただ

ろう。中心人物は渋谷の他に岩谷宏と橘川幸夫がいて、この三人がすべて決めていた。意見を言うと、三人に潰された。
一九七二年夏に、「ロッキング・オン」の第一号が出た。二年ぐらいしたら、人がいなくなってしまった。原稿書き、印刷所通い、配本……面倒くさくなったのだろう。四番目から十九番目までが見事にいなくなって、上の三人と二十番目の僕だけになった。三人の態度は、大きく変わった。中心人物以外で、残ったのは僕だけだったのだ。いったい、あれからどれぐらい経ったのだろう。

〈二〇一八年七月号〉

CamScannerでスキャン

V

CamScannerでスキャン

ポールのベストを作ろう

六月二十日〔二〇一六年〕付けのオリコンのアルバム・チャートで、ポール・マッカートニーの『ピュア・マッカートニー』が初登場第四位になっていた。単純に、凄いと思う。『NEW』も初登場第二位だったけれど、なんてったってこちらは四枚組である。……と書いて、このチャート第四位が四枚組のほうなのか二枚組のほうなのか分からないということに気がついた。

ポールのファンなら四枚組を買うと思うのだけど、普通のファンなら二枚組で充分かも知れない。そこらへんが分からないわけで、ともかくチャートの上位に入っているのはめでたしめでたしである。それにしても、ヒット・チャートを見ても、知っている名前が少ない。この週の第一位は堂本剛（ジャニーズの人でしょ？）、第五位は松田聖子、第六位は乃木坂46（テレビで見たことがある）、第九位が小田和正。あとは知らない。こういう仕事をしていて、ベスト・テンの半分しか分からないというのは、問題があるような気もするけれど、六十五歳二か月だからいいことにしよう。

さて、七月号でも書いたように、『ピュア・マッカートニー』は意識的に興奮しないように

V

作られている。はっきりいえば、BGMとして使ってもらいたいと、本人が言っているのである。そういうわけにはいかない。ポールのベストなら楽しみたい、喜びたい、聴き込みたい、涙を流したい、叫びたい、立ち上がりたい、酒を飲みたい、家の前を通った奴を張り倒したい。

そこで、僕も選曲してみようと考えた。今はどうなのか分からないのだけど、かつてはみんな自分の好きなミュージシャンのベスト・アルバムをよく作った。カセット・テープに録音して、同好の友達に聴かせて、どんなもんだいと、自慢したものだ。今は、CD－Rでそういうものを作らないのだろうか。そういうことをする人間は、素行に首をひねるところがあるというのは分かっている。十人ロック・ファンがいたら、八人はそういう人だった。

ちなみに、何十年も前に、ビートルズのベスト・アルバムの選曲をしたことがあるので、それを書いてみようか。レコード時代だから、A面とB面がある。これは一九六六年までのものだから、おそらく赤盤青盤が発売された頃かもしれない。はっきり言おう、この選曲には一か月くらいかかっている。

A　1　エニイ・タイム・アット・オール
2　恋する二人
3　オール・マイ・ラヴィング
4　ノット・ア・セカンド・タイム
5　プリーズ・ミスター・ポストマン

[illegible]
7 [illegible]
8 ディス・ボーイ

B面
1 ヘルプ！
2 イッツ・オンリー・ラヴ
3 夢の人
4 イン・マイ・ライフ
5 アンド・ユア・バード・キャン・シング
6 フォー・ノー・ワン
7 ウェイト
8 イエス・イット・イズ

出来るだけシングル・ヒットは選ばずに、〝ヘルプ！〟だけだ。カヴァーも、〝プリーズ・ミスター・ポストマン〟だけだ。ひどいのは、ジョンとポールだけで、ジョージとリンゴは一曲もない。それでも、ずいぶんと考えたんだ。

おい！　お前。今、笑っただろ？　こっちへ来い！　張り倒すぞ！

そういうわけで、ポールのベスト・アルバムの選曲をしてみたい。『ピュア・マッカートニー』に合わせて、四枚組にまとめて、一枚目一九七〇年代、二枚目八〇年代、三枚目九〇年代、四枚目二〇〇〇年代一〇年代というのがいいのではないだろうか。

それで、『ピュア・マッカートニー』の収録曲をチェックしてみたら、とんでもないことが分かった。この全六十七曲は、次のようになっていた。七〇年代三十二曲、八〇年代十二曲、九〇年代九曲、〇〇年代七曲、一〇年代七曲……ううむ。七〇年代が多過ぎるのか、他の年代が少な過ぎるのか。

『ピュア・マッカートニー』は一枚十六曲から十八曲になっているので、これもそれに準じよう。まず七〇年代で、シングルのみの発売の曲から選んでいこう。

〝メアリーの小羊〟(一九七二)、〝C・ムーン〟(一九七二)、〝愛しのヘレン〟(一九七三)、〝ジュニアズ・ファーム〟(一九七四)、〝セイム・タイム・ネクスト・イヤー〟(一九七八)、〝グッドナイト・トゥナイト〟(一九七九)、〝ワンダフル・クリスマスタイム〟(一九七九)。

すでにして、六十五歳だというのに、自分は何をしているのだろうという気がしているけれど、忘れろ! アルバムが九枚もあるというのに、もう七曲になってしまった。全二十曲としても、十三曲である。考えずに、進もう。

〝ジャンク〟(一九七〇)、〝サム・ピープル・ネヴァー・ノウ〟(一九七一)、〝トゥモロウ〟(一九七一)、〝シングル・ピジョン〟(一九七三)、〝バンド・オン・ザ・ラン〟(一九七三)、

CamScannerでスキャン

ジェント〟（一九七三）、〝トリート・ハー・ジェントリー～ロンリー・オールド・ピープル〟（一九七五）、〝レット・エム・イン〟（一九七六）、〝サン・フェリー・アン〟（一九七六）、〝カフェ・オン・ザ・レフト・バンク〟（一九七八）、〝ゲッティング・クローサー〟（一九七八）、〝ウインター・ローズ～ラヴ・アウェイク〟（一九七九）。

もはや、失うものなど何もない。ただただディスコグラフィーをチェックしただけで、このように十二曲になったのだ。これで、全十九曲である。そういうことなら、もう一曲足して二十曲にしよう。『ウイングス・オーヴァー・アメリカ』から、〝ゾイリー〟である、友よ、叫べ！　『ピュア・マッカートニー』と重複しているのは、六曲だけである。凄いったら、凄い！

……そういうわけで、二十曲を書き出して、リストをいじり始めてから、もう一時間が経つ。僕の昨日の睡眠時間は、二時間である。一昨日は、四時間である。二日間で六時間の睡眠時間の六十五歳に、これ以上どうしろと言うんだ！

ともかく、一曲目は〝バンド・オン・ザ・ラン〟で、二十曲目は〝セイム・タイム・ネクスト・イヤー〟ということは、決まった。

そういうわけだから、他の曲順は来月八〇年代をやるときにいっしょでいいかな？　いい？

ありがとう。じゃあね。

（二〇一六年八月号）

ポールのベストを作ろう（八〇年代）

これは前にも書いたことがあったと思うのだけど、一九七〇年ポールはビートルズを脱退するつもりはなかったと僕は考えている。それまでにジョンもジョージもリンゴも一度は辞めるような素振りを見せたことがあったので、自分も一回ぐらいは言ってもいいだろうと軽く判断したのではないだろうか。

とりあえず、自分が脱退すると言えば、プレスは飛びついてくるわけで、『マッカートニー』のプロモーションになる。ジョンもジョージもリンゴも慰留するだろう。たしかに大きなニュースにはなったけれど、驚いたことに三人は何の反応もしなかった。ということは、もっともビートルズを愛していたポールが、ビートルズを辞めなければならなくなってしまったということになる。

そうなったら、もうしょうがない。一枚目の『マッカートニー』はノヴェルティーのようなものだったから、二枚目は本格的なレコードを作らなければならない。しかし、『ラム』のレコーディングは、うまくいかなかった。ヒットはしたのだけど、明らかに失敗作だった。

面白いことに、ここ数年『ラム』の評価が高くなってきている。本当に、面白い。それだけ、

ポールの若いファンが増えているということである。つまり、僕のようにビートルズからの流れなど気にしないで、ポールのソロ・アルバムの一枚としてとらえているのだろう。僕には悪趣味としか聴こえないところも、彼等には卓越した才能に思えるのだろう。生きてみるもんだなあ。

実をいうと、発売当時は、僕も『ラム』は良いレコードだと、やたらと言っていた。ポールに対する風当たりがあまりにも強かったので、俺が誉めなきゃ誰が誉めると必死になっていたのだ。『バンド・オン・ザ・ラン』が発売されてからである、『ラム』はちょっとねと言い出したのは。安心したんだ。

『ラム』がうまくいかなかったポールは、ウイングスというバンドを作る。一時、ポールは「僕はウイングスなのだから、元ビートルズなどと言わないでもらいたい」と発言していた。それに対して僕は「ポールはウイングスではなくて、元ビートルズだ」と書いて、ファンから抗議の手紙も来た。今ポールがどのようにとらえられているのか、説明の必要はないだろう。

たしかにウイングスは存在した、一九七一年の『ワイルド・ライフ』から一九七九年の『バック・トゥー・ジ・エッグ』まで。しかし、この九年間ずっといたのは、ポールとリンダとデニー・レインの三人だけである。あとは、みんな入っては辞め、入っては辞めである。デニー・シーウェル、ヘンリー・マッカロック、ジェフ・ブリットン、ジミー・マッカロック、ジョー・イングリッシュ、スティーヴ・ホリー、ローレンス・ジュバー……（ディープ・パープルかっていうの）。

というわけで、先月〔前項「ポールのベスト・アルバムを作ろう」〕は七〇年代のポールのベスト・アルバムの選曲をした。先月出来なかった曲順は……まだ出来ていない。なんとか、今年中には……ということで、勘弁してもらいたい。続いて、八〇年代のベスト・アルバムである。

あっ、その前に、先月選んだ最終曲の〝セイム・タイム・ネクスト・イヤー〟について、質問がきていた。これは『バック・トゥー・ジ・エッグ』のレコーディング・セッションのときのもので、どういうわけか一九九〇年の〝プット・イット・ゼア〟のシングルのカップリング曲として発表されている。

名曲中の名曲で、コンサートの最後に演奏したらアイル・クライ・インステッド。やはりこちらは『レッド・ローズ・スピードウェイ』のときのものだという（隠してんじゃないよ！）。〝プット・イット・ゼア〟のシングルに入れられていた〝ママズ・リトル・ガール〟も名曲で、

さて、八〇年代、ポールのオリジナル・スタジオ・アルバムを見ていくと、七〇年代は九枚である。そして、八〇年代は六枚になっている。『マッカートニーⅡ』、『タッグ・オブ・ウォー』、『パイプス・オブ・ピース』、『ギヴ・マイ・リガーズ・トゥー・ブロード・ストリート』、『プレス・トゥー・プレイ』、『フラワーズ・イン・ザ・ダート』。ここまでは、いい。

しかし、九〇年代になるというと、『オフ・ザ・グラウンド』と『フレイミング・パイ』の二枚だけになる。二〇〇〇年代は、『ドライヴィング・レイン』、『ケイオス・アンド・クリエイション・イン・ザ・バックヤード』、『メモリー・オールモスト・フル』の三枚である（ベスト・アルバム、ライヴ・アルバム、カヴァー・アルバムは別にする）。

『ピュア・マッカートニー』が七〇年代三十二曲、八〇年代十二曲、九〇年代九曲、〇〇年代七曲、一〇年代七曲となっているのは、こういうことだったのだ。これでは、選曲にかたよりがあっても、しょうがない。

レコードの枚数からいったら、九〇年代〇〇年代一〇年代で一枚のベスト・アルバムにするということも考えられる。となると、もう一枚はビートルズ時代のものにするか……そうだ、そうしよう。ビートルズだ、ビートルズのポールのベスト・アルバムだ！　いや駄目だ、選ぶのに何か月かかるか分からない。

八〇年代のポールについていうと、レコーディング・アーティストとしては一種の恐怖症のようなところがある。スティーヴィー・ワンダー、マイケル・ジャクソン、エリック・スチュワート……。誰かがいなければ出来ない。これはいうまでもなく、一九八〇年十二月八日にジョン・レノンが暗殺されたことが原因だろう。

『タッグ・オブ・ウォー』、『パイプス・オブ・ピース』、『ギヴ・マイ・リガーズ・トゥー・ブロード・ストリート』は、慣れ親しんだジョージ・マーティンのプロデュースである。考えてみれば、ジョンが殺されたとき、ポールはまだ三〇代だったのだ。

それでは、行こう。〝カミング・アップ（シングル／ライヴ・ヴァージョン）〟（一九八〇年）、〝ワン・オブ・ジィズ・デイズ〟（一九八〇年）、〝エボニー・アンド・アイヴォリー（三十センチ・シングル／ソロ・ヴァージョン）〟（一九八二年）、〝ヒア・トゥデイ〟（一九八二年）、〝ボールルーム・ダンシング〟（一九八二年）、〝ザ・パウンド・イズ・シンキング〟（一九八二年）、

〝ワンダーラスト〟（一九八二年）、〝パイプス・オブ・ピース〟（一九八三年）、〝ノー・モア・ロンリー・ナイツ〟（一九八四年）、〝ウィー・オール・スタンド・トゥゲザー〟（一九八四年）、〝グッド・タイムズ・カミン〜フィール・ザ・サン〟（一九八六年）、〝プット・プリンツ〟（一九八六年）、〝プレス〟（一九八六年）、〝ワンス・アポン・ア・ロング・アゴー〟（一九八七年）、〝マイ・ブレイヴ・フェイス〟（一九八九年）、〝プット・イット・ゼア〟（一九八九年）、〝ディス・ワン〟（一九八九年）。

以上、十七曲。それでは、また（疲れた）。

（二〇一六年九月号）

ハリウッド・ボウルに神がいた

ビートルズが解散して、七〇年代は始まった。六〇年代の先頭を走っていた盟主がいなくなってしまったために、七〇年代のロックの世界は群雄割拠になった。それは、それでいい。ハード・ロック、グラム・ロック、プログレッシヴ・ロック、どうでもいい似非（えせ）ロック……。

その約十年前に、ビートルズが登場して来たために、人気が落ちてしまったキング・エルヴィス・プレスリーは、ロック・ファンからひどい言い方をされていた。つまり、前世紀の遺物だというのだ。言っとくけど、僕はそんなこと言ってないよ。だって、全盛期のエルヴィスを知らないんだから。

同じように、ビートルズがいなくなったら、彼等を貶（おとし）めるようなことを言う奴等が現れた。いうまでもなく、ハード・ロックやプログレッシヴ・ロックのファンである。レッド・ツェッペリンやエマーソン・レイク・アンド・パーマーと比べると、ビートルズは下手だというのだ。

……今、書いていても、腹が立ってきた。

当時、マイルス・デイヴィスがジミ・ヘンドリックスとポール・マッカートニーとでレコーディングしようと考えていたなどということは、誰も知らなかった。まあ、僕だって、知った

のは数年前だけど。ジョン・レノンのギターとリンゴ・スターのドラムスのグルーヴは、比べられる人間はいなかった。八小節でソロを弾けといわれたら、ジョージ・ハリソンぐらいまとめられるギタリストはいなかった。

ビートルズのヴォーカルが下手だというのも、彼等の常套句だった。ロバート・プラントもイアン・ギランも、バンドに合わせて声を張り上げているだけじゃないか。グレッグ・レイクは、あれヴォーカルなの。つまり、びっくり人間コンテストと、町内のど自慢じゃないか。あいつらに〝エニィ・タイム・アット・オール〟が歌えるか。あいつらに〝アイ・ウィル〟が歌えるか。

あの頃、そういうことを言っていた奴の顔を、今でも僕は覚えている。あの頃、そういう原稿を書いていた奴の名前も、忘れてはいない。そいつらは……、もう何十年も前にいなくなっちゃったんだ。今頃、田舎に帰って、年金で暮らしてるんだろうな。

そういうわけで、ともかく、七〇年代、ビートルズ・ファンは鬱屈していた。四人のソロ・アルバムを聴いていても、もちろん彼等は出来るだけビートルズから遠くへ行こうとしているのだから、面識さえもないわけで、こちらもそれに合わすしかない。

あれは七〇年代中頃だっただろうか。『アビイ・ロード』が名盤だと言うと、鼻で笑う奴がいた頃だった。一枚のブートレッグが、ベスト・セラーになった。ビートルズの『ウイスキー・フラット』である。

一九六四年八月二十三日、ビートルズのハリウッド・ボウルでのライヴである。一回分のコ

CamScannerでスキャン

ンサートがすべて収録されていたから、おそらくキャピトルから流出したのだろう。モノラルではあったけれど、ブートレッグとしては音は良いほうだった。僕達は狂喜乱舞した。

もちろん僕は一九六六年七月一日の武道館のビートルズを見ていたのだけど、それはもうライヴ活動を辞めることを前提としたものだった。一九六四年のアメリカのビートルズは、トップ・オブ・ザ・ワールドに立ったときだった。

ブートレッグだから、正規盤よりも千円は高かったと思う。僕はこのレコードを、『ア・ハード・デイズ・ナイト』と『ビートルズ・フォー・セール』の間に入れた。その頃、このレコードを持って、同好の友達の家に行くというのが、よくあった。何回も聴き続けて、ビールやウイスキーの瓶が乱立した。

これはまずいということになって、キャピトルはジョージ・マーティンにハリウッド・ボウルのレコードを作ることを依頼した。一九六四年八月二十三日と一九六五年八月二十九日〜三十日のライヴのテープで、一枚作ることにしたのだ。

このようにレコーディングしていたということは、当然ライヴ・アルバムを作ることにしていたということだ。しかし、そうならなかったのには、もちろん理由がある。一九六四年一九六五年のビートルズである。若い女の子達は叫び続け、走ってステージに上がろうとする。レコードは外される、機器は壊される。エンジニアがモニターしていても、歓声で聴こえない。あとからテープをチェックすると、ジョンの声はあってもポールの声がない。ジョンのギターは入っていても、ジョージのギターが入っていない。

それでなくても、六〇年代のライヴ・アルバムは音が良くない。ローリング・ストーンズの『ガット・ライヴ・イフ・ユー・ウォント・イット！』やキンクスの『ライヴ・アット・ケルヴィン・ホール』を聴けば、よく分かるはずだ。

そのテープにあとからスタジオでヴォーカルやギターを入れるということも、考えられる。しかし、そうはしなかった。一九六五年のアメリカ・ツアーのあと、ビートルズは『ラバー・ソウル』のレコーディングを始めた。もはや、ライヴ・アルバムなど、どうでも良かったのだろう。

ジョージ・マーティンは一九六四年と一九六五年のテープを使って、一九七七年の技術で一枚のレコードを作り上げた。それが『ライヴ・アット・ザ・ハリウッド・ボウル』である。一九七七年五月六日に発売されて、ヒット・チャートの初登場は十六位だった。そして、六月二十五日に第一位になった。

今回それをジャイルズ・マーティンが二〇一六年の技術でリミックスして、CDを作り上げたのだ。僕は一九六五年のブートレッグも聴いていたので、ジョージ・マーティンがこの十三曲を選んだのがよく分かった。というよりも、この十三曲しか使えなかったのだろう。他の曲は、ヴォーカルが入っていない、ギターが入っていない、ベースが入っていない……。

ところが、今回はボーナスで四曲収録されている。二〇一六年の技術で、生き返らせたのだろう。そういうことだったら、〝イフ・アイ・フェル〟はなんとかならなかったのだろうか。〝アイ・フィール・ファイン〟はなんとかならなかったのだろうか。……だから、駄目だった

んだよ、分かってるけどさ。

ジョンはいつものように、〝ヘルプ！〟で歌詞を間違える。ポールのベースが録れていないところは、一小節鳴らしている。〝ロング・トール・サリー〟のジョージのギターはオフ気味のままだけど、聴こえるからいい。凄まじいのはリンゴのドラムスで、マイクもコードも生きていたのだろう。

ジャケット写真はアメリカっぽくて最悪だから、被せる写真を探しておいたほうがいい。どうして、オリジナルどおりにしなかったのだろうか。

また、ビートルズのライヴ・イヤーズである一九六三年から一九六六年までをまとめた『エイト・デイズ・ア・ウィーク―ザ・ツアーリング・イヤーズ』という映画も、九月二十二日から公開される。

一九六四年と一九六五年の三回のコンサートで、十三曲と四曲だけである。でも、いいんだ。僕達は知っているから。そこに、ジョンとポールとジョージとリンゴがいたことを。

〈二〇一六年十月号〉

ビートルズが生きている

横浜スタジアムにナイト・ゲームを見に行ったら、ヤクルト・スワローズがDeNAベイスターズに目茶苦茶に負けてしまった。まあ、スワローズは去年〔二〇一五年〕優勝しているから、今年はBクラスでもいいんだけどさ。それでも、山田哲人のホームランは、しっかりと見ることが出来た。今年は二回しかスワローズの試合を見に行けなかったのだけど、二回とも山田のホームランを目撃することが出来た。

そういうわけで、気分が良いのだか悪いのだか自分でも分からない状態で、いっしょに行った数人の友達と酒場に向かった。そこで話題になったのは、ビートルズの『ライヴ・アット・ザ・ハリウッド・ボウル』だった。思えば僕の友達はみんなビートルズ・ファンで、そりゃあそうだな。ビートルズに興味のない人は、僕と酒を飲んでも楽しくもなんともないだろう。

そこで、みんなが「ステージにモニターもないのに、よくあれだけの演奏が出来たものだ」と感心していたので、つい僕は「モニターなんかなくったって、演奏は出来るよ」と口走ってしまった。本当なら「何言ってんだよ、お前」と言いたいところなんだろうけれど、みんな僕がCDを作ったりライヴをやっているのを知っているので静かになってしまった。

実際に、七〇年代のライヴ・ハウスでは、モニターはあってもないようなものだった。リハーサルのときには聴こえていても、観客が入場すると聴こえなくなる。考えてみれば、あれでよくやったものだ。というよりも、やらなければならなかったから、それが当たり前だったのだ。

それは現在でもそれほど変わりはなくて、去年の十二月に新宿でやったライヴは四十年前とほとんど同じだった。ステージは狭くて、前後左右に動くことも出来ない。ギター、ベース、ドラムス、キーボードの音が渦巻いていて、自分の声も聴こえない。こういう場合、ドラムスの音だけに集中して、なんとかしなければならない。

ビートルズだって、六〇年代初めのキャヴァーン・クラブやスター・クラブにモニターがあったとは考えにくい。レコード・デビューしてからのコンサートでも、そんなものはなかっただろう。つまり、そういう中で、いかにメンバーとコミュニケーションをとるかということだろう。だから、自分の音が聴こえなくても、演奏は出来るのである。

『エイト・デイズ・ア・ウィーク～ザ・ツアーリング・イヤーズ』は、タイトルどおりにビートルズのコンサート活動を追ったものである。

一曲目は〝シー・ラヴズ・ユー〟で、一九六三年十一月二十日のマンチェスターでのライヴである。これは原題を『ザ・ビートルズ・カム・トゥー・タウン』という、十分ぐらいの短篇フィルムで、日本では『これがビートルズだ』という題名で、一九六四年に『ビートルズがやって来る』が公開されたときにいっしょに上映されたものの一部である。

V

こういうふうに詳しく書いていったら切りがないわけで、ここから一九六九年一月三十日のアップル屋上までのライヴのストーリーである。僕達のような業の深いオールド・ファンよりも、若い素直な人達に薦めたい映画である。

僕が興味深かったのは、この映画が終わった後に流された約三十分のコンサート映像である。これは一九六五年八月十五日の、ニュー・ヨークのシェア・スタジアムでのコンサートである。当然、ろくなモニターはない。ビートルズは自分達のアンプから出る音だけを頼りに、演奏している。

球場を埋め尽くした五万七千人の女の子達に聴こえるのは、そのアンプの音とあの場内アナウンス用のちっぽけなスピーカーからの音だけである。今、考えると、演奏者も観客もほとんど聴こえていないのに成立したという、不思議なコンサートだったのである。

そういえば、じじいばばあが聴こえなかったと言っていた日本武道館のコンサートだって、僕達には聴こえていたんだ。〝イフ・アイ・ニーデッド・サムワン〟がハモらなかったのだって、僕達は分かったんだ。

ちなみに、この日の演奏曲を書いてみる。

1　ツイスト・アンド・シャウト
2　シーズ・ア・ウーマン
3　アイ・フィール・ファイン

CamScannerでスキャン

4 ディジー・ミス・リジー
5 涙の乗車券
6 エヴリバディーズ・トライング・トゥー・ビー・マイ・ベイビー
7 キャント・バイ・ミー・ラヴ
8 ベイビーズ・イン・ブラック
9 アクト・ナチュラリー
10 ア・ハード・デイズ・ナイト
11 ヘルプ！
12 アイム・ダウン

この中で気になったのは、リンゴの〝アクト・ナチュラリー〟である。ジョンもポールもリンゴの方を向いて、身体を動かしてリズムをキープしている。この曲が収録されたＬＰ『ヘルプ！』が発売されたのは、八月六日である。新曲をやろうとした意欲は分かるのだけど、おそらくリンゴのリズムが狂ってしまったのだろう。

実際に、この演奏は使えないということになって、後に音を変えられている。他にも二～三曲そういうものがあって、再録音したりレコードの音にしたりしているという。

また、〝シーズ・ア・ウーマン〟と〝エヴリバディーズ・トライング・トゥー・ビー・マイ・ベイビー〟が、このフィルムでは欠けている。前記のことを考えると、これは映像に問題

CamScannerでスキャン

があったのだろう。

このフィルムは『ザ・ビートルズ・アット・シェア・スタジアム』というタイトルで、一九六六年三月一日にBBCテレビで放映されている。

その後、このフィルムは映画になって、日本でも七〇年代に六本木の俳優座で公開された。たしか、内田裕也氏が買いつけてきたのだったと思う。同じように、裕也さんが持って来たローリング・ストーンズの『チャーリー・イズ・マイ・ダーリン』は、ロッキング・オンが銀座そごうの上の読売ホールで上映した。懐かしいなあ。

それだけではなくて、その頃にはこれを8ミリ・フィルムにして売っていた。オフィシャルのものかブートレッグなのか分からないけれど、たしか十分から十五分ぐらいのものだった。だから、三〜四曲だったと思う。まあ、僕は映写機なんか持ってなかったから、買わなかったけどさ。

その七〇年代に見たフィルムと、これはまったく違っている。あれは明らかにドキュメンタリー・フィルムで、今回のように一回のコンサートにはなっていなかった。今回のものは全十曲なのだけど、ビートルズのコンサートとして〝ツイスト・アンド・シャウト〟から〝アイム・ダウン〟まで堪能出来る。私や、唸ったね。

全十曲だとしても、ビートルズのコンサートがフルに見られるのは貴重である。他に残されているのは、一九六四年二月十一日のワシントンDC・コロシアムと一九六六年七月一日の日本武道館だけしかないのだから。他の国は、どうしてビートルズのコンサートを映像に残して

いないのがうそみたい。素敵だ、お洒落だ、
ジョンもポールもジョージもリンゴも、生き生きしている。
これが一九六五年のビートルズだ。

（二〇一六年十二月号）

闘って、あらがって

暑い、暑い、暑い、ともかく暑い。七月から暑くて、八月になってもっと暑くなった。三十五度が日常なんて、なんだこれは。起きるとすぐにエアコンをつけて、寝るまでずっとそのまま。これでは七月八月の電気代は、とんでもないことになるだろう。それでも、そうするしかない。

だから、寝るときにはエアコンを止めて、家中の窓を開けっ放しにする。それでも暑くて、目覚めることがある。毎日約十八時間ぐらいは、エアコンがついていることになる。こんなことは、今迄になかった。これが当たり前になるのだろうか。やってらんねえな。

七月八月の予定は、ずいぶん中止した。トーク・ライヴを一回やったのと、ライヴを二回見に行っただけだ。これは仕事だから、しょうがない。それ以外は、電車に乗っていないはずだ。落語会に行くのも、中止にした。九月になって、涼しくなってからにしようと決めた。

家に閉じこもっていると、食べものや飲みものがなくなる。五日に一度ぐらいは、あまり暑くなくなる夕方にスーパー・マーケットに行く。すると、予定していた買物が、売り切れていたり、売れ残りで安くなっていたりする。悲しいのだか嬉しいのだか、よく分からない。

台風が何度かやって来た。二回だったか三回だったか、暑さで馬鹿になっているから分からない。ともかく、そうなったら、ベランダに置いてあるものを、全部室内に入れる。たいしたことはなかったのだけど、けっこう緊張はした。

それだけ家にいるというのに、いまのところ八月は一冊も本を読んでいない。小学生のときから考えても、こんなことは初めてだ。若い頃は一か月に十五冊は読んでいて、じじいになっても十冊は読んでいた。二年前に病気になってから、五冊ぐらいになった。

それが一冊も読んでいない。うちにはまだ読んでいない本が、四〜五冊はあるはずだ。これはどうしてなのかというと、つまり集中力がなくなったのかも知れない。本を読むより、テレビでアジア大会をぼけっと見ているほうが楽なのだ。

つまり、老いたのだ。病気をしてから、一気に老いた。それを自覚しなければならない。僕は老人なのだ。

あまり触れたくはないけれど、ポール・マッカートニーは七十六歳のはずである。おそらくビートルズがデビューしたときには、こんな年齢まで歌っているとは思っていなかっただろう。

あの頃のロック・バンドの人気なんて二〜三年のもので、その後の人生はまた考えなければならなかった。ジョンとポールは将来は作曲家になりたいというようなことを、言っていたと思う。

七十六歳になっても数万人の観客の前でコンサートを行なっているなどとは、思ってもいな

かったはずだ。こういう人生になって、どう思っているのだろうか。老いを感じていないということは、ないだろう。あれだけ、頭の良い人なのだから。

そういえば、数年前、来日はしたのだけど、入院してコンサートは中止になったことがあった。あの入院は、なんだったのだろう。どうして、公表しないのだろう。隠しておかなければならないような、病気だったのだろうか。

今回のアルバム『エジプト・ステーション』でびっくりしたのは、プロデューサーがついていたことだ。グレッグ・カースティンである。今迄はプロデューサーがついたとしても、ポールとの共同プロデュースだった。自分のアルバムのプロデューサーの名前を、ポールは安易に他人には渡さなかった。正直にいうと、これはショッキングな出来事だった。何かが、音をたてて変わった。

たとえば、七十歳以上のミュージシァンといったら、昔は黒人のブルース歌手だけだった。数百人の観客の前で、地味にアコースティック・ギターを弾いて地味に歌うだけだった。七十歳のロック歌手なんて、いなかった。いなかったのだから、分からない。

七十六歳で第一線でやっているというのは、どういうことなのだろう。僕は前作の『NEW』を最後にして、活動を狭めていくのだろうと思っていた。これまでの実績は、もちろん世界一である。それほどアルバム・リリースやコンサート・ツアーをしなくても、おかしくはない。

ところが、この五年ぶりの『エジプト・ステーション』で、またもや『NEW』のときと同

じように、世界旅行するらしい。すでに、十月の来日も決まっている。ファンとしては、嬉しい。しかし、落としどころが見つからないような気もする。

『エジプト・ステーション』を聴いても、複雑である。これは書きたくはなかったけれど、あえて書こう。声がもう変わっている。〝バンド・オン・ザ・ラン〟や〝マイ・ブレイヴ・フェイス〟のときとは、違っている。

それは、明らかにソング・ライティングにも、影響している。声が変われば、美しさも変わる。声が変われば、メロディーも変わる。声が変われば、ワーズ・アンド・ミュージックが変わる。

僕がこのポールの変化を意識したのは、何年前だっただろうか。ポールの唱法に、微妙に違和感を覚えた。ウィスパリングである。つまり、ささやくように歌うということである。これをポール自身はどう思っているのかは知らないのだけど、デビュー当時からのファンは困ってしまう。つまり、かっこ良くないのだ。

今回も数曲そういう曲があるけれど、一曲すべてウィスパリングというのはない。たとえばABCという形ならば、Aだけウィスパリングで BCは普通に歌っている。しかし、数曲というのが、考えものだ。どうにかならないかと思ってしまう。

声に関していえば……もうやめよう。自分のヒーローをおとしめるようなことを書くのは、もうやめなければいけない。

『エジプト・ステーション』である。ポールらしい、見事に訳が分からないタイトルである。

ともかく、全十六曲、他の人間には作れないアルバムである。ポール・マッカートニーである。四曲目の〝ハッピー・ウィズ・ユー〟と六曲目の〝ファー・ユー〟が、素晴らしい。そして、十二曲目の〝ドゥー・イット・ナウ〟は、僕達ポール・ファンが愛した、また新しい一面をあらわした名曲である。

老いと闘って、勝ったアルバムである。老いにあらがう姿は、かっこいい。

〈二〇一八年十月号〉

ポール・マッカートニーが個人で初めて来日したのは、一九九〇年だった。もちろん一九六六年にも来日はしているけれど、あれはビートルズで、一日に二回公演とかワン・ステージは三十分とか、六〇年代のパッケージ・ショーのようなものであった。

あの一九九〇年の初来日から、ポールは定期的に日本を訪れるようになった。特に、ここ数年は、毎年来日している。そうなってくると、いい歳をしたじじいのファン達も、いささか大変になってくる。特に、秋にはビートルズ関係のリイシューが多いのだ。

今年［二〇一九年］でいうと、まずジョン・レノンの『イマジン』の発売があった。このスーパー・デラックス・エディションは、一万二千円である。次に、ビートルズの『ホワイト・アルバム』の発売があった。このスーパー・デラックス・エディションが、一万九千五百円である。

すでに二万千五百円が必要なのに、その前にポールのコンサートのチケットが一万八千五百円である。コンサートに行けばプログラムぐらいは買うわけで、これが三千五百円になる。Tシャツの一枚も買えば、四千五百円である。すでにして、五万八千円になっている。

まだ、終わらない。ポールの『ウイングス　ワイルド・ライフ』と『レッド・ローズ・スピードウェイ』一枚のスーパー・デラックス・エディションが、なんと五千五百円なのだ！　もっと驚くことに、これが予約で完売なのだそうだ！　CDのスペシャル・エディションにしても、一枚でも七千二百円である。

この数か月で、六～七万円もの金が必要になるのだ。若い人はボーナスを当てればいいのだけど、僕の友人達は僕と同じくもはやそんなものは期待出来ない立場の人間なのだ。いったい、どうすればいいのだ！　俺達は諦めろというのか！

酒を飲むと、じじい達の怒りは爆発する。今に、革命が起こるかも知れない。老人はCDは半額にしろ！　コンサート・チケットも半額にしろ！　映画だって、老人割り引きで半額になっているじゃないか！　歌うぞ、〝私達の望むものは〟を！

とここまで書いたところで、リンゴ・スターの来日が発表された。一万六千円……。

というわけで、十月三十一日、複雑な気分で、東京ドームに行く。もはやボーナスなどは期待出来ない友人が寄って来て、「Tシャツ二枚買っちゃった」と嬉しそうに言う。お前、明日の食事は大丈夫か。僕はプログラムだけにした。

この友人は明日の東京ドームも来るし、五日の両国国技館のチケットも買っている。八日の名古屋にも行くそうだ。つまり、一万八千五百円プラス三万八千五百円プラス一万八千五百円で、今迄の費用に足すことに七万五千五百円になる。おっと、東京と名古屋の間の往復の新幹

線料金も必要になるし、八日は名古屋のホテルに泊まるという。

なにか、やけくそになって、金をばらまいているような気がする。まじめにやっているアリさんと比べると、キリギリスのようなものである。こいつは今年の忘年会には来ないだろう。予約をひとり減らさなくちゃ。

会場の前でうろうろしていると、僕もTシャツを買って、家に帰れなくなると困るから、早めにドームの中に入る。スクリーンは縦で、下から上にポールが流れて行く（ジョンもジョージもリンゴも）。最後にヘフナーのベースが光輝いて、いよいよポールの登場である。

最初にジャーンとギターが鳴って〝キャント・バイ・ミー・ラヴ〟だぞと隣の席の高見展〔ロッキング・オン〕に偉そうに言ったのに、そのまま〝ア・ハード・デイズ・ナイト〟だった。去年はワールド・ツアーが日本からだったから初めはポールの声が出ていなかったけれど、今年は大丈夫のようだ。

続けて、〝ハイ・ハイ・ハイ〟、〝オール・マイ・ラヴィング〟と手堅く進んで行く。〝レッティング・ゴー〟、〝フー・ケアズ〟、〝カム・オン・トゥー・ミー〟……。

十曲ぐらい演奏したところで、どうも前の席の人物が気になってきた。基本的に、僕のようなじじいやばばあが多いのが、ポールのコンサートの特徴だ（もちろん、若い人だって、たくさんいる）。しかし、彼等が一九九〇年から、いつもポールのコンサートに来ているとは限らない。

CamScannerでスキャン

前にいる御同輩は、一曲ごとにびっくりしている。隣にいる若い女性は会社の部下で不倫だと思ったのだけど、娘だということが判明する。つまり、親子でポールのコンサートに来ているのだ。ということで、事情が分かってきた。

こういうコンサートに来ているからには、若いときはロックを聴いていたのだろう。しかし、これだけ驚いているということは、かつてはポールの良いファンではなかったということになる。

分かった、こいつは七〇年代にはビートルズやジョンやポールを馬鹿にしていた奴だろう。つまり、レッド・ツェッペリン、ディープ・パープル、エマーソン・レイク・アンド・パーマー、キング・クリムゾンを崇めていた奴だろう。

僕がジョンやポールを熱く語っていたのを、鼻で笑っていた奴に違いない。しかし、二〇一八年、ポールは現役だけれど、ツェッペリンはいない。パープルやクリムゾンは、もう昔の姿ではない。おい、EL&Pが解散しているのを、知っているのかい?

かつて馬鹿にしていたポールを一万八千五百円も出して(娘の分も入れれば三万七千円だ)見に来ているのは、何故なんだい? つまり、ツェッペリンもパープルもEL&Pもクリムゾンもいなくなったからだろう?

はっきり言おう、ポールはそんな奴等も受け入れるのだ。いいよと言うんだ。君達はちゃんとポールを聴いたことなんか、一度もなかっただろう。だから、初めてコンサートを見て、びっくりしたのだろう。

CamScannerでスキャン

お前なんか、一生『マシン・ヘッド』聴いてろ！　とは言わない。いいと思ったら、明日『バンド・オン・ザ・ラン』や『タッグ・オブ・ウォー』のCDを買って、聴いてもらいたい。

アコースティック・セットになっても、ポールの怒濤の進撃は続く。〝夢の人〟、〝イン・スパイト・オブ・オール・ザ・デンジャー〟、〝フロム・ミー・トゥー・ユー〟、〝ラヴ・ミー・ドゥー〟。〝フロム・ミー・トゥー・ユー〟は、これが初めてだろう。かっこ良かった。

なんと、この日は〝ジェット〟をやらなかった。あの全部のコンサートに行った友達の話では、次の日にもやらなかったそうだ。僕の大好きな〝ジュニアズ・ファーム〟も、翌日だったようだ。翌日や両国や名古屋では、〝イエスタデイ〟をやらなかったそうだ。世界で一番有名な曲をやらなくても、コンサートが成立してしまうんだ。ポールにとっては、夢の中で浮かんだメロディーだからか。

それにしてもと、思う。最近はポール個人の曲だけにこだわらなくなった。レノン＝マッカートニーの、〝ア・ハード・デイズ・ナイト〟、〝アイヴ・ガッタ・フィーリング〟、〝フロム・ミー・トゥー・ユー〟、〝ラヴ・ミー・ドゥー〟なんかそうだろう。〝ビーイング・フォー・ザ・ベネフィット・オブ・ミスター・カイト〟なんか、はっきりとジョンの曲だろう。もはや、そんなことにこだわっているときではないのだろう。レノン＝マッカートニーの作品も、ポールが歌わなければ誰が歌うのか。リンゴだって、数曲じゃないか。

今回はポールの他にはいつもの四人のメンバー以外に、三人のホーンがいた。七十六歳、変

CamScannerでスキャン

わらないなと思っていても、少しずつ変化しているのだ。
いつものように、〝死ぬのは奴らだ〟でドーム中が大騒ぎになって、〝ゴールデン・スランバーズ～キャリー・ザット・ウェイト～ジ・エンド〟で終わる。

途中から入場してきて、やたらと話しかけてくる女性が隣の席にいて、面倒くさいからろくに返事もしなくて、よく見たら井上貴子「ロッキング・オン」だった。ちゃんと、言えよ。反対側の席を見ると、高見展はTシャツ一枚になっていた。いいか、明日から十一月だぞ。
せっかく『ウイングス　ワイルド・ライフ』と『レッド・ローズ・スピードウェイ』が発売されるというのに、この二枚からは一曲もやらない。思い返すと、今迄に日本でやったのは〝マイ・ラヴ〟だけだ。
実をいうと、この二枚の頃のポールは、試行錯誤の時間だったのだ。僕は『マッカートニー』はただやってみただけだと思っているし、最近若い人達に評判のいい『ラム』は失敗作だと思っている。
そこで二週間で作った『ウイングス　ワイルド・ライフ』は、作りこめなかった。しかし、楽曲は素晴らしい。〝トゥモロー〟なんか、ポールの名曲十曲の中に入るだろう。全体的に、裏街のバンドの雰囲気がある。
そして、『レッド・ローズ・スピードウェイ』で、はっきりと分かったのだろう。ポールはバラードだけだといわれて封印していたそれを、全開したのだ。〝マイ・ラヴ〟である。同じ

コード進行で作った〝ホールド・ミー・タイト〟、〝レイジー・ダイナマイト〟、〝ハンズ・オブ・ラヴ〟、〝パワー・カット〟のメドレーは見事だった。
これが『バンド・オン・ザ・ラン』につながったのだ。

〈二〇一九年一月号〉

VI

CamScannerでスキャン

ニール・ヤングの最重要作

もう十二月になっちゃうのか。ということは、奥からコートを出してきて、クリーニングに持っていかなきゃならないな。長袖シャツとタイツも出して、洗濯しておかなきゃならない。ニット帽やマフラーや手袋だって、用意しておかなきゃ。

十二月八日もやってくるんだ。いうまでもなく、ジョン・レノンの命日である。もう三十四年も経ってしまったのか。僕は二〇代最後の年だった。それが、来年は〝ホエン・アイム・シックスティー・フォー〟である。なんとなく、不思議である。

亡くなってしばらくは、十二月八日は必ず友人を誘って酒を飲みに出かけていた。しかし、いつのまにか、そういうこともしなくなっていた。十二月はみんな忙しいんだ。夕方になって十二月八日だということに気がついて、ジョンの作品を聴きながらひとりで酒を飲んだりしている。

それで感じるのは、ジョンの声である。七〇年代のソロのものはもちろんであって、六〇年代のビートルズでも素晴らしい。つまり、一九六三年で二十三歳でも、すでに人生の裏も表も知っているような声なのだ。あの声がいなくなっちゃったんだ。

ジョンと同じぐらいに特徴のある声といったら、最初に頭に浮かぶのはニール・ヤングである。ジョンのように、人生を知っているというわけではない。七〇年代は若かったし、今では成熟している。年齢に則した声といってもいいだろう。

そう、アメリカのプレスでは、「哀れっぽい」といわれている、あの声である。僕は「哀しみを忘れない」声だと思っている。あの声で〝ライク・ア・ハリケーン〟も〝ロッキン・イン・ザ・フリー・ワールド〟も歌っているから、伝わってくるのである。声は大人になっても、発想は若いままなのである、ニール・ヤングは。

『ストーリートーン』は、ニール・ヤングの今年〔二〇一四年〕二作目の作品である。前作の『ア・レター・ホーム』は、かつて親しんだフォーク・ソングを、観光地のお土産用のヴォイスグラフでレコーディングした、七十八回転のSPのような音のものだった。

今作は素晴らしい音である。オリジナル曲ばかりで、十曲である。まず、ニール・ヤングがソロで、アコースティックで演奏した一枚がある。そして、ストリングスやホーンやコーラスやバンドなど計九十二人を集めて、同じ十曲を演奏した一枚もある。

残念なことに、僕は九十二人ヴァージョンのほうしか聴くことが出来なかった。しかし、これを聴いて、この二枚と『ア・レター・ホーム』とは関係しているのではないかと、なんとなく感じた。つまり、三枚でひとつのセットなのではないだろうか。僕のこういう感覚は、わりと当たるからね。

まだ歌詞が分からないので、タイトルと曲調で予測していくしかない。リード・トラックといってもいいだろう〝フーズ・ゴナ・スタンド・アップ？〟は、地球の生態系を保護しようという内容だそうだ。

情報も少ないし、歌詞も分からない。二枚組なのに、一枚しか聴いていない。しかし、これはニール・ヤングの中でも最重要な一枚だと、僕は確信した。ということは、ロックの歴史に残る一枚だということである。

なんといっても、メロディーが新鮮である。いつものように、手癖で書いてしまったようなものは一曲もない。セッションの勢いで仕上げたような曲もあったことは、コアなファンも認めるだろう。今作には、そういう曲はない。

九十二人のミュージシャンと合わせなければならなかったから、しっかりと作ったのだろうか。いや、ニール・ヤングはそういう人ではない。最初から、時間をかけて、練り上げたのだろう。カヴァーの『ア・レター・ホーム』と、つながっているのだから。

この十曲、大きく三つに分けることが出来る。美しいメロディーにストリングスの〝プラスティック・フラワーズ〟、〝グリマー〟、〝ダンブルウィード〟、〝アイム・グラッド・アイ・ファウンド・ユー〟。

ブルージーでバンドにホーンが使われている、〝アイ・ウォント・トゥー・ドライヴ・マイ・カー〟、〝セイ・ハロー・トゥー・シカゴ〟、〝ライク・ユー・ユースト・トゥー・ドゥー〟。

慣れ親しんでいるのがバンドにストリングスの、〝ホエン・アイ

ピング〟、〝オール・ゾーズ・ドリームズ〟。そして、ジョン・レノンふうのヴォーカルの、〝ブーズ・ゴナ・スタンド・アップ？〟である。

なかでも凄いのが、ストリングスの四曲である。ウィスパリングのヴォーカルは、正にひとり語りである。聴いていると、泣きそうになってしまう。ニール・ヤングのヴォーカルの説得力に、はっきりいって驚いてしまった。

大外れになることを覚悟して言うと、これはニール・ヤングが自分の人生を綴ったものなのではないだろうか。そのソロ・ヴァージョンと、九十二人ヴァージョンである。それは素晴らしい音で、その前にそうではない音での親しんでいたフォーク・ソングがある。僕はそう思い込んだ。

来年七十歳になるニール・ヤングは、こういう形で人生を綴ったのではないだろうか。一九七〇年には、誰も七十歳になるとは思ってもいなかった。ロックに関わっていたら、老人になるまで生きていられるはずがない。そうだった。

こういうことを書いていて、気をつけなければいけないのは、次の作品でヒップ・ホップをやったりすることがあることだ、ニール・ヤングは。

〈二〇一五年一月号〉

二十年なんてすぐだった

音楽連載として書いていたように、「二〇一九年」八月の終わりに約二十年ぶりにライブを行なった。場所は国立だったから、日本のロックとしては正しいと言い張っても、誰も異論は唱えられないだろうと、確信している。

基本的に、収容人員九十人ぐらいの小さなライブ・ハウスだったのだけど、立ち見の人がいっぱいで通路が歩けなかったから、入口側だったら「満員御礼」を下げたかったぐらい。ステージに上がって僕が最初に言ったのは、「年齢層が凄いことになってるなあ」だった。

それだけたくさんの人が来ていたということであり、年齢層が高かったということでもある。四〇代から六〇代が中心で、数人見かけた二〇代は小さくなっていて可哀想にさえ思えた。

僕の一曲目の"裏切りの季節"を歌い始めて、足が震えていることに気がついた。それを悟られないように動きまわろうとしたのだけど、なんといってもステージが狭い。

総勢七人いるわけだから、ひとりの可動面積は一メートル掛ける一メートルぐらいしかない。すぐ横にはギターのエフェクターが並んでいて、踏んじゃったら大変なことになっちゃう。

二曲目の"薔薇子"になったら、足の震えは止まっていても、一曲目で焦ったせいか、フレ

ーズもプレスも目茶苦茶になっている。まあ、そんなことに気がついていた人は、僕以外にはひとりもいなかっただろうけどね。

この二曲はジャックスだから、そのままではオリジナルの相手にならない。だから、ちょっと工夫を加えたのだけど、これも誰も気にもしていなかっただろう。そんなこと知らないんだから、分かんない。分かんないんだから、しょうがない。

また、この二曲は一九六八年の『ジャックスの世界』に収録されていたから、もう四十七年も聴いているわけで、間違えようがない。しかし、三曲目の僕が作った〝黒い鳥〟は、今年一月の『考える人』の収録曲だから、まだ半年しか経っていない。

どうなるかなと思っていたら、見事に間違えちゃった。このライヴの一週間後ぐらいに、水橋さんと谷野さんに会ったら、みんなそこそこ間違えていたようで、ちょっとほっとした。

僕が二人のミスに気がつかなかったように、二人も僕のミスに気がつかなかったようだ。次の渋谷のライヴは、しっかりやろう……という渋谷のライヴが、実は明日なんだよね。ライヴの前夜に原稿を書いているなんて、三十年前には有り得なかった。

かつては、ライヴの前日には通しのリハーサルが終わっていて、夜はあまり酒も飲まなかった（さっき冷蔵庫をチェックしたら、ビールがなかった。だけど、焼酎があるからいいことにする）。

当日は斎戒沐浴とまではいわなくても、それなりの心がまえで会場に行った。だから、サウンド・チェックで、音響さんや照明さんとステージに立っているのが嫌で、帰りたくなった。

ところが、今は、二十四時間後にはステージで歌っているというのに、こうやって平気で原稿を書いている。年齢を重ねて、肝が据わったのか、頭が鈍くなったのか、どちらにしろ失うものは何もない。

そういえば、六月の終了後、かつて僕のファン・クラブに入っていたという女性に話しかけられた。僕のファン・クラブなんて三十人ぐらいしかいなくて、みんな顔を知っていたのに、分からなかったというのはおかしいなと思って、気がついた。

あれは三十年前のことだったんだ。僕が六十四歳になって、昨日二人目の孫が生まれたように、彼女も結婚して、子供がいるのだろう（訊かなかったけど）。

家に帰ってから、ひとりでビールを飲んでしみじみした。三十年ぶりか。なんで、三十年もやらなかったんだろう。さっき、ここが自分の居場所だと感じたのに。

そういえば、何回か誘われたこともあったんだ。でも、出来ないと思って、断ったんだった。それなのに、去年水橋さんに誘われたときには、強烈にやりたいと思ったんだ。そういうことだったんだ。

それなら、しょうがない。きっと、そういうふうになっていたんだろう。だけど、出来ればもう十年前にやりたかった。まだ髪の毛があったんだよな、あの頃は（金もいらない名誉もいらぬ、私ゃも少し毛が欲しい）。

六月号ではジミ・ヘンドリックスの『ＪＩＭＩ：栄光への軌跡』を書いて七月号ではジェー

ムス・ブラウンの『ジェームス・ブラウン～最高の魂を持つ男～』を書いて、今月号はブライアン・ウィルソンの伝記映画『ラブ&マーシー　終わらないメロディー』である。

今年はロック・ミュージシャンの伝記映画の、当たり年なのだろうか。今迄、ロック・ミュージシャンの伝記映画といったら、思い出すのはジョン・レノン、ジャニス・ジョプリン、ジム・モリソンぐらいだったのだから、どういうことなのだろう。

これを我田引水すれば、六〇年代に活動していた人達の功績が、今になって確かなものになって、二〇一〇年代に生きているということになる。それにしても、今迄は故人ばっかりだったのに、ブライアン・ウィルソンは生きている（ボブ・ディランの映画もあったけれど、あれは伝記ではないだろう）。

この映画の面白いところは、六〇年代の『ペット・サウンズ』の制作から『スマイル』の挫折までの時間と、八〇年代の人間をやめていたどん底の時間が、交互に語られるところだろう。監督はビル・ポーラッド。六〇年代のブライアンはポール・ダノ、八〇年代のブライアンはジョン・キューザック。現ウィルソン夫人のメリンダ・レッドベターはエリザベス・バンクス。悪徳精神科医のユージン・ランディーはポール・ジアマッティー。

ここで興味深いのは、六〇年代であっても、八〇年代であっても、ブライアンが自信なさげに描かれているところだろう。音楽の天才でありながら、実生活では確固としたものがなかったのだろうか。

おそらく、そこから派生したのだろう、この映画のテーマは、支配者からの脱出である。六

〇年代は、父親のマリー・ウィルソンである。かつては、彼もミュージシャンを目指していて、失敗していた。そして、息子達の才能が開花すると、マネージャーとして活躍する。

そのうちに、プロデューサー気取りになって、息子達の音楽に注文をつける。言うことを聞かないと、衆人環視でもブライアンを叩いたりする。意を決したブライアンは、彼をビーチ・ボーイズから切る。すると、なんと彼はビーチ・ボーイズそっくりのバンドを結成してしまう。

八〇年代は、精神科医のユージン・ランディーである。人間をやめていたブライアンを治療すると言って、薬漬けにして意のままにしてしまう。自分がいなければブライアンは何も出来ないからと言って、ブライアンの曲の共作者のクレジットを取る。ブライアンのレコードのプロデューサーだと主張する。

この映画では、メリンダとカール・ウィルソンが、ブライアンの遺産がユージン・ランディーのものになるという書類を見つけて、切ることになっている。アメリカ人が大好きな家族のストーリーになっているのが気になるのだけど、本当にそうなのだからしょうがない。

このサウンドトラック・アルバムは作られていないけれど、キャピトル時代のシングルA面B面五十八曲と日本のみのシングルA面B面十二曲で全七十曲のCD三枚組とCD-ROM一枚の『ビーチ・ボーイズ　USシングル・コレクション』が発売された。

また、二〇〇二年にリリースされた、ブライアン・ウィルソンが選曲した『カリフォルニア・フィーリン〜ベスト・オブ・ビーチ・ボーイズ』も、今回リイシューされている。

ブライアンが『スマイル』を断念したのは一九六七年で、本人も認めるカムバック・アルバム『イマジネーション』は一九九八年だったから、彼のブランクも約三十年ということになるのが、僕としては面白い。もちろん、僕なんか、ブライアンと比べものにもならないけどさ。

〈二〇一五年九月号〉

CamScannerでスキャン

二十年前、始まった

　この時期に一番悩むのは、確定申告である。もう四十年以上もやっているというのに、毎年頭を抱えてしまう。若くて元気なときは一日で片づけられたこともあったけれど、最近は少なくとも二日はかかる。今年は三日かかった。

　二月十六日から三月十五日までで、かつてはぎりぎりになってあわててやっていた。しかし、ここのところは心を入れかえて、二月十六日には始めて、数日後には提出している。去年なんか二月十五日に完成させて、初日に税務署に持って行った。誰も誉めてはくれなかったけど。

　あるときには面倒くさくなって、三月十六日に持って行ったことがあった。それでも何も言われなかったので、味を占めてそれからはどんどん遅くなった。一か月、三か月、五か月、七か月……。国民健康保険の額が決められないと、役所から連絡が来た。

　前述のように、今では二月二十日ぐらいまでには終わらせている。控えの用紙に判を貰うと、ほっとするのはなんなんだろう。今年も大きな仕事をやりとげたような気になって、焼き鳥屋にでも行きたくなってくる。まだ二月だというのに。

　確定申告を始める前に、いろいろなものを集めておかなければならない。各出版社から送ら

れて来た支払調書、電気ガス水道電話などの領収書、それに預金通帳、ここ数年間の申告の控え。

病院や薬の領収書もいる。これが十万円を越すと、お金が戻ってくる。一度九万五千円のときがあって、泣きたくなった。今はアトピーだけで、定期的に病院に行って薬を貰うだけだ。また、一年に一回ぐらい、ぎっくり腰になることがある。これは一週間もすればなんとかなるので、医者には行かない。だいたい、行けない。そういうときに火事になったら、俺は死ぬんだろうなと暗くなる。

ともかく、そういうものを並べると、机のまわりはいっぱいになってしまう。それらの細かい計算が終わると、もう三時間や四時間は経っている。なんとなく、今日の国民の義務は果たしたような気になる。で、本日はここまでということになる。

二日目は控え用紙に書いていって、何時間かすると終わる。あとは、これを提出用紙に写すだけだ。それは十分もあれば出来ることだから、明日税務署に行く前にやればいい。そういうわけで、本日はここまで。

そして、翌日、完成させて、税務署に持って行く。こう書くと、簡単なようだけど、普段、お金の計算なんかしないから。今、思ったことがある。確定申告の提出最終日にぎっくり腰になったら、どうすればいいんだろう。

今年はフジ・ロック・フェスティヴァルが二十回目だという。編集部で調べてもらったら、

僕が行ったのは一九九八年の一回目から二〇〇九年の十二回目までだった。
これは五〇代も終わりに近くなって、坂を上がったり下がったりするのが辛くなってきたからだ。夜中に雨の中をホテルに向かって歩いていると、敗残兵のような気分になってしまう。
フジ・ロックでまず思い出すのは、一九九七年の一回目のことだ。編集部から電話がかかってきて、今月のみなと図書館のロック講座をやってくれという。今月は誰も行くことが出来ないのだそうだ。それを引き受けて一週間後ぐらいに、その日がフジ・ロックの初日だということを知った。
あの日は中でも雨風が激しかった。フジ・ロックは台風直撃だった。あとから、スマッシュの日高さんに、「松村君はああいうときは来ないからな」と嫌味を言われた。こういうことだったんだと説明しても、信じてくれなかった。
だから、二回目の豊洲が最初ということになった。そして、その前日になんとぎっくり腰になってしまった。歩くのが辛い。ステージはふたつだけだったから、まだ良かったのだけど、その移動中にぎくっとなって、動けなくなったりした。
エアーサロンパスを持って行っていて、二時間おきぐらいにトイレに入って使用していた。そういう状態ではあったけれど、初めて見たビョークが凄かったのを覚えている。
一九九九年からは苗場で、なんといってもレイ・デイヴィスである。もうひとりのギタリストとふたりだけのアコースティック・セットで、あれは圧巻だった。ファウンテインズ・オブ・ウェインやアッシュも良かった。電撃ネットワークを初めて見た。

忘れられないのは二〇〇一年で、ニール・ヤングである。約一時間のセットが終わっても、ニール・ヤングもクレイジー・ホースもステージにいて雷のような音を出している。こりゃあ来るなと思ったら、来た。〝ライク・ア・ハリケーン〟が、四十分ぐらいだっただろうか。

二〇〇二年は、ホワイト・ストライプスだった。観客は三分の一もいなかったので、僕は一番前に行った。ギターとドラムスだけで、この迫力はなんなんだと思った。ふたりとも眼が行っちゃっていた。この年にはビールアウトも出演していて、それから何年間か続いたと思う。毎年、夜中にいっしょに酒を飲んだ。

ともかく、会場内を歩いていると、知り合いに逢って、ビールでも飲もうかということになる。そうなると、どうでも良くなる。見るつもりだったバンドの音を遠くから聴きながら、これがロック・フェスの醍醐味だなどとほざいていた。それからは、午後五時以前は飲まないことにした。

また、初めのうちは、この三日間が終わったらやらなければならないことばかり考えていた。一時間ぐらい空いたら、ホテルに戻って原稿を書いた。それをやめて、この三日間は別なのだと考えるようになった。時間が空いたら、人がいない所に行って藤沢周平の文庫本を読んだりした。

二〇〇三年はジョン・メイオールとスティーヴ・ウィンウッドというブリティッシュ・ロックの巨人を見た。ロン・セクスミスは何年だったのか。始まる前に、彼はこんなにたくさんの観客の前で歌うのは初めてだと言っていた。終わってから、乾杯した。

書いていくと、切りがない。フジ・ロックでは、日本のミュージシャンをたくさん見た。忌野清志郎、東京スカパラダイスオーケストラ、ボアダムス、渋さ知らズオーケストラ、ROVO、ムーンライダーズ、ソウル・フラワー・ユニオン、電気グルーヴ、ピールアウト、仲井戸麗市、ラヴ・サイケデリコ、少年ナイフ、ゆらゆら帝国、くるり、クラムボン、ルースターズ、早川義夫、クロマニヨンズ、小野リサ、頭脳警察、そして上原ひろみ。

そういえば、去年、僕も出たな。

〈二〇一六年四月号〉

ピートは飛び、ロジャーは振り回す

『プリーズ・キル・ミー』（レッグス・マクニール＆ジリアン・マッケイン著　島田陽子訳　メディア総合研究所　二千五百円＋税）という、過激な題名の本を読んだ。二段組みで、五百四十頁以上もあるという本である。

これはアメリカのパンク……というよりも、ニュー・ヨークのパンクのストーリーである。登場するのは、ヴェルヴェット・アンダーグラウンド、MC5、イギー＆ストゥージズ、ニューヨーク・ドールズ、パティー・スミス、テレヴィジョン、ジョニー・サンダース＆ザ・ハートブレイカーズ、リチャード・ヘル、ラモーンズ、ブロンディー……。

この本には一般的なストーリーはなくて、つまりオーラル・ヒストリーである。百人以上にもなる当時の関係者の発言で、構成されている。ということは、Aという人物が言っていることと、Bという人物が言っていることが、まったく逆だったりすることもある。だから、オーラル・ヒストリーにしたのかも知れない。

ストーリーの基本はニュー・ヨーク・パンクの興廃で、一九六五年あたりから始まる。ちなみに、パンクという名称は、レッグス・マクニールという人物が、一九七五年にそういった音

冬の雑誌を作ったときに、考えたのだそうだ。

で、ストーリーは……セックス、ドラッグ&ロックンロールである。十七歳で、セックス、ドラッグ&ロックンロールなのである。二十七歳になっても、それは変わらない。三十七歳になっても続けていたら、廃人になるか死人になる。

ジョニー・サンダースの東京でのライヴはフルハウスだったので、僕はステージの袖で見た。難かしいことはまったくやっていなかったのに、かっこ良かった。ギャラで久しぶりに大金を手にした彼は、ニュー・ヨークに戻ってドラッグを山のように買った。そして、翌朝、死んでいるのを、発見された。

それでも、成功した奴はいい。そうなれなかった奴は、町の塵になるしかない。ほとんどの登場人物が、ドラッグをやり過ぎて何度もおかしくなっている。ほとんどの登場人物が、異性愛と同性愛の区別がついていない。

ふと、四十五年前の自分のことを思い出してしまった。自分のバンドのベースの奴と、阿佐ケ谷を歩いていたら、ギターを裸で持った男が近づいて来て、「グラス、買ってくれない?」と言った。「いくら?」と訊くと、「五百円」と言う。僕達はふたりで五百円も持っていなかった。そういう生活をしていた。それでも、生きていた。

また、レコード・デビューしてからは、前の晩、女の子とセックスをして、一度家に帰って、風呂に入った。それは身体の匂いを消すためで、その日は別の女の子と会うことになっていたからだ。結局、その子ともセックスをした。そういう生活をしていた。

基本的に、パンクというのは、CBGBを中心にして数ブロックのものだった。だから、数年経ってアメリカ中に広まったときには、本人達はわけがわからなかったらしい。それだけではない。ロンドンにも波及した。

マルコム・マクラーレンはイギリスからやって来て、ニュー・ヨーク・ドールズのマネージャーをやった。その後ロンドンへ帰って、セックス・ピストルズを作った。そういうことだったのだ。知らなかった。

基本的に、ニュー・ヨークのパンクと、ロンドンのパンクは、違っている。ニュー・ヨークのパンクは先達を尊敬していた。しかし、ロンドンのパンクは、馬鹿にしていた。ローリング・ストーンズは太った豚だなどと、平気で言っていた。

そして、キンクスとフーを、尊敬していた。正直いって、これが分からない。フーはストーンズと同じように、スタジアムでコンサートをしていた。キンクスはストーンズよりもお金をかけた、自分達のスタジオを持っていた。

セックス・ピストルズがそういう発言をしたのは、分かる。マルコム・マクラーレンにそう言えと、命じられていたのだろう。かつてのストーンズがロンドンのベガーと言われていたように、ピストルズもそういう存在になろうとしたのだろう。それは分かる。

しかし、他のパンク・バンドもそれに同調したのは、今となっては笑うしかない。有名になってキース・リチャーズに逢うようなことになったら、どうしたのだろうか。あの頃のキースだったら、殴るぐらいではすまなかっただろう。なんてったって、いつもナイフを持っていた

からね。
今ではパンクはロンドンから発生したかのように思われているけれど、何年も前にニュー・ヨークで生まれていたのだ。ロンドンのパンクは、どうやらマルコム・マクラーレンが作ったような気がする。

さて、僕が長年疑問に思っていたことに、〝ザ・フー〟問題がある。つまり、どうしてフーだけ〝ザ〟という冠詞をつけなければいけないのかということである。ビートルズ、ローリング・ストーンズ、キンクス、みんなそれでいい。しかし、フーはザ・フーなのである。原稿に〝フー〟と書くと、〝ザ・フー〟と直されることがある。電話して問い質すと、普通そう表記されているからと言う。ちなみに、「ロッキング・オン」では、そういうことはない。こういうじじいの文章に手を加えたりしたら、どうなるか分からないからだと思う。

フーの『ライヴ・アット・ワイト島フェスティヴァル　二〇〇四＋一九七〇』である。メインの二〇〇四年は、ジョン・エントウィッスルが亡くなって、ピート・タウンゼントとロジャー・ダルトリーのふたりだけになっての、イギリス・ツアーの一日である。

ジョン・エントウィッスルはドラッグをやって、ホテルにふたりの売春婦を呼んで亡くなっている。こう言ってはなんだけど、ゴッドファーザー・オブ・パンクスにふさわしい死に方である。

だから、ピートとロジャーの他のメンバーは、ピートの弟のサイモン・タウンゼント（ギタ

ー)、ピノ・パラディーノ(ベース)、ザック・スターキー(ドラムス)、ジョン・ラビット・バンドリック(キーボード)の四人である。
セット・リストは現在にも通じる、フーのベストである。ピートは飛び上がり、ロジャーはマイクを振り回す。文句はない。ふたりだけになっても、フーはフーである。
もう一枚は、一九七〇年の、やはりワイト島フェスティヴァルのライヴである。これは持っていたなと思って、探したら出てきた。それどころか、ライナー・ノーツは僕が書いていた。
こういうことは、よくある。
ピート・タウンゼント、ロジャー・ダルトリー、ジョン・エントウィッスル、キース・ムーン、四人が揃ったフーは無敵である。しかし、こうやって比べてみると、一九七〇年のステージは狭くて、四人が暴れたら壊れちゃいそうだ。
二〇〇四年盤を見ると、観客が若いということに気づく。おそらく、『トミー』の頃には、生まれていなかったのではないだろうか。ラビットはフリーの『ハートブレイカー』のジャケットのTシャツを着ているのだけど、観客は気づいたのだろうか。まあ、無理だろうな。
サイモン・タウンゼント、ピノ・パラディーノ、ザック・スターキーの三人は、モッズふうの服を着ている。揃えたのだろうか。しかし、観客は気づいていないようだ。まあ、無理だろうな。

〈二〇一七年八月号〉

やはり、六〇年代はビートルズで、七〇年代はツェッペリンだったのだ

この号が発売されるときには、もう終わっているけれど、今〔二〇一八年〕はピョンチャン・オリンピックの真っ最中であって、そのテレビ中継をずっと見ている。だいたいいつもどこかのチャンネルでなんらかの競技をやっているわけで、テレビを見っぱなしである。

あまり興味がわかない競技は見ないようにしようと思っているのだけど、とりあえずテレビはつけてしまう。結局急ぎでないことは後回しになって、ここのところ夜の十一時ぐらいに終わってから、その日の朝刊と夕刊を読むという、意味のないことをしている。

オリンピックにこんなに興味はなかったはずで、これはそういう年齢になったということなのかも知れない。かつては、オリンピックに夢中になって、ずっとテレビを見ているなどということはなかった。

思えば、一九六四年の東京オリンピックでは、都内の中学生は一度は国立競技場で観戦することが出来た。僕達は誰が一番速いかと、競技場の一番上の通路を駆けっこなんかしていた。競技なんか、まったく覚えていない。本当に、男子中学生というのは馬鹿だと思う。

おかげで、高梨沙羅、羽生結弦、宇野昌磨、小平奈緒、髙木美帆といった日本人選手がメダルを取った場面は、全部オン・タイムで見ている。それでも、そういう競技は、予選と決勝ぐらいだからいい。

カーリングは毎日のようにあって、なおかつ男子と女子があって一日に二試合あったりする。なんか、LS北見はずっと見ているので、親戚の女の子のような気分になって、失敗しても大丈夫だよと言ってやりたくなってしまう。

このオリンピックが終わるまで、正直に言ってあまりまともなことは出来そうにない。この原稿も明日の朝までに入れないと没だと言われていて、夜の十一時から書き始めている。

テーマはレッド・ツェッペリンである。ツェッペリンは渋谷陽一の領域だから、約四十五年間に二〜三回しか書いていない。下手なことを書くと、ケッとか言われるだろう。ツェッペリンか……。

レッド・ツェッペリンの『伝説のライヴ－HOW THE WEST WAS WON』の、リマスター音源である。オリジナルは二〇〇三年に発売されているから、十五年ぶりということになる。

三枚組CDは三千三百円で、四枚組レコードの値段は資料には書かれていない。ワーナー内部で「黙っていような」ということになったのかも知れない。スーパー・デラックス・ボックスというのが二万五千円である。CDとレコードの他に、いろいろなものが入っている。

も。

二万五千円払おうという人が三万人もいるということだ。いいのか、退職金をつかっちゃって

二万五千円か。初回三万セットには、ナンバーが付いている。CD三枚では満足しないで、

にか、なくなってしまった。とってあるのは、百枚もないだろう。ビートルズ、アニマルズ、ドアーズ……。

僕はCDが多数を占めるようになったとき、素直にCDに切り替えた。レコードはいつのま

演奏に関しては、文句の付けようがない、凄い迫力である。一九七二年六月二十五日のロス・アンジェルス・フォーラムと、六月二十七日のロング・ビーチ・アリーナでのライヴである。時期的に言うと、『レッド・ツェッペリン Ⅳ（フォー・シンボルズ）』が出て七か月後ぐらいだろう。

実際の活動期には、ライヴ・アルバムは『永遠の詩（狂熱のライヴ）』だけしか発表していないわけで、一九六九年から一九八〇年まで十年以上活動していたバンドとしては、今考えると一枚というのは少ない。現在のニール・ヤングだったら、三枚は出している。

しかし、『狂熱のライヴ』とか『伝説のライヴ』とか、日本語のタイトルはどうかと思う。七〇年代である。これはおそらくジミー・ペイジが決めたのだろうけれど、ジャケットもかっこいいとは言いにくい。普通に、四人が演奏している写真だって、絵になるはずである。

そういえば、レッド・ツェッペリンには、そういう分かりやすいジャケットは一枚もない。『BBCライヴ』だって、これと同じような分からないものだった。どういうことなのだろう。

たしか、アート・スクール出身だったと思うのだけど。

初期の頃、ジミー・ペイジはギターが上手くないという噂があった。考えてみれば元はスタジオ・ミュージシァンだったから、そんなことはありえない。ともかく、それが引っ繰り返ったのは、一九七一年九月の来日公演だった。噂によると、三時間以上も弾きまくっていたという。

つまり、レコードでのギターは、あくまでも曲の構成の一部だったのだろう。それがライヴになると、歯止めが利かなくなる。この作品でも〝幻惑されて〟を、二十五分以上もやっている。レコードなら、片面以上ということになる（このレコードはどうか知らないけれど）。

レッド・ツェッペリンのギタリストというのは、エリック・クラプトンやジェフ・ベックとはまったく違った存在でなければならなかったのだ。しっかりとした設計図を作って、曲を構築していくギタリストであるべきだったのだ。

それがライヴになると、弾けてしまうのだろう。ジョン・ボーナムの〝モビー・ディック〟なんて、十九分以上だ。逆にいうと、それだけ観客を信用していたのだろう。全部、見せたのだろう。

初期のツェッペリンが音楽雑誌や評論家に目茶苦茶に言われていたというのは、よく知られているだろう。「ローリング・ストーン」紙には「ジェフ・ベック・グループ（第一期）の二番煎じだ」と言われ、ブルース・スプリングスティーンにくっついたジョン・ランドウには

「暴力的で正気の沙汰とは思えない」と書かれている。

その結果、ツェッペリンはレコードのジャケットに、バンド名もレコード・タイトルも記さなくなった。もちろん、それが『フォー・シンボルズ』である。インタヴューも受けなくなった。それでも、レコードは売れて、コンサートはフルハウスになった。

最後に、一九七二年に二回目の来日をしたときに、渋谷陽一から聞いたエピソードを書いておこう。コンサートが終わって酒を飲みに行こうとなって、なんと香港に行ったのだという。ツェッペリンにとっては、日本も香港も同じようなものだったのかも知れない。飛行機も持っていたのだろうな。

今、そのときのスケジュールを見たら、十月二日から十月十日までの九日間に六回のコンサートが記されている。十月六日から十月八日までの三日間が、オフになっている。分かったよ、このときに香港に行ったんだろ。酒は美味かったかい？

〈二〇一八年四月号〉

CamScannerでスキャン

だってニー様だから

十一月二十八日〔二〇一八年〕に下北沢のラウンで行なった「三人のロックンロール・ミュージック」には、たくさんの人が来てくれた。午後七時半から二時間の予定だったのに、もう電車がなくなってしまうからと、店を出て駅に向かったのは、おそらく十一時半ぐらいだったと思う。

となると、おそらく三時間以上はやっていたのではないだろうか。このようにはっきりと覚えていないのは、開始前から酒を飲んでいて、始まってからも飲んでいて、終わってからも飲んでいたからである。

近藤智洋と岡本定義といっしょにやるのはこれが三回目で、彼等はいつもリハーサルが終わると飲み始める。「歌う前に、酒なんか飲むな」といくら僕が言っても、馬耳東風である。

これはなめられているというよりも、いつもの彼等のライヴ前のルーティンなのだろう。一杯ひっかけてから、歌うのである。そう思ったから、今回は彼等につきあった。リハーサルが終わってから、近所の蕎麦屋へ行ってとりあえず飲み始めた。会場に戻っても、飲んだ。ステージが始まったときには、ちょうどほろ酔い加減だった。

十二月号にも書いたかも知れないけれど、この日のための打ち合わせは何回もしている。しかし、その後に必ず酒を飲んでしまうから、あまり覚えてはいない。だから、この日も僕は何をやるのだか、しっかりと分かっていなかった。ともかく、来たということだけだ。

すると、近藤と岡本が、てきぱきと決めてくれる。つまり、こういうときは彼等にまかせて、僕は言われるとおりにやればいいのだろう。あとは、酒を飲んでいればいいのだ。そういうことに決めた。

こういう仕事は、春にも新宿ロフトでやった。病気をしてから初めてだったし進行も決まっていたから、あのときはろくに喋らないうちに終わってしまった。今回は近藤と岡本が仕切ってくれるから、自由に喋ることが出来る。どうでもいいことでも、かまわない。

酔っぱらったいきおいで、僕は岡本に〝ラーメン〟を歌ってくれと頼んだ。岡本は予定になかったにもかかわらず、しっかりとやってくれた。すると、近藤は〝エイプリル・パッセンジャー〟をやってくれた。彼がピールアウト時代の曲を歌ったのは、これが初めてだったのではないだろうか。

ライヴも終わりのほうでは、僕はお客さんと喋っていたような気がする。あれはなんだったのだろう。高田渡は酒を飲んで、ステージの上で眠ってしまったという逸話がある。まさか、そこまではならないだろう。

後日、近藤が「面白かったから、これでツアーをしましょう」と言ってきた。すでに、名古屋のライヴ・ハウスは決まっているという。なんとなく、面白い。ややこしいところはすべて

近藤と岡本にまかせて、僕は酒を飲んで喋っているだけならそれもいい。

さて、二〇一八年最後というか、二〇一九年最初の興味深い書物である。ニール・ヤングの『ニール・ヤング 回想』である。

発行はストランド・ブックスで、発売は河出書房新社である。訳者は清水由貴子で、定価は四千八百円＋税である。発行は二〇一九年一月三十日になっているから、おそらくその一週間前ぐらいには店頭に並んでいるだろう。何故か、本の発売はそうなっているのだ。

英語のタイトルは『SPECIAL DELUXE』というもので、なんだか分からない。ボーナスCDが二〜三枚はついていそうだけど、もちろんそういうものはない。副題に「A MEMOIR OF LIFE & CARS」とある。なんといっても、ニール様自身が描いた自動車のカラー・イラストが四十点もある。

最初はニール様は、自動車と犬の物語にしようと思っていたらしい。しかし、犬にはあまりいい思い出がなかったので、自動車と音楽の話にしたようだ。どうして思い出がないのに犬のことを書こうと思ったのかは、不明である。だってニール様なんだからと言うしかない。

ニール様が自動車好きなどというのも、僕はちっとも知らなかった。なんてったって、イラストに描いた四十台は、全部ニール様が所有していたものなのだ。基本的に一九五〇年代一九六〇年代のクラシック・カーが（こう言っていいのかは、僕には分からない）、大好きらしい。

そういう自動車を探してきて、動かせるように修理して乗るのが大好きだという。もちろん、

CamScannerでスキャン

新車を買うよりも高くつく。僕は自動車には興味がないのだけど、それでニー様が興奮しているところは面白いったらない。まあ、普通の人ではないからね。

この本で今迄不審に思っていたことが、ひとつ分かった。それは若き日のニー様が、霊柩車を自家用車にしていたことだ。つまり、ギターやアンプを積むとなったら、大きな車になってとても高い。そこへいくと、中古の霊柩車なら安いし、なんといっても棺桶を積めるぐらいだから荷物もたくさん入れられる。それはそうだけど、なんとなく気持ちが悪い。でも、ニー様だからね。

そして、音楽である。これが詳しく書かれている。かつての『ニール・ヤング自伝』には、ここまで音楽の話は書かれていなかったと思う。おそらく、一回書いてみて、これが足りないとなって、今回すべてを書いたのだろう。

今では誰もが知っている、ニー様のヴォーカル・スタイルである。アマチュア時代は、「そんな声なら、歌うな」と言われていたそうだ。そんなことを言った人は、今どう思っているのだろうか。まあ、ニー様を怒鳴りつけられる人だったら、もう死んでいるか。

バッファロー・スプリングフィールド、クロスビー、スティルス、ナッシュ・アンド・ヤング……興味深かった。なんてったって、〝ライク・ア・ハリケーン〟を作ったときのことも書いてある。

なお、終わりのほうに、バイオ燃料のことが書いてあって、トウモロコシを原料とするというので、僕はびっくりしてしまった。これはかつてブラジルでアントニオ猪木がやっ[illegible]

アントン・ハイセルと同じなのではないだろうか。

猪木はそれに金をつぎこみ過ぎて、新日本プロレスの社長から叩き落とされたのだ。それが原因で、タイガー・マスクがやめ、ＵＷＦが作られたのだ。ニー様が今それを考えているということは、猪木は間違っていなかったのだ。イノキ、ボンバイエ……取り乱してしまった。

四百六十頁もある本で、僕はこれを書かなければならないので、二日で読んだのだけど、普通に読んだら一週間はかかると思う。少なくとも、ニール・ヤング・ファンには必読の書である。

なお、終わりのほうになって、ちょびっとダリル・ハンナが出てくる。

〈二〇一九年二月号〉

VII

CamScannerでスキャン

時は流れて

毎晩ひとりで酒を飲みながら、テレビを見たり本を読んだりCDを聴いたりしている。ここで気をつけなければならないのは、テレビは見たい番組が終わればそこまでだけど、本やCDはいくらでもあるから、終わらせ難いということだ。

先週もCDを聴きながら焼酎を五杯飲んで、酔っ払ってしまった。外で友達と飲むとこんなものたいした量ではないのに、家でひとりで飲むとやたらと回る。ヨーグルトを食べて寝ようと決めて、蓋を開けたところでよろけて転んでしまった。床はべたべたになっちゃうし、今でも足が痛い。

飲みながらいろいろなことを考えるときもある。今家の中にあるもので、一番長くあるものはなんだろうと考えた。まず挙げられるのは、レコードと本である。これなら、六〇年代のものだってある。つまり、五十年以上も前のものである。しかし、これは数が多過ぎる。

次に思い出したのは、ひとつのジッポーのライターである。底の刻印では、一九七五年に作られたはずである。今でも年に一度はオイルを入れて、それがなくなるまで使っている。これは当時付き合っていた女の子に、誕生日かクリスマスかに貰ったものだった。これはもう四十

年も手元にあるんだ。あの美少女もおばさんになってるんだろうな。

また、高校生のときから持っているスプーンもあった。今見たら柄のところにHINOMARU CEYLON TEAと記してあったから、おそらく紅茶のノヴェルティーだろう。これは二〇代で実家を出て、ひとり暮らしを始めたときからなくさないように気をつけていた。これは四十五年ぐらいになるか。

そして、ルガーのモデル・ガンがあった。これは小学生のときに、買ってもらったものだ。買った大森駅前の店も、覚えている（もうないけれど）。ラーメンが五十円の時代に、こいつは五百円だったと思う。当然ペイントは剝げてしまって、ぼろぼろと言われても怒れない。おそらく、こいつは五十年から五十五年は手元にあるということになる。

さて、手に入れたのは十年か十五年ぐらい前なのだけど、もっと古いものもある。あるとき、古い硬貨を集めようと思った。古い硬貨といっても、いわゆる古銭ではない。現在流通しているコインである。一円から五百円まで、あまり手を広げると混乱してしまう。それで、十円玉だけにした。

特別に集めるというわけではなくて、買い物のお釣りにあったら取っておくというだけにした。だから、お釣りを貰ったら、すぐに十円玉を調べる。すると、店の人が間違えたかなと、怪訝な顔をする。だから、調べるのは、外に出てからにする。

だんだん増えてきて収拾がつかなくなったので、昭和二〇年代三〇年代だけにした。昭和三十五年以降はまだわりとあるので、一枚ずつだけでもういいことにした。その他の年は、次の

ようなことになった。これが面白い。
昭和二十六年三枚、二十七年七枚、二十八年一枚、二十九年七枚、三十年二枚、三十一年から三十三年まではなくて、三十四年一枚、というようなことになった。
どうして昭和二十六年以前はないのだろうと思ったら、どうやら十円玉は昭和二十六年から作られ始めたらしい。そうか、十円玉は僕が生まれた年から登場したのか。
コインはたくさん作る年とそうではない年があるというから、昭和二十七年昭和二十九年は多かったのだろう。昭和三〇年代前半は少なかったんだろうな。
それで気がついて、家の中を調べたら外国のコインが出てきた。一フランには、一九六一年と一九六九年があった。一セントには、一九四五年があった。戦争が終わった年だ。最後に、なんと昭和十九年の十銭があった。戦争中だよな。
ここまで読んできて、それがどうしたと思っている人もいるだろう。それでも、お釣りの古い十円玉は、集め続けよう。

ロン・セクスミスはまだ若手だと思っていたのだけど、考えてみたら『ロン・セクスミス』でメジャー・デビューしたのは一九九五年だった。今年で二〇周年である。そうか、そんなになるか。もう中堅からヴェテランと言ってもいいのかも知れない。
最近の彼は、アルバム毎にプロデューサーを変えている。前々作の『ロング・プレイヤー・レイト・ブルーマー』はボブ・ロックだったし、前作の『フォーエバー・エンデバー』はミッ

チェル・フルームだった。

彼が一番気に入っているのは、おそらくミッチェル・フルームだろう。しかし、僕にはあまりいい印象はない。手が合い過ぎるというか、分かってしまう。デビュー当時はそれで良かったのだろうけれど、今ではボブ・ロックなどのほうが新しいロン・セクスミスを出しているという気がする。

今回の新作『カルーセル・ワン』のプロデューサーは、ウィルコなどをやっているジム・スコットである。バック・ミュージシャンも、かなり違っているという。それが功を奏している。ちょっとした緊張感が漂っている。

基本的に、ロン・セクスミスは大きく変化する人ではない。しかし、必ず前作よりもいい作品を作る。それでは、二十年前のデビュー作からどれだけ良くなったのかといっても、指摘出来ない。そこが彼の面白いところでもある。

一作毎に良くなっているのに、変わっていない。その時点で最善のものを作っているのに、どことなく懐かしい。それがロン・セクスミスだと言ったら、彼は怒るだろうか。僕だったら、どのアルバムも〝今年の十枚〟に選ぶんだけどな。

酒を飲みながらロン・セクスミスを聴くのは、やめたほうがいい。のめり込んでしまうから。きっと、自分の人生を考えてしまうだろう。ともかく、七月までは生き抜こう。

〈二〇一五年四月号〉

天才の創りし作品

あれは二月の後半ぐらいだっただろうか、アトピーの症状が出てきた。顔の一部が、赤くなっている。目が腫れぼったいし、そういうふうに見れば顔全体がそうだ。アトピーのお医者さんには数か月に一度は通っているので、とりあえず行ってみた。

アトピーの薬は出してもらうことにして、お医者さんに「もう花粉が飛んでいますから、そっちのほうかも知れないですよ」と言われた。そうか、花粉症かも知れないな。まだ寒いからと思っていたのだけど、くしゃみが続けざまに五～六回出たりする。下を向いて新聞を読んでいて、スーッと鼻水が垂れたりもする。

目が腫れぼったいなどというのも、そうかも知れない。僕は花粉症は出る年と出ない年があって、ここ数年は大丈夫だったから油断していた。

面白いもので、電車の中でくしゃみをすると、インフルエンザが流行している冬には、みんな嫌な顔をするのに、花粉症が流行している春には、可哀相にという顔をする。当然、ハンカチで押さえているけどね。

考えてみたら、僕はインフルエンザにもノロウイルスにも罹（かか）ったことがない。中学校の同級

CamScannerでスキャン

生と酒を飲んでいて、そういう話題になったら、ひとりが「俺達は昭和二〇年代三〇年代の子供だから、耐性があるんだ」と、変なことで威張った。
そういえば、抗菌製品など、まったくなかった。夏は蚊に刺され放題だし、トイレは汲み取りだった。台風が来ると、床下浸水なんてのにもなった。網戸って、便利なんだよ。
そういうことを考えていて、久しぶりに吉行淳之介のエッセイを読んだら、アレルギーで苦しんでいるというのが、やたらと出てくる。吉行のアレルギーは知っていたけれど、ひょっとしたらこれはアトピーなのではないかと思った。
アトピーが認められたのは、ここ二十年ぐらいだから、吉行が苦しんでいたときには、まだないことになっていたのだろう。実際に、僕も「アトピーというのがあると聞きますが」と訊いたら、医者に「そんなものはない」と返されたことがあった。
思えば、六十三年の人生で、入院したのも一度だけだ。あれは小学校二年生で、運動会の日の朝、学校でブランコに乗っていたら、上級生が隣のブランコをぶつけて、僕は落ちて、なんだか分からなくなった。
担任の先生に言ったら、家に帰りなさいと指示された。今だったらなんだか分からないなどと口走っている小学生をひとりで帰したりはしないのだろうけれど、あの頃はそんなものだった。
家に帰って母親に伝えたところまでは覚えているのだけど、次に気がついたのは病院のベッドの上だった。つまり、ブランコから落とされて、頭を打って、一時的に記憶喪失になってい

たのだ。

一日入院しただけですんだから、かまわないのだけど、それで少し馬鹿になったんじゃないかと勘ぐられるときがあって、ちょっと困る。つまり、とんでもない間違いに気づくことがあるのだ。

いい大人になってから、小麦粉とうどん粉とメリケン粉が同じものだと判明した。みんな、違う粉だと思ってたんだよね。

いくら昆虫だとはいっても、人間は失礼過ぎると思っていた。ウスバカゲロウが薄羽蜉蝣と知って、びっくりした。薄馬鹿下郎だと思っていた。そりゃあ、失礼だよね。

赤穂浪士の物語を忠臣蔵というのが、分からなかった。そうか、大石内蔵助だから、忠臣の蔵だからかと理解したのは、去年のことだった。

僕は馬鹿なのだろうか。僕は病気なのだろうか。

ブライアン・ウィルソンが『スマイル』を完成できなくて、ビートルズの『サージェント・ペッパーズ〜』に打ちのめされて、ドラッグに陥って人間を止めたというのは、よく知られている。しかし、あれは本当にドラッグだったのだろうか。

あの頃、ときどきビーチ・ボーイズのライヴに登場していて、その顔を見ると鬱のような感じを受ける。ドラッグの後遺症がどういうものなのか知らないけれど、ブライアン・ウィルソンは病気だったのではないだろうか。

それにしても、二〇一二年のビーチ・ボーイズの五〇周年は、呆気ない幕切れだった。ニュー・アルバムとワールド・ツアーがあって、まだ二〇一二年の秋だというのに、マイク・ラヴはブライアン・ウィルソン、アル・ジャーディン、デヴィッド・マークスを解雇したのだから、分からない。

ビーチ・ボーイズの名前の権利は、どうやらマイク・ラヴが持っているようなので、しょうがないといえばそれまでだけど、後味が悪いったらない。マイク・ラヴはブライアン・ウィルソンに嫉妬したのではないかと、邪推してしまう。ブライアン・ウィルソンは座っているだけで、みんな拍手していた。マイク・ラヴはまったく声が出ていなかったもんね。

ブライアン・ウィルソンのニュー・アルバム『ノー・ピア・プレッシャー』には、アル・ジャーディンとデヴィッド・マークスも参加している。つまり、ビーチ・ボーイズを解雇された三人が中心で、ブライアン・ウィルソンが選抜した若手の実力者が参加している。

ひょっとしたら、これはブライアン・ウィルソンがビーチ・ボーイズの次のアルバムとして用意していたものなのかも知れない。内容は『ゴッド・メイド・ザ・ラジオ』よりも、ずっとずっといい。瑞々しい。六〇年代のカリフォルニアは、こういうものだったのかも知れない。

はっきりいって、マイク・ラヴのビーチ・ボーイズには、こういう作品は絶対に作れない。ブライアン・ウィルソンかマイク・ラヴかといったら、ビーチ・ボーイズ・ファンはみんな『ノー・ピア・プレッシャー』を選ぶだろう。

マイク・ラヴは馬鹿だな。ブライアン・ウィルソンは三十一年間の病気が治って、天才に復

CamScannerでスキャン

ったんだよ。

〈二〇一五年五月号〉

CamScannerでスキャン

ギターは最も優れた武器だった

僕が初めてのギターを手に入れたのは、中学生の終わりか高校生の初めだったと思う。どちらにしても、六〇年代後半だったことに、間違いはない。大森のレコード店兼楽器店で、三千円だった。その数年前の小学生のときに買ったポータブル・プレイヤー――というよりも卓上電蓄といったほうが正しい――も三千円だったので、よく覚えている。

アコースティック・ギターといえば聞こえはいいけれど、ともかく音は出るというぐらいのものだったのだろう。ギターとビニール・ケースと教則本を買った。ピックや調律笛やストラップは、その日にいっしょに買ったのか記憶にない。だけど、チューニングしなかったら、弾けなかったはずだ。

今、ギターを始めるとなったら、まずコードの練習をするだろう。しかし、六〇年代後半の大森のレコード屋で売っていた教則本には、そういうことは書いてなかった。だから、素直に〝さくらさくら〟や〝禁じられた遊び〟なんかをやっていた。これじゃあ、大変だなと思った。

そのうちに、もっと前からギターをやっていた同級生に、コードを覚えればいいと教わった。それで、当時新興楽譜から発売されていたビートルズのソング・ブックを買ってきて、毎日練

CamScannerでスキャン

習するようになった。

数年後に、新しいギターを買った友人に、古いフォーク・ギターを貰った。これは僕のギターよりもいい音がしたのだけど、弦とフレットがやたらと離れていて弾き難かった。

エレキ・ギターを買ったのは、バンドを始めてからだった。たしか、明大前にあった中古楽器店で、日本のメーカーのハニー製のリッケンバッカー・モデルだった。つまり、偽物であって、当時はみんなそうだった。ストラトキャスターでもレス・ポールでも、なんでもあった。

それまではフォーク・ギターで曲を作っていたのだけど、それからは偽リッケンになった。フォーク・ギターでは音が出てしまうので(当たり前だ)、うるさいと言われた。しかし、エレキ・ギターはアンプにつながなければ、それほどでもない。あの偽物のリッケンバッカーで、三十曲は作っただろう。

去年〔二〇一四年〕、三十年ぶりに曲を作ってレコーディングして、またギターが欲しくなってきた。どこかの中古店に、偽物のグレッチかなんかないかな。

『JIMI:栄光への軌跡』という映画が公開された。これはいうまでもなく、ジミ・ヘンドリックスの伝記の劇映画である。

とはいっても、カーティス・ナイトのバック・バンドのギタリストをしていた頃から、イギリスへ行ってジミ・ヘンドリックス・エクスペリエンスを結成して、モンタレー・インターナショナル・ポップ・フェスティヴァルの出演を決めるあたりまでの、二年間のストーリーであ

って、ジョン・リドリー監督はうまいところを切り取った。

ジミヘン役はアウトキャストのアンドレ・ベンジャミンで、びっくりするほど似ている。ギターの弾き方も喋り方も、そっくりといってもいい。

もうひとり、マネージャーでプロデューサーの元アニマルズのベースマン、チャス・チャンドラー役のアンドリュー・バックレーも、よく似ている。僕は会ってインタヴューしたことがあって、こういう落ちついた大柄な人だった。

他にも、もちろんノエル・レディングやミッチ・ミッチェル、エリック・クラプトン、ジャック・ブルース、ジンジャー・ベイカーのクリーム、キース・リチャーズ、ポール・マッカートニーとジョージ・ハリソンなどが出て来て、似ていると思ったほうが楽しめる。

簡単にいうと、ジミヘンがスターになるまでの物語なのだけど、また、その間に付き合った三人の女性の物語でもある。この三人によって、ジミヘンの人生は大きく変わって行く。

キース・リチャーズの恋人だったリンダ・キースは、カーティス・ナイトのステージを見て、バック・ギタリストのジミヘンの才能に気づいて、独立を勧める。ところが、ジミヘンはギターを持っていなくて、カーティス・ナイトのそれを借りているので、辞められないと言う。

すでに、アイズレイ・ブラザーズやリトル・リチャードなどのバック・バンドにもいたのに、ジミヘンは自分のギターを持っていなかったのだ。高校生の僕だって、持っていたのに。

すると、リンダ・キースはキース・リチャーズのギターを持ってきて、ジミヘンに渡してしまう。途中、キース・リチャーズが怒っている場面もあって、これは当然だろう。

その後、ジミヘンはジミー・ジェイムス&ザ・ブルー・フレイムスを結成し、リンダ・キーンはチャス・チャンドラーにそのステージを見せる。そして、ロンドンへ行くことになる。ロンドンでは、キャシー・エッチンガムとイヴという二人の女性と出逢う。この二人も、ジミヘンの人生に大きく作用する。やはり、ジミヘンにはロンドンが似合う。ニューヨークでは、こうはいかなかっただろう。

一九六七年のロンドン、かっこ良かったんだろうな。いたかったなあ。

映画の中でも触れているカーティス・ナイト&ザ・スクワイアーズは、一九六六年にマイナー・レーベルから二枚のシングル・レコードをリリースしている。そのときに、ジミヘンも三年間の契約をしている。

契約金が一ドルでロイヤリティーは一パーセントという、冗談のようなものであって、ジミヘンが形式上のものだろうと思ったとしても、おかしくはない。

しかし、ジミヘンがスターになると、そのレーベルは残っていたセッションのテープから、ジミヘン名義でLPを出す。なおかつ、一九六八年までの契約があると、訴訟を起こす。

この裁判がジミヘンの遺族の勝利で終わったのは二〇〇三年だったというから、ずいぶん時間がかかったものである。その後、遺族のエクスペリエンス・ヘンドリックスがその音源を手に入れて、エディー・クレイマーがリミックスした。

それが、「ユー・キャント・ユーズ・マイ・ネーム/カーティス・ナイト&ザ・スクワイア

CamScannerでスキャン

ーズ・フィーチャーリング・ジミ・ヘンドリックス』である。このタイトルはジミヘンが訴訟を起こした相手に言った言葉で、それがこのアルバムの中でも聴くことが出来る。

内容は六〇年代後半のリズム・アンド・ブルース・テイストで、あの頃の雰囲気がとても楽しい。ほとんどの曲はカーティス・ナイトの作なのだけど、有名なヒット・ソングに酷似している曲が何曲かあるのは、笑ってすましてもいいのだろう、二〇一五年なのだから。

ここにはジミヘンのオリジナル曲もあって、〝ノー・サッチ・アニマル〟はひとりで、〝ノック・ユアセルフ・アウト〟、〝ステーション・ブレイク〟、〝ホーネッツ・ネスト〟はジェリー・サイモンとの共作で、すべてインストルメンタルである。

となると、ジミヘンのギターが鳴り響くわけで、ジミ・ヘンドリックス・エクスペリエンスの匂いがしてくる。『アー・ユー・エクスペリエンスト?』まで、もうすぐである。

最後に業務連絡です。久しぶりにトーク・ライヴを行ないます。水橋春夫さんといっしょです。下北沢のB&Bで、五月十三日の午後八時から十時までです。ワン・ドリンク付きで二千円です。おそらく、これからしばらくは、毎月業務連絡があると思います。

〈二〇一五年六月号〉

CamScannerでスキャン

マーク・ボランは老人にはならない

これは前にも書いたことがあったかも知れないけれど、僕の一日はだいたい決まっている。起きるのは、午前八時半前後である。今迄の自分からしたら、とんでもないことである。だって、八時半に寝るなどということが、おかしくなかったんだから。

ラジオをつけて、「伊集院光とらじおと」を布団の中で三十分ほど聞く。かつては伊集院光のラジオ番組といったら、午前一時からの深夜放送「深夜の馬鹿力」だったのだ。それを聞いたあとに風呂に入って、酒を飲んで寝ていたのだ。変われば変わるものである。

九時あたりから起き出して、ラジオをつけたまま（伊集院の番組は、十一時までやっている）、ごみを出す、そうじをする、洗濯をする、新聞を読む。午前中は、そういった作業で手一杯である。病気をしてからは、以前のようにてきぱきと片づけられなくなった。まあ、六十六歳なんていうのは、こんなものなのかも知れない。

なんとか十二時ぐらいまでには終わらせて、食事の支度をする。つまり、ここまで何も食べていないのだ。口にするのは、コーヒーと煙草ぐらいである。トースト二枚、目玉焼きとソーセージ、キャベツとキュウリ、インスタントのスープ。

そして、十二時半には、食事の用意をして、テーブルに座って、テレビをつける。「やすらぎの郷」である。このドラマを見ながら、食事をする。この十五分の連続ドラマを見るのが、今は日課になっている。

最近は同年代の友人に会うと、このドラマが話題になることがある。「『やすらぎの郷』、見てる？」と言われると、おお同士と思ってしまう。なんといっても昼間のドラマだから、サラリーマンには無理だろう。僕と同じようにフリーで仕事をしている人達が、ほとんどである。

脚本は、倉本聰である。かつて芸能界で働いていた人達の、老人ホームの話だ。俳優、歌手、脚本家、音楽家などが、住人である。出演者は、石坂浩二、ミッキー・カーチス、山本圭、八千草薫、浅丘ルリ子、加賀まりこが中心になっている。

簡単に言ってしまうと、ショー・ビジネスのバック・ステージものということになる。年齢が年齢だけに、ドラマの中では、出演者が認知症になったり、亡くなったりする。現実には野際陽子は数か月前に亡くなっているのだけど、まだ出演している。いったい、いつ収録したのだろう。

思えば、「北の国から」でも、黒板五郎の老後というのは、かなり淋しいものであった。実際に、田中邦衛は病気で、今施設に入っているという。だから、僕達のような老人は、見逃せないのだ。自分のこととして、考えてしまうのである。

僕が今のところに住み始めて、もうすぐ五年になる。何度か書いているように、ここは丘の上だから、外出したら帰って来るのに苦労する。だから、引っ越しをしようと考えていて、し

CamScannerでスキャン

かし六十六歳で簡単に新しい部屋に住めるのだろうかと思ってしまう。どうだろう。

いざというときのことを思って、あまり遠くには行かないでよと子供達にも言われている。次に住むところが最後になるだろうから、考えてはある。だいたい、山の手線の内側なんか行くのは、もはや年に数回になっている。論外である。

よく言われているように、東京では三代住まなければ、江戸っ子とはいわないという。僕は東京で三代目だから、江戸っ子といってもいいのだろうけれど、そういうのはかっこ悪いと思っていて、馬鹿にしている。逆に、横浜では、三日住めばハマっ子というらしい。かっこいいじゃない。

なんか話がずれてしまったのだけど、このドラマで面白いことのひとつに、ときどきテーマ・ソングを歌っている中島みゆきが車椅子を押して、画面を横切ることがある。そして、車椅子に座っている老人が、俯き気味で顔がよく見えないのだけど、倉本聰だという。

つまり、作っている人間が、面白がっているのだ。それはキャスティングにもあって、石坂浩二が初めてこの施設に来たときに、久しぶりと言って抱きつく女性がいて、それが浅丘ルリ子なのだ。いうまでもなく、かつてこの二人は夫婦だったのだ。そういうのが、このドラマにはたくさんあるらしい。

この番組を見終わったところから、僕の一日は始まる。原稿を書いたり、調べものをしたり、病院に行ったり、買物に行ったりする。この番組がいつまで続くのかは分からないけれど、脚本はもう木になっている。なるべく、長く続いてもらいたい。

しかし、老人ホームのドラマを毎日見るなんて、思ってもいなかったな。

マーク・ボランは一九七七年九月十六日に、自動車事故で亡くなった。誕生日は一九四七年九月三十日だから、三十歳になる二週間前ということになる。

ジム・モリスン、ジミ・ヘンドリックス、ブライアン・ジョーンズ、ジャニス・ジョプリンは二十七歳で死んでいて、マーク・ボランも二十九歳でほとんどいっしょである。かついていっしょにグラムを牽引していたデヴィッド・ボウイが去年〔二〇一六年〕亡くなったことを思うと、あまりにも早い。早過ぎる。

運転していた夫人が事故を起こして、本人は助かったのに、マーク・ボランが死んだのは、なにか割り切れないものがあった。しかし、一番辛いのは夫人であることを思うと、そんなことは言えない。

一九七七年というと、ボウイはまだ『ロウ』の頃である。それ以後素晴らしい作品やくだらない作品をたくさん作ったわけで、マーク・ボランもそういうレコードを作れただろうに残念である。

今年はマーク・ボランの生誕七〇周年で没後四〇周年にあたるわけで、T・レックスのアルバムが再発売される。レーベルの関係で、七枚目の『ザ・スライダー』から十二枚目でラストの『地下世界のダンディー』までということになる。

それにともなって、新しくベスト盤『BEST OF T.REXXXXXXX』も選曲された。選曲し

たのは元マルコシアス・バンプのアキマツネオで、かなりマニアックであり、二十二曲で七十三分以上というのは、かなりのものである。

先月、「レコード棚いっぱいの名盤から」で、キンクスがパンクスに支持されたと書いたのだけど、何故かマーク・ボランも支持された。人気に陰りが生じていた頃だから、マーク・ボランは珍しく喜びをあらわにして曲まで書いた。

〝メタル・グルー〟、〝テレグラム・サム〟、〝トウェンティー・センチュリー・ボーイ〟、〝ライト・オブ・ラヴ〟などの名曲にまじって、収録されている〝セレブレイト・サマー〟がそれである。嬉しかったんだろうな。

もう少し、そういった情況で活動させてあげたかった。これだけの人なのだから、もっと名曲を残せただろう。

しかし、ここで終わったから、マーク・ボランは永遠の二十九歳でいられるのかも知れない。

〈二〇一七年十月号〉

ボブ・ディランのある季節

「レコード棚いっぱいの名盤から」でも書いたとおりに、九月の二十日ぐらいから風邪をひいた。実は、そこらへんは警戒していたのだ。去年のこの頃に、倒れて入院したからだ。十月九日……ジョン・レノンの誕生日だから、忘れようったって忘れられない。

（ポール・マッカートニーが六月十八日、ジョージ・ハリソンが二月二十五日、リンゴ・スターが七月七日。これは中学生のときに覚えて、今でも忘れていない）

今では三か月に一度病院へ行けばいいのだけど、薬は毎日飲んでいる。しかし、一年前に倒れた日が近いというのに、臥せっているというのは、どうも気分が良くない。それでも、十月九日になる前には、なんとか治っていた。そんな日は、布団に入っていたくない。

十月九日の当日には、一歩も外に出ないでうちの中でおとなしくしていた。十七歳のときには考えもしなかった六十六歳になったけれど、もう少しなんとかしたい。単行本を九冊出しているから、なんとか十冊にはしたい。出来るかな。

字を書くのだけは、一生懸命にリハビリをしたからなんとかなっている。それでも、前よりもずっと汚ないだろう。何度も、書き直している。長年使っていた「ロッキング・オン」の原

稿用紙では桝目が小さくて、もうひとまわり大きいのを使っている。

字を書くのに懸命になりすぎて、他のリハビリを怠っていたから、その結果は明白で、歩いていてもよれたりする。ようやく、今、少し運動をしようかという気になってる。だけど、何が出来るだろう。まずは、ラジオ体操かな。

信号が黄色になって、あわてて走って、あっ走れたと、びっくりしている。数か月前には、黄色になったら戻っていたのだ。走ってみようじゃないの。だけど、横断歩道が精いっぱいかな。

風邪が治ったとき、二週間放っておいた髭を剃った。そうだ。去年も病院で二週間放っておいた髭を、うちに帰って来て剃ったのだった。それが十月二十六日だったというのを覚えているのは、どうなんだろう。

ボブ・ディランのブートレッグ・シリーズ第十三集は、一九七九年から一九八一年までの『トラブル・ノー・モア』である。これはまた、微妙な時期である。こういうものを平気で出すのが、ボブ・ディランである。けっして、楽しい季節ではないと思うんだけど。

ボブ・ディランはユダヤ人であって、子供の頃からユダヤ教であった。ところが、一九七九年にキリスト教に改宗した。その頃のエピソードに、コンサートで観客がステージに投げた十字架を拾って、ホテルの部屋で触れたら、神の啓示を受けたというものがある。また、一晩、イエス・キリストと過ごしたというものもある。

こういう感覚は、今の日本人にはほとんど分からないだろう。熱心な宗教の信者以外には、分からない。なんといっても、日本には八百万の神がいると、いわれているのだ。なおかつ、台所の神様もいれば、トイレの神様もいるのだ。

それこそ、八百万だから、今使っている鉛筆や原稿用紙の神様だっているかも知れない。文章の神様だって、いるかも知れない。そういう神社があったら、御参りするべきだろう。御賽銭を入れたら、お前のはいらないと賽銭箱から投げ返されたりして。

そういうわけで、ディランはゴスペルになってしまった。それまで『血の轍』（一九七五年）や『欲望』（一九七六年）という名作を聴いていた人達は、みんなびっくりぎょうてんである。

その三部作というのが、『スロー・トレイン・カミング』（一九七九年）、『セイヴド』（一九八〇年）、『ショット・オブ・ラヴ』（一九八一年）である。この三枚に、ファンは途惑った。

前記のように『血の轍』や『欲望』などで夢中になったファンは、だんだんに離れていった。そのせいもあったのか、ディランのキリスト教信仰はそれまでのように大っぴらなものではなくなっていった。それ以前のようなスタイルに、戻っていった。すると、それとともに、ファンも戻ってきた。

というように、このときはディランにとっては、あまり良い思い出ではないはずだ。それをブートレッグ・シリーズで出しちゃうんだから、さすがはボブ・ディランである。

デラックス・エディションが、CD八枚とDVD一枚で三万円。スタンダード・エディションが、CD二枚で三千六百円。スタンダード・エディションの二枚は、デラックス・エディシ

ミンの一枚目と二枚目である。これはこの時期の、ライヴである。

びっくりするのは、ディランの声が力強いことである。やはり、信じるものがある人は、こうなるのだろうか。正に、神がかっている。弱いところが、一切ない。

それにしても、このキリスト教問題は、どうしたのだろう。やはり、ユダヤ教に戻ったというようなニュースを聞いたことがあったと思うのだけど。それでも、こういうCDを出すのだ。まあ、ボブ・ディランだから、分からなくてもしょうがない。だけど、ディランと同じようなビッグ・ネームは、神様をどう考えているのだろう。ポール・マッカートニー、ミック・ジャガー、ブライアン・ウィルソンなどは、神様について触れない。ピート・タウンゼントやカルロス・サンタナは、若き日には神様がいた。今はどうなのだろうか。

僕の家にも、キリスト教の勧誘がやって来る。日曜日の午前中、ぼうっとテレビを見ていると、ピンポンと鳴る。（あれはなんと言うのか分からないけれど）室内電話で「どなた様ですか？」と言っても、返事はない。ドアを開けると、おばさんが三人ぐらいいてキリスト教の勧誘をする。

ずるい。ずるい。ずるいじゃないか。そこで、僕も考えた。これで、一発だ。僕も親の命日ぐらいには、墓参りに行く。だから、おばさん達がやって来たら、言ってやる。「私は浄土真宗ですから」と。

〈二〇一七年十二月号〉

僕だって、治ったんだ

ずっと気になっている疑問が、ひとつある。いや、疑問はいくつもあって、その中のひとつに過ぎないと言ったほうがいいだろう。歳をとればとるほど分からないことが多くなるというのは、人間は馬鹿になっていくのだろうか。しかし、それを口に出して言っても、相手にされない可能性が大きいので、黙っていたのだ。

地球には毎年数万トンの宇宙の塵が落ちてきているという。これって、凄くない。数万トンだよ、数万トン。ということは、十年で数十万トンになる。百年で数百万トンということになる。なんだか分からないけれど、凄い量だ。

まず、そんなことを感じたことがあるだろうか。地球の大部分を覆っている海に落ちた場合は、まあ分からない。しかし、海底に沈んで溜まる。すると、海面は上昇するのだろうか。いつか海面が上昇して、陸地が少なくなってしまうのだろうか。しかし、これは分かる。

塵は地上にも落ちてきているから、陸地も高くなっているのだ。では、陸地に落ちてきた塵は、どうなっているのだろうか。とりあえず、人間が住んでいる町や村は、あまり影響はないだろう。人間や自動車が動いているから、掃除をしているようなものだろう。

CamScannerでスキャン

すると、あまり人や自動車が行かない地域はどうなのだろう、降り積もっているのだろうか。数年前に、エベレストを計測したら、数センチ高くなっていたというニュースを聞いたことがある。これは前回計測していた数字が間違っていたということで片づけられていたのだけど、そうではないだろう。前回の計測も、正しかったのだ。それから今日までに、宇宙の塵が溜まったのだ。

どうしてこういうことを考え始めたのかというと、何故遺跡は発掘されるのだろうと疑問に思ったからだ。たとえば、工事で発掘したら、室町時代の遺跡が出てきたなどというニュースを、ときどき聞く。

日本史の年表を見ると、今から千年前は平安時代で「枕草子」や「源氏物語」が書かれたとある。その頃地表にあったものは、たとえば一メートルぐらい地下に埋まっているのだろうか。地下は遺跡だらけなのだろうか。どうなのだろう。

ということは、地球はだんだん大きくなっているのだろうか。夜酒を飲みながらそういうことを考えていると、すべてが分からなくなる。たとえば、僕は生きたとしても、あと五年か十年だろう。五十年経ったら、自分の子供達も七十歳八十歳になる。

今四～五歳の孫も、けっこうな歳になる。彼等は僕が本やレコードを作っていたことなど、それほど興味はない。孫でそうなのだから、他人にはまったくどうでもいい話だ。となると、僕の本やレコードはなかったのと同じになってしまう。

空しい。まあみんなそんなものだと思えば、気は楽になる。宇宙のことを考えると、あまり

CamScannerでスキャン

のちっぽけさにそうなってしまう。そうなるから、やっぱり分からない疑問は口に出さないほうがいいだろう。

チープ・トリックの『グレイテスト・ヒッツ－ジャパニーズ・シングル・コレクション－』が発表される。

一枚目はソニーから発表されたシングルのA面全曲で、二十曲収録されている（ボーナス・トラックが一曲あって、全二十一曲になる）。二枚目はDVDで、ビデオ・クリップが十八曲収録されている（これは十五曲が日本では初めてのDVD化という、珍しいものである）。

この四月にチープ・トリックが来日して、日本武道館でコンサートを行なうということで、あの一九七八年の来日からちょうど四十年経つという、来日記念盤である。前にも書いたけれど、僕はこのコンサートに行ったのかどうか分からない。翌一九七九年にも来日しているから、それとごっちゃになってしまっている。四十年経つと、そういうことにもなる。

自慢ではないのだけど、僕は自分が書いた原稿は、細部まで覚えていた、十年ぐらいは。それが二十年三十年と経ったら、分からなくなってしまった。四十五年経った今は、力強く分からないと言い切れる。そんなもの、言い切らなくてもいいけれど。

調べものがあって、たしかあの本に入っていたなと、自分のものを読むと、覚えのない文章がある。読んでみると面白くて、たいしたものだと思う。自分の本を読んで感心する人には、あまり頭のいい人はいないだろうな。黙っていたほうがいい。

CamScannerでスキャン

チープ・トリックは十年前にも、日本武道館で初来日三〇周年記念のコンサートを行なった。それから、もう十年経ったのだ。あのときは一時間十五分ぐらいの短いコンサートで、ソニーの担当者に訊ねたら、バン・E・カルロスが腰を痛めていて、それ以上座っていられないということだった。ドラマーが替わったから、そこは大丈夫だろう。

と思っていたら、リック・ニールセンの体調不良ということで、来日は延期になってしまった。

ということで、今リック・ニールセンの年齢を調べようと、三十分ぐらい本やCDにあたったけれど、見事に分からなかった。分かったのは、十二月二十二日という誕生日だけだった〔現在、ネットでは一九四六年生まれが定着〕。

ロビン・ザンダーが一九五五年〔一九五三年、一九五二年とするサイトも〕一月二十三日生まれ、トム・ピーターソンが一九五〇年〔一九五一年としているサイトもある〕五月九日生まれ。バン・E・カルロスも六月十二日生まれだとしか分からなかった。

今迄にインタヴューしたことや記者会見で会ったこともあって、リック・ニールセンは少なくとも僕よりも歳上には見えた。ということは、六〇代後半から七〇代前半ということになる。それでもチープ・トリックはコンサート回数が多いので有名だから、毎晩ギターを弾いているのだろう。頭が下がる。

とりあえず、ディスクを聴こう。こうやって集中してチープ・トリックを聴くのは、久しぶりだ。CDも後半になると忘れていたものも多く、逆に新鮮に聴くことができた。これだ、こ

CamScannerでスキャン

れがチープ・トリックだ。

ビデオ・クリップはほとんど初めて見るもので、面白かった。これで見る限りリック・ニールセンはちっとも変わっていないのだけど、やはり人間の年齢はしょうがないのだろう。治るのを、待っているよ。日本武道館でね。

〈二〇一八年五月号〉

CamScannerでスキャン

鮮やかな静寂

国立科学博物館が、縄文時代の女性の顔を復元して発表した。これは一九八九年に北海道礼文島の船泊遺跡から出土した、約三千八百年前の四〇代の女性の頭蓋骨から判明したのだという。

その歯のDNAからゲノム情報を解析して、作ったらしい。基本的に、〇・二グラムの臼歯からだそうだ。いいですか、〇・二グラムですよ。それで、顔が全部分かっちゃったんですよ。

その写真を見た瞬間、僕は「あっ、知ってる人だ」と思った。よく考えたら、ビートたけしだった。やっぱり、たけしは日本人のルーツなんだ。そういう人からお金を取ろうなんていうのは、駄目だろう。

この女性は身長が百五十センチぐらいだと、考えられている。この時代は、男性も百五十五センチぐらいだったようだ。平均寿命は、十五歳ぐらいだったという。ということは、この女性は四〇代だから、とてつもない高齢者ということになる。

それにしても、歯の欠片〇・二グラムで、こんなことも分かっちゃうのだ。上野の西郷隆盛の銅像なんか、家族でさえ似てないと言っている。お墓からほんの欠片でも提供してもらえば、

CamScannerでスキャン

本当の顔が分かるだろう。ほんのちょびっとでいいんだけど。
同じように、織田信長も豊臣秀吉も徳川家康も、顔が明らかになる。あっ、信長は骨はないか。かつて僕達が学校で習った歴史上の人物は、今では違うということになっている。これも骨さえあれば、解明出来る。
僕は自分の祖父祖母までしか、顔を知らない。ほとんどの人は、そうだろう。しかし、お墓にはもっと前の人の遺骨も入っているらしい。いくらでも提供するから、顔を明らかにしてくれないかな。まあ、こんな一般人の顔なんか、復元してもしょうがないか。そりゃそうだ。
二月には、イギリスの自然史博物館が、洞窟で見つけた中石器時代の化石を分析したそうだ。すると、目は青く肌は褐色だったということになり、騒ぎになったようだ。つまり、黒人だったのだ。人類はアフリカから始まったのだから、おかしくはない。
この縄文時代の女性は、アルコール分解酵素も持っていたという。ということは、この人は酒を呑んでいたのかな。三千八百年前の酒って、どんなもんだったのだろう。ちょっと呑んでみたいな。
国立科学博物館には、忘れた頃に行く。もう十年以上は、行ってないだろう。この前行ったときには、恐竜が動いていてびっくりした。そろそろ、また行こうかな。この三千八百年前の女性もいるから。まあ、半日は飽きないで過ごせる。

近藤智洋が、三年ぶりにニュー・アルバムを発表した。それが三千八百年前の女の人とどう

いう関係があるのかというと、まったく関係はない。最初にこの女性のことを書こうとしていたら、突然「五月一日にリリースです」と言って来たのだ。それで、あわてて、こういうことになってしまった。

とりあえず、四月に下北沢でレコ発のライヴがあったから、行って来た。正直に言うと、一年半前に病気になってから、ライヴを見たのはポール・マッカートニーとこの日の近藤だけである。

最近の近藤のライヴは、妙な機材を使っている。たとえば、ステージで最初に十六小節、ギター・コードを弾く。すると、それがそのまま、いつまでも流れる。そこに、アルペジオで、重ねるギターふたつの音が、ずっと流れる。次に、バック・コーラスをつける。そこに、ハーモニーをつける。続いて、パーカッションもやる。それから、おもむろに歌い始める。分かったような、分からないような説明だな。

これがルーパーという機材で、ここ数年近藤はこれを使っている。つまり、ひとりでも、何人かでやっているような音になるのだ。どうなっているのかと訊くのもしゃくにさわるので、僕はそんなのとっくに知っていたというような顔をしている。使い方なんか、分からないけどさ。

この日もこれを使って、ニュー・アルバムを全曲やった。もちろん、それ以外にもやって、二時間半ぐらいのライヴだった。

ニュー・アルバムの『塔』は、そういうスタイルから思いついたのだろう。ヴォーカルも楽

器も、全部ひとりでやっている。アコースティック・ギター、エレクトリック・ギター、ベース、キーボード、パーカッション、口笛……。パーカッションだと思っていたのは、スーツケースを叩いていたのだとあとから知らされた。

こういうようなサウンドになると、当然曲も詩も立って来る。しみじみと、聴くことが出来る。近藤はヘッドフォーンで聴いてくれと言っていたけれど、今持ってないんだよね。普通に聴いたって、大丈夫だよ。

ここでは、一曲ずつの論評は避けたい。アルバム一枚として、聴いたほうがいいだろう。パーソナルなようだけど、しっとりとしみて来る。近藤は嫌がるかも知れないけれど、ニック・ドレイクを思い出してしまった。

そういえば、僕が最後にステージで歌ったのは近藤といっしょで、病気になる数か月前だった。今はそんなことは考えられないわけで、ひょっとしたらあれが僕のラスト・ライヴになるのかも知れない。

それとも、また歌えるようになるのだろうか。

〈二〇一八年六月号〉

CamScannerでスキャン

七十五歳の不死身の男

近所を歩いていると、今あっちこっちで家を建て直しているのが分かる。おそらく、二～三年前からだろう。一軒の家が取り壊されたと思ったら、そこに新しく二軒の家が建てられたりする。ここらへんの家はだいたい庭があるから、それを潰すと二軒建てられることになる。

気づかなかったのだけど、けっこう広い庭だったんだ。二軒どころかマンションが建てられて、びっくりしたこともあった。近道に使っていた空き地が通れなくなったと思ったら、工事が始まった。しばらくしてその前の道を行ったら、家が六軒も建っていた。

ここらへんは何十年か前は陸の孤島で、バスが通る前は買い物に行くのも大変だったと近所の人に聞いたことがあった。おそらく、何十年か前に開発されて、交通の便が悪くても、みんな住み始めたのだろう。今はバスが通って交通の便は良くなったけれど、家も人も疲弊してきたのだろう。なんとなく、それで固まってしまったような気がする。

前にも書いたのだけど、ここは丘の上であって、駅に下っていくのはたやすくて、上って来るのは辛い。どうも、この沿線は、みんなそうみたいだ。真ん中を線路が走っていて、左右は急激に高くなっている。ここらへんは、みんなそうなっているみたいだ。

子供の頃からずっと、僕は平地に住んできた。十分も歩けば、最寄りの駅に着くというところに住んできた。それで、どうしてこういうところに住んでしまったのだろうか。自分で理解に苦しむね。

だから、引っ越しをすることは、前から考えていた。ひとつ思っていた地域があって、見に行こうと予定もしていた。しかし、新聞に衝撃的なことが載っていた。地震が起きたら、そこには五メートルの津波が襲ってくるのだそうだ（僕は泳げない）。

六〇年代後期のローリング・ストーンズは、お金に苦労していた。なんと、住むところに苦労していたメンバーもいたという。その頃のストーンズといったらヒット・レコードを作り続けていて、お金に不自由などしていたとはとても思えない。原因は……悪名高きマネージャー、アラン・クレインである。

最初のストーンズのマネージャーは、アンドリュー・ルーグ・オールダムだった。アンドリューは元々ビートルズのマネージャーのブライアン・エプスタインの下で働いていたのだけれど、自分もビートルズのようなバンドのマネージャーになって金儲けをして有名になりたいと思ったのだ。

しかし、いいバンドはなかなかいない。すると、ジョージ・ハリソンにローリング・ストーンズというバンドがいるよと言われて、見に行ってすぐに契約した。次に、どこのレコード会社に行けばいいのか悩んだ。またもや、ジョージにデッカ・レコードのディック・ロウの

CamScannerでスキャン

ところに行けばいいと言われた。

ディック・ロウはオーディションでビートルズを落としたという男だった。その後、パーロフォンのジョージ・マーティンが、ビートルズをスーパースターにしたのは、言うまでもない。そのため、ディック・ロウはバンドを見る目がないと、業界中の笑い者になっていた。そこにジョージ〔・ハリソン〕の紹介というのだから、ディック・ロウはすぐにストーンズと契約した。

こうなるというと、どうしてジョージ〔・マーティン〕はストーンズのマネージャーをやらなかったのか不思議になってくる。ストーンズの二枚目のシングル曲に困っていたとき、偶然逢ったジョン・レノンとポール・マッカートニーがスタジオに来て、その場で〝アイ・ウォナ・ビー・ユア・マン〟を作ったというのは、有名なエピソードだろう。

そのままストーンズのマネージャーをやっていれば良かったのに、アンドリューにはプロデューサー志向もあったようだ。実際に、初期のストーンズのレコードには、アンドリューの名がプロデューサーとしてクレジットされている（キースはそこにいただけだと言っている）。

そこに目をつけて近づいて来たのが、アラン・クレインだった。君はプロデューサーをやっていなさいよと言って、一九六五年にストーンズの共同マネージャーになった。そして、一九六七年にはアンドリューを追い出して、自分だけがマネージャーになった。それから、ストーンズを牛耳るようになった。

それまでのようにお金が入ってこないから、これはおかしいとストーンズが思っても、アラ

ン・クレインの契約からは、逃げられなかった。結局、なんとか手を切れたのは、一九七〇年だった。しかし、それまでのデッカの音源は、アラン・クレインの自由になってしまった。ストーンズはデッカとも契約を打ち切った。

その後、アラン・クレインがビートルズを狙っていると聞いて、わざわざミックはジョンのところにあいつはやめろと言いに行った。すると、ジョンのところにはすでにアラン・クレインがいたので、ミックは黙って帰って来るしかなかった。

レコードでいうと、『レット・イット・ブリード』（一九六九年）までがデッカでアラン・クレインで、『スティッキー・フィンガーズ』（一九七一年）からがローリング・ストーンズ・レーベルである。

だから、ストーンズがベスト・アルバムを作るときは、それがデッカ・レコード時代のものも含んでいるか否かは重要である。つまり、デッカも含んでいると、わりと選曲も投げ槍なんだよね。

二〇一二年の『GRRR!』は、半分ぐらいの曲がデッカなのに、まじめに選曲していて、僕はびっくりしてしまったぐらいだ。やはり、結成五〇周年記念となると、まじめに選曲するのだろうか。

『GRRR!』から七年、ローリング・ストーンズの新しいベスト・アルバム『ホンク』が発表された。これはローリング・ストーンズ・レーベルのみの選曲である。だから、しっかりと

選曲してある。とはいっても、『GRRR!』のあとは『ブルー&ロンサム』だけだから、少し寂しい。

と思ったら、さすがに考えている。CDは三枚組で、最初の二枚がベストになっている(二枚だけのものもある)。そして、三枚目がライヴなのである。これが二〇一三年から二〇一八年までのものなのだ。〝ひとりぼっちの世界〟や〝アンダー・マイ・サム〟や〝夜をぶっとばせ〟や〝シーズ・ア・レインボー〟などもある。考えたな。

最初の二枚のベスト・アルバムも、全三十六曲もあるからかなり印象が違う。『GRRR!』のときはローリング・ストーンズ・レーベルのものは二十五曲しかなかったから、かなり満足出来るヴォリュームだ。しかし、僕が大好きな〝メモリー・モーテル〟は、またもや入っていない。二〇二二年は結成六〇周年だから、きっと六十曲のベスト・アルバムが出るだろうから、それに期待したい。

なお、この発売と同時に、ストーンズは四月二十日からアメリカ・ツアーを始める予定だったのだけど、ニュー・ヨークでミックが倒れて四月四日に心臓の手術をしたので、ツアーはキャンセルになった。いや、死なないでしょ、ミックは。

〈二〇一九年六月号〉

ただ空があるだけ

来年［二〇二〇年］の東京オリンピックパラリンピックが現実的になってきて、チケットを入手するのが大変だということがやたらと言われている。申し込みはパソコンかスマホかということなので、現在どちらも持っていない人間は勝手にやってくれとふてくされるしかない。しかし、数年前に病気になったときには、オリンピックなんて興味の埒外だったのだから、それを考えることが出来るのは、良かったのかも知れない。まだ一年あるから、別の世界に行かないように気をつけたい。

こういう入手困難なチケットというと、どうしても一九六六年のビートルズ日本公演を思い出してしまう。日本武道館で五回の公演で計五万人の観客だったということになっているけれど、そんなことはない。

何度も書いているとおり、武道館の一階には観客を入れなかったのだから、多くても一回五千人ぐらいだろう。観客が暴れるからという理由でそういうことになったそうで、今でも僕はあのときの警察を恨んでいる（いつ暴れたよ。えっ！）。

ビートルズのチケットを入手するのは、まず往復葉書で申し込まなければならない。抽選で

当たったら棄書が戻ってきて、それを持ってプレイガイドに買いに行く（今回のオリンピックと似ている）。
　僕は十枚ぐらい出して、全部外れた。しかし、同級生の同じビートルズ・ファンが二枚当たったからといって、一枚譲ってくれた。A席が二千百円だったから、当時の中学生には高価だったのだ。今でいうと、三万円ぐらいの感覚だろう。
　それはそれとして、前回の東京オリンピックは一九六四年だった。つまり、僕は中学一年生でオリンピックを見て、中学三年生でビートルズを見たということになる。しかし、オリンピックのことは、なにも覚えていない。ビートルズのことは、忘れたことがない。
　学校で国立競技場に連れて行かれたのは、覚えている。おそらく、東京都の小学生中学生は、一度はなんらかの競技を見られるようになっていたのではないだろうか（見に行っても、しょうがなかった……）。
　一九六四年に見たオリンピックは、さっきも書いたようになにも覚えていない。たくさんの陸上競技をやっていたはずなのに。覚えているのは、国立競技場の最上部の通路を（つまり、もっとも外周に近い通路だ）、みんなで一周駆けっこしたことである。世界の一流選手が競技しているというのに、我々はそれを見ないで遊んでいたのである。
　はっきり、言おう。男子中学生というのは、馬鹿である。男の人生の中で一番馬鹿なのは、間違いなく中学生時代である。それが小学生であっても高校生であっても、オリンピックに行ったら競技を見たはずだ。

中学校の修学旅行を思い出しても、馬鹿だった。当然、京都奈良へ行ったのだけど、なにも覚えていない。覚えているのは、宿で夜中に枕投げをしたことである。それと、部屋に入った途端に、鴨居にぶら下がって壊して、あわててばれないようにしたことだ（今、その宿舎の名前を思い出した。本能寺会館である。申し訳ない。信長様……）。

だいたい、人生の中でもっとも馬鹿な時期の中学生に、神社仏閣を見せてどうしようというのだ。僕達の学年には、本当に京都でお土産に木刀を買った奴がいたんだから。

たとえば、夕方自由行動が終わって、グループで宿へ向かっていたとき、向こうから同じような集団がやって来て、それを見て「生意気だな、あいつら」と誰かが言う。この発言にはなんの根拠もないのに、誰もそれに異を唱えない。

もう暗くなっていて、顔も見えないというのに、どこが生意気だというのか、分からない。ただ、修学旅行で他校の生徒と遭遇したら、一悶着起こすようにと馬鹿な中学生の辞書には載っているのだ。

どうやら、向こうのグループも、同じような雰囲気になっているらしい。馬鹿だから、しょうがない（ここ、大事だよ。テストに出るよ）。不穏な空気の中、距離が近づいてくる。おたがいの顔が見えるようになったとき、我々のグループもあちらのグループも同じことを言った。

「なんだ、お前達か」と。

隣のクラスの奴等だったのだ。馬鹿である。ビートルズに夢中になった以外に、中学生のときに誇れるものはなにもない。三年間で終わって、心から良かったと思う。

CamScannerでスキャン

ジョン・レノン&オノ・ヨーコ『アパーツ・アス・オンリー・スカイ』というDVDが九月十一日に発売される。『アパーツ・アス・オンリー・スカイ』というのは〝イマジン〟の一節で、「僕達の頭上には、ただ空があるだけ」というものだ。

これは『イマジン』のレコーディングの模様を記録したもので、オリジナルは『イマジン　ザ・フィルム』という題名で発表されている。

そして、『イマジン　ザ・フィルム』と、それを再編集した『ギミ・サム・トゥルース』の、二作をいっしょにしたDVDが、六月リリースされている。

『イマジン　ザ・フィルム』も『ギミ・サム・トゥルース』も、いつ発表されたのかは調べても分からなかった。少なくとも、七〇年代にはビデオ・デッキというものはなかったし、当然DVDプレーヤーもなかった。

いつのまにか見ていたと言うしかないだろう。実際に、この二作のビデオもDVDも、僕は持っていなかった（ここ、大事だよ。テストに出るよ）。

その二作のDVDが発売されて一年で、同じ素材でまた別の作品を作るというのはどういうことなのだろう。ちなみに、『イマジン　ザ・フィルム』の監督は特に表記されていなくて（ジョンとヨーコということだろうか）、『ギミ・サム・トゥルース』はアンドリュー・ソルト、そして『アパーツ・アス・オンリー・スカイ』はマイケル・エプスタインである。

『アパーツ・アス・オンリー・スカイ』を見ていて、ひとつ気がついたことがある。それまで

CamScannerでスキャン

あまり発表されていなかったシーンがけっこうあって（苦しい言い方だな）、それは六年発売された写真集の『イマジン ジョン&ヨーコ』で初めて見たものだった。

前にも書いたけれど、この本の監修は僕がやっている。この本に載っている写真が、『アパーツ・アス・オンリー・スカイ』で実際に動いているのである。

ということは、書物『イマジン ジョン&ヨーコ』とDVD『アパーツ・アス・オンリー・スカイ』は同時に発表されるべきものだったのではないだろうか。しかし、『アパーツ・アス・オンリー・スカイ』の完成が遅れてしまったのかも知れない。

ここらへん、僕の推測だから、あまり人に言わないように。とりあえず『イマジン ザ・フィルム』も『ギミ・サム・トゥルース』も見たことがない人にとっては、この『アパーツ・アス・オンリー・スカイ』は最適だろう。ジョンがどうやってレコーディングしていたのかが、よく分かる。『イマジン ザ・フィルム』も『ギミ・サム・トゥルース』も持っているというオールド・ファンは……四千五百円諦めて買おう。

（二〇一九年十月号）

火事と学校とフー

二軒先の家で、火事があった。

昼の二時半ぐらいに大きな音がして、窓から外を見たら近所の人達があわてている。突然、テレビが消えた。外へ出てみたら、凄い煙で大きな焔が出ている。その家のおばあちゃんもいたから、無事だったのだろう。

誰かが「もう電話はしたから」と言っている。あまりにも、近い。一瞬、先月号に書いたように、避難するときに持っていくCDと本を選ばなければと思った。電線が燃えているから、そうかこれでテレビが消えたのかと分かった。

消防車が何台もやって来て、大変な騒ぎになった。消火の邪魔になるといけないから、みんな自分の家の前に立って様子をうかがうしかない。三十分ぐらい経ってから家に入ると、当然電気がつかないから暗くて寒い。どうしたらいいんだろう。

十五分おきぐらいに、家を出たり入ったりした。どうやら鎮火のほうにいっているようだとなったのは、二時間ぐらい経ってからだった。どうしようもないから、窓の近くに行って読みかけの本を開いた。『ゴジラの超常識』という本で、こういうときに町を火の海にする奴の本

をどうして僕は読んでいるのだろう。

窓から電線を直しているのが見えた。その三十分後ぐらいに、電気がついた。電気とエアコンはついたのだけど、テレビはつかないし電話もツーという音はしない。結局、電話もテレビも使えないまま、この原稿を書いている。

だいたい、僕は何を書こうとしていたのだろう。忘れてしまった。

翌日、昼ぐらいになって、テレビは使えなくてもいいなと思った。ニュースは新聞を読めばいい。今は野球も相撲もやってない。あれは惰性だったのだ。しかし、電話はそうはいかない。おそらく、「ロッキング・オン」の編集部も、締め切りが近いのに連絡がつかなくなって、困っているだろう。

歩いて十分ぐらいのところにあるコンビニに行って、何本か電話をした。コンビニから帰って三十分後ぐらいに、電話が通じた。すぐに、ディスク・レヴューの原稿を、「ロッキング・オン」に送った（コンビニのファックスは、僕は必ず失敗するので）。テレビの件は、どうしようか考えている。

電話が通じたと思ったら、三年に一度ぐらいしか連絡をとらない中学校の同級生から電話がかかってきた。昨日ずっと電話をかけていたのに通じなかったぞと言うので、火事の説明を十分以上に渡ってしてした。

書くつもりだったことを、思い出した。

久しぶりに、大学で講義のようなものをやった。だいたい、十年に一度ほどやっている。専門学校の先生を、一年間やったこともある。若い頃は大学祭に呼ばれて行ったこともあったけれど、実行委員があまりにも失礼だったのでもう行かないことにした。

テーマは「六〇年代後半から七〇年代前半のロックと世界」というものなので、引き受けた。心配だったのは、病気をしてから初めてだったので、ちゃんと喋れるかどうかということだった。

何度も書いているように、歩くのが辛いし話すのが辛い。よれよれのような気がする。しかし、僕を呼んでくれた先生に会って話をしたら、問題はないと言う。自分で思っているよりも、大丈夫なのかもしれない。

前日にひとりで一時間半ぐらい喋って、予行演習をした。当日、何十年ぶりかに、何度か行ったことのある大学のある駅に行った。すると、その駅が信じられないぐらいに大きくなっていて、びっくりしてしまった。あとから訊いたら、十年ぐらい前に駅ビルが出来て、町はすっかり変わってしまったそうだ。

そうだよな、この前来たときは駅のまわりはこんなににぎやかではなかった。それはある作家を偲ぶ会だったのだけど、二十人ほどでテレビがついている居酒屋に行った。みんな同人誌の文学青年のようなことばかり言うので、僕は間違ったところに来ちゃったと思わざるをえなかった。ずっと黙って、酒を飲んでいた。

しかし、大学生がいっぱい歩いている町というのはいい。食べ物屋や居酒屋も、たくさんあ

る。ところどころに不動産屋があるので、気になって案内を見てしまう。学校内にも立て看などひとつもなく、みんな屈託のない表情をしている。

一時間半の授業は、あっというまに終わった。学生達は素直に聞いてくれた。考えてみれば、この子達が生まれたのは二〇〇〇年を過ぎてからで、一九七〇年などというのは生まれるずっと前ということになる。僕は一九五一年生まれだから、そうすると一九二〇年の話を聞かされるようなものだ。

ビートルズの〝レヴォリューション〟、ローリング・ストーンズの〝ストリート・ファイティング・マン〟、ドアーズの〝名もなき兵士〟、フォーク・クルセダーズの〝イムジン河〟をかけた。フーの〝マイ・ジェネレイション〟も考えたけれど、ちょっと違う。

分かってもらえただろうか。

なんと、フーのニュー・アルバムが発表された。タイトルは『WHO』、そのままである。ピート・タウンゼントは「このアルバムはほぼ全曲が昨年書いた新曲で、例外は二曲だけだ。テーマはなし、コンセプトもなし、ストーリーもなし」と言っている。ロジャー・ダルトリーは「一九七三年の『四重人格』以来、最高のアルバムを作り上げたと思う」とまで言い切っている。

ピートならいつでも曲を作っているようだけど、おそらくこのアルバムのために新曲を書いたのだろう。ロジャーの『四重人格』以来というのも、正直なところなのだろう。

前にロジャーにインタヴューしたとき、『四重人格』と『ライヴ・アット・リーズ』のＣＤを持って行って、「好きなほうにサインしてください」と頼んだら、両方にしてくれたのを思い出す。あれが『トミー』と『フーズ・ネクスト』だったら、駄目だったのかも知れないな。

ジャケットを見ると、『フェイス・ダンシズ』に似ている。どちらもピーター・ブレイクの作だそうだ。このアルバムには、そのような既視感がいくつかある。というか、今のフーは既視感で出来ているのではないだろうか。

たとえば、〝ディトゥアー〟という曲がある。フーの最初のバンド名は、ディトゥアーズだった。次にフーになり、次にハイ・ナンバーズになり、そして、フーに戻った。『フェイス・ダンシズ』のジャケットはフーの四人の顔だったけれど、今回はチャック・ベリーもいるしムハメド・アリもいる。

かつてのフーの名曲の断片も、そこここにうかがわれる。既視感である。バック・バンドもピノ・パラディーノ、ザック・スターキー、サイモン・タウンゼントで、今のフーである。フーは覚悟を決めたのだろう。

何の覚悟？　分かるだろう。

〈二〇二〇年一月号〉

音楽は続く

午前十時ぐらいに洗濯物を干したあとに検温するのが、ここのところ毎日の習慣になっている。だいたい三十六度五分ぐらいで、安心する。一度三十七度五分あったことがあって、びっくりしてあわてた。しかし、一時間後に計り直したら、三十六度台になっていてほっとした。

基本的に、子供や孫以外には、人とは会っていない。だから、電話になると、長くなる。用件よりも、最近何やってる？　ということになる。あるミュージシャンは、〝レコーディングが終わって、アルバムをリリースしたいのだけど、この新型コロナウイルスはまだ続きそうだから、発売は夏か秋になるだろう。そのときは、ライナーノーツを書いてください〟と、変な依頼をしてきた。

ミュージシャンはライヴがなくなって、家で作曲するしかなくなっている。だから、これが終焉したら、素晴らしい作品がたくさん発表されることだろう。しかし、ライヴも出来ないCDも発売出来ないとなると、ミュージシャンは困ってしまう。だいたい、この号が発売されても、書店は開いているのだろうか。

みんなそうだと思うけれど、スーパーマーケットしか行くところがない。そして、そこの入

口にも、"マスクをしてない人は入らないでください"と書いてある。マスクは娘にいくつも貰って、三回使ったら洗うようにしている。三日に一度ぐらいは行かないと、食べるものがなくなってしまう。

この騒然としたさいちゅうに、僕は引っ越しをした。なにもこんなときにとは思うのだけど、今年の一月ぐらいから計画していたことなのでしょうがない。これは僕が望んだというよりも、子供達が心配して計画したのだ。三年前に倒れたとき、お昼ぐらいに病院へ運ばれて子供達が着いたのが夕方だったということがあった。つまり、悪くすると、死に目に会えないということになる。それを避けようということだろう。

三人の子供達は自転車で行き来出来る距離に住んでいるので、その近くに引っ越しをすることになった。また、東京へ戻って来てしまった。何度か書いているように、僕は京浜急行の横浜あたりに住みたかったのに、そういうわけにはいかなくなってしまった。しかし、今迄住んでいたような丘の上ではなくて、まったくの平地である。

役所の届けなども、自転車で行けた。しかし、何年も乗っていなかったから、自分でもぎこちないと思う。いい歳をしたおじいさんが、あっちへふらふらこっちへふらふらとしている。帰って来たら、ももが痛かった。

しかし、荷物が凄いことになっている。現在引っ越して来て半月ぐらいで、段ボール箱が山のようになっている。なんといっても、本とCDが多い。なおかつ、二〇代で実家を出たときから、まったく開けていない箱もある。つまり、四十五年間も何が入っているのか分からない

ままあっちこっち運んできたのだ。なんだかなあ。現在の僕の目標は、段ボール箱を全部開けて本とCDを半分にすることだ。それを、それこそ夏か秋までには終わらせたい。

一番頭を痛めているのは、ごみの出し方だ。前のところは燃えるごみと燃えないごみだけだったのに、ここは十種類ぐらいに分かれている。これは何になるのだろうかと、毎日悩んでいる。いまのところは、間違えないで出しているようだ。

そんなことをやっているうちに、僕は六十九歳になってしまった。僕も二十七歳で死ぬのだろうと思っていたら、六十九歳である。シックスティーナインだよなどというジョークも、使えない。あと何年生きるか分からないけれど、ともかく荷物を片づけてすっきりとしたい。

「ザ・モンキーズ・ライヴ―ザ・マイク・アンド・ミッキー・ショウ」である。モンキーズのことは、数年前に「レコード棚いっぱいの名盤から」でファースト・アルバムを取り上げたことがある。僕はモンキーズが好きだ。運命に翻弄されたバンドでもある。

一九六五年アメリカを席巻していたビートルズを見て、テレビ・プロダクションが「ア・ハード・デイズ・ナイト」や「ヘルプ！」のような番組を作ろうと思いついた。そして、オーディションを行なって、四人の人間が選ばれた。

イメージ的にジョン・レノンに近かったのはマイク・ネスミスで、ジョンと同じようにいつも帽子をかぶっている。ポール・マッカートニーのように愛想がいいのがミッキー・ドレンツで、しょっちゅう騒いでいる。ジョージ・ハリソンはピーター・トークで、一歩下がってにこ

CamScannerでスキャン

にこしている。その頃アメリカではリンゴ・スターが一番人気があったので、小柄なデイヴィー・ジョーンズが選ばれた。

ちなみに、イギリスでデイヴィー・ジョーンズという歌手がデビューしようとしたら、レコード会社にモンキーズに同名の人がいるので変えるようにと言われた。しょうがないから、彼はデヴィッド・ボウイと名前を変えた。

テレビ・シリーズは大成功したのに、そのうちにモンキーズは楽器を弾けないなどという排斥運動が起こり始めた。これがアメリカの悪いところだ。一度持ち上げて、次に落とすのだ。たかがと言っては申し訳ないのだけど、テレビ番組ではないか。

実は四人ともそれなりの音楽のキャリアもあったので、その運動に対抗するために、テレビの架空のバンドではなく、実際のバンドとしてコンサート・ツアーを行なってアメリカ中をまわった。これが運命の分かれ道だった。彼等はテレビの中だけではなくて、本当にバンドになってしまったのだ。そうじゃなかったのに。

そのうちに、ビートルズは複雑になって、ロックも大きく変わって、テレビ番組の「ザ・モンキーズ」も終わってしまった。しかし、実際のバンドになってしまったモンキーズは、それでも続けなければならなくなった。すぐに、他の仕事を始めるわけにはいかなくなったのだ。悲劇である。レコードは売れなくなった。メンバーは一人抜け二人抜けして、解散した。

しかし、ここが面白いところで、モンキーズは再結成するのだ。おそらく十年ごとぐらいに再結成して、ツアーを行なうとフルハウスになるのである。そういうやり方を非難する人もい

るらしいけれど、僕は大きなお世話だと思っている。バンドと観客がそれでいいのなら、他人がどうのこうの言うべきではないだろう。

今では、デイヴィー・ジョーンズが二〇一二年に亡くなり、ピーター・トークが二〇一九年に亡くなり、マイク・ネスミスとミッキー・ドレンツだけになってしまった。ビートルズもジョン・レノンとジョージ・ハリソンが亡くなり、ポール・マッカートニーとリンゴ・スターだけになってしまった。そういえば、〝愛こそはすべて〟や〝ア・デイ・イン・ザ・ライフ〟のレコーディングのビデオには、マイク・ネスミスやミッキー・ドレンツも映っていた。仲が良かったのだ。

これは二〇一八年から二〇一九年にかけて行なわれたツアーの模様である。ノエル・ギャラガーやポール・ウェラーが贈った曲も入っている。内容に関しては、文句はない。楽しい「ザ・モンキーズ・ショウ」である。

〈二〇二〇年六月号〉

たぶん四月ぐらいから、外で酒を飲んでいない。居酒屋に行っていないということだ。ひとりで自分の部屋で、飲んでいる。そういうときはテレビを見ながら飲んでいるわけで、面白いんだか面白くないんだかよく分からない。

十分ぐらいのところにある駅前には、居酒屋が四～五軒はある。そろそろ行ってみようとは思っているのだけど、ひとりではどうも行きにくい。そういえば、今迄も住んでいる町では、飲みに行かなかった。飲みに行くのは、やはり少し離れた町だろう。

ずっと家にいるから、最近はパスモの残高も分からない。そのうちに、電車の乗り方も分からなくなるんじゃないかな。そういえば、数年前に入院した後、初めて電車に乗ったら、そのスピードにびっくりしたことがあった。こんなに速いなんて、止められなくなっているんじゃないかと心配したものだ。

相撲にも行ってないし、野球にも行ってないし（ヤクルト・スワローズが最下位なのは、僕が見に行ってないせいだ）、酒も飲みにも行ってないし、友達とも会っていない。新型コロナウイルスのせいだと言ってしまえばそうだけれど、こんなことを書いていてもしょうがないの

でやめよう。

今年はジョン・レノン生誕八〇周年没後四〇周年である。そうか、もう四十年も経ったのか。今の若い人達にとっては歴史的事実なのかも知れないのだけど、我々にとってはリアルなことだった。ジョンが暗殺された直後に書いた文章があるから、それをここに書き写してみよう。

先ず、非常に混乱していて、何がなんなのかよく解らないという状態におちいっているので、何をどう書けばよいのか、解らない。

とても、冷静にはなれず、かといって、興奮しているわけでもない。

事実は事実として認めなければならないのであって、それは認めている。TVでも新聞でも、ジョン・レノンが射殺されたといっているし、ニュー・ヨークの今泉ひろしからも、電話がかかってきた。

しかし、ジョン・レノンが射殺されたというのは、つまりどういう事なのかというのが、解らないのだ。それは、つまりどういう事なのだろうか。

ロックンローラーの死というのは、さほど珍しい事ではない。また、メッセージ・メーカーとして、生命を狙われるおそれがあるのも、当然である。だから、どうなのかというと、どうなのだろう。

ともかく、家にいると、死にましたね死にましたねと電話がかかってくるので、外へ出てみないと、本当のところは何も解らない。
だけど、ひとりではいたくないので、誰か捜して、飲み続けていて、結局何も解らない。当分は、解らないままで、何も無かったふりをして、ずうっと飲み続けよう。

これは「ロッキング・オン」の一九八一年二月号に書いた文章である。「ロッキング・オン」はもう締め切りを過ぎていて、文中にもあるようになんだか分からないまま一晩中酒を飲んでいて、朝帰って来たら渋谷から電話があって、差し替えをするからすぐに追悼文を書くようにと言われた。

それで、この文章を書いて、当時はファックスもなかったので、「ロッキング・オン」まで届けに行った。そのとき何故かバスに乗って行って、酒びたりの頭で窓の外を見ていたら、突然もうジョンがいないということに気がついて、他の乗客に気づかれないように泣いた。

一度でいいから、ジョンに会いたかった。その後、ポール・マッカートニーにも、リンゴ・スターにも会った。エリック・バードンにも、ミック・ジャガーにも、レイ・デイヴィスにも、ロジャー・ダルトリーにも会った。しかし、一番のヒーローは、ジョン・レノンだった。

僕が音楽を始めたのは、ジョンがやっていたからだ。僕が叫ぶのは、ジョンが〝ツイスト・アンド・シャウト〟で叫んでいたからだ。五年ぐらい前に〝黒い鳥〟を作ったのは、ジョンが〝ヤー・ブルース〟を歌っていたからだ（フジロックでは、〝黒い鳥〟の最後に『ママ・ドン

ト・ゴー、ダディー・カムズ・ホーム」と叫んでいた)。

僕が持っているTシャツで、一番偉いのは四着ある。三着はビートルズで、もう一着はNEW YORK CITYである。そういえば、今年の夏はNEW YORK CITYは着ても、ビートルズは着なかった。おかしな夏だった。

「ダブル・ファンタジー　ジョン・アンド・ヨーコ」という展覧会が、東京で行なわれる。これは二〇一八年五月から二〇一九年十一月まで、リヴァプール博物館で開催されていたものだ。それが二〇二〇年十月九日から二〇二一年一月十一日まで、ソニー・ミュージック六本木ミュージアムで行なわれる。これはとても評判になっていて、さいたまスーパー・アリーナにあったジョン・レノン・ミュージアムよりも良質なものになるだろうと思う。

ジョン・レノン・ミュージアムで一番びっくりしたのは、ジョンの手形があってそれが僕より小さかったことだ。衣装も何着かあって、それがどう見てもLサイズだったということだ。つまり、ジョンの身長は公式には百七十八センチだったのだけど、どうも百七十センチ以下だったようだ。今はどうでもいいことであっても、当時はジョンが僕よりも小さいことに納得がいかなかった。

この「ダブル・ファンタジー　ジョン・アンド・ヨーコ」には何が出展されるのか、楽しみである。

CamScannerでスキャン

ジョンの新しいベスト・アルバム『ギミ・サム・トゥルース.』も、十月九日に発売される。これはショーン・レノンがプロデュースをしたそうで、たしかに音は良くなっている。二枚組である。三十六曲である。

このアルバムは、ちょっと変わった性格を持っている。いや、変わっているのは、こちらのほうか。〝マザー〟が入っていない。〝ウーマン・イズ・ザ・ニガー・オブ・ザ・ワールド〟が入っていない。

口惜しいので、本当はここで僕が三十六曲選ぼうと思った。しかし、一週間経っても、選べなかった。つまり、これは今の若い人達のための選曲なのだろう。ショーンを含めて、若い人達のジョンのベスト・アルバムなのである。

十年後の九〇周年には、こういうものではないものを期待している。もっとも十年後には僕は七十九歳になっていて、生きているか分からないけどね。

〈二〇二〇年十一月号〉

生きていこう

布団を干そうと思ったら、ベランダの手すりに朝顔のつるがぐるぐるぐると巻きついていた。

まず、えっもう十月だよと思った。真夏ならともかく、十月になって、夜は暖房をつけているのに、朝顔かよ。本当かよ。

そこで庭を見まわしてみたら（実際には、庭ではなくて、空き地だけど）、あっちこっちに八つぐらい朝顔があった。それらは巻きつくものがないので、当然地面の上で横たわっている。

朝顔なんか、小学生の夏休み以来だ。どうすればいいんだろう。

だいたい、こんな所に、どうして、朝顔が咲いているのか。夏の間は、なかったはずなのに。考えてみると、今年何度かあった台風で飛ばされて、ここに着地したとしか思えない。だけど、困るんだよな。今から、布団を干したいんだけど。朝顔を見ながら、会話した。

たしか、一か月ほど前に布団を干したときにはなかったはずだ。朝顔に釣瓶とられて貰い水、とはならない。ぐるぐるぐると巻きついているつるは、花は咲いていなかったので、ぐるぐるぐると外して、申し訳ないけれど撤退してもらった。布団を干すだけで、一仕事である。

どうして、こんなことを書いているのだろう。新型コロナウイルスのせいで、外へ出ない。

CamScannerでスキャン

友達と会うこともないから、酒を飲みにもいかない。夏の間は自転車で走りまわっていたのだけど、寒くなってそれもやめた。
家にこもりっぱなしである。もう少し治まったら会おうという、電話ばかりである。数年前にやっていたバンドのメンバーとも飲みにいこうと言っていて、調整がつかない（つまり、谷野さんだけど）。
そこへ、「ダブル・ファンタジー　ジョン・アンド・ヨーコ」展である。行かなければならない。これは、ソニーミュージック六本木ミュージアムで行なわれる。六本木には、知りあいの酒場もある。その前に、やっておかなければならない仕事の打ち合わせも、片づけてしまおう。やらなければならないことが三つも出来て、急に忙しくなったような気分になった。
というわけで、十月八日に六本木に出かけた。昔はロッキング・オンは六本木にあって、すみずみまで知っていた町だ。しかし今は分からない。もう十年ぐらい行ってないはずだ。
何回も乗り換えて、一時間以上もかけてやっと六本木に着いた。着いたのはいいけれど、六本木の駅はおそろしく地下になっている。これは渋谷も同じで、ホームから町へ出るまで十分以上もかかるような気になる。地下鉄が下へ下へとなっているのは聞いていたのだけど、これほどとは思ってもいなかった。
ソニーの六本木ミュージアムも、思っていたものと違っていた。昔ここにジッポー展を見に来たことがあったと思っていて、それはまったく外れていた。どうも、少しずつずれている。なんだかなあ。

CamScannerでスキャン

会場に入ると、たくさんの人がいる。展示物を見ているうちに、僕だけが他の人と逆に歩いていることに気がつく。つまり、出口から入って、入口に向かっているのだ。最初に、ジョンの死後になっているのだ。

初めから歩き直すのもしゃくなので、そのままでいいことにした。ジョンがどんどん若くなっていく。ジョンが殺されたときにかけていた眼鏡がある。ジョンが使っていたギターがある。NEW YORK CITYのTシャツがある。何も言えなくなってしまう。

ミュージアムを出て、六本木の交差点へ行って編集者と打ち合わせをする。それが終わって、行きつけの店に向かったのだけど、どうも町並みがおかしい。六本木の裏通りは変化が激しいとはいえ、その店は三十年以上もあったはずだ。それが、ない。

電話をしても、「現在使われていません」という。そういえば、四月に引っ越しをしたとき、連絡をしていなかったことを思い出した。だから、この半年ぐらいのことだろう。コンクリートの駐車場の前で、僕はしばらく佇んでいた。

ウィルコのアメリカ・ツアーは、コロナウイルスのために途中で中止になった。ジェフ・トウィーディーも家に帰らざるをえなくなった。そして、コロナウイルスの恐怖に打ち勝つために、スタジオに入った。一日に一曲ずつ、レコーディングすることにした。

前のアルバムと同じように、息子のスペンサーとサミーでレコーディングしたのが、『ラヴ・イズ・ザ・キング』である。資料にはカントリー・ソングと書いてあるけれど、基本的に

いつものジェフ・トゥイーディーである。

アメリカの感染もひどいもので、トゥイーディーの心も揺れたようだ。しかし、レコーディングをして、平静を保ったらしい。正直いって、曲は荒けずりである。しかし、そんなことはどうでもいい。

コロナウイルスの蔓延に立ち向かおうという心意気が、嬉しい。またウィルコが活動出来るまで、あとどれぐらいかかるのだろう。それを楽しみにしよう。それを楽しみに生きていこう。

（二〇二〇年十一月号）

Still Alive And...

長い間、黙って休んでいたようで、誠に申し訳ない。こんなに長く休んだことは今迄になかったので、どこから説明しようか迷っている。去年の春に、引っ越しをした。とりあえず、そこらへんから始めよう。

五年前に、脳梗塞をわずらった。そのことは以前にも書いたことがあったと思うのだけど、病気は治って以後普通に生活出来るようになった。

これも何度か書いていたと思うけれど、住居が坂の上にあってやたらと不便だった。どうにかしなければと思っても、こういう性格だからなかなか踏ん切りがつかなかった。

たまりかねた娘や息子達が、引っ越し先の候補をいくつか見つけてきてくれた。結局、子供達に後押しされて、引っ越し出来たのだ。年齢を重ねると、こういうことにもなってくる。なんといっても、僕は今年七十歳になった。

その結果、神奈川から東京に戻る形になって、僕の東京以外の暮らしは約十年で終わることになった。神奈川は気に入っていたので、ずっと住んでいたかったのだけど。川崎には行きつ

CamScannerでスキャン

けの居酒屋があって、馴染みになっていた。夕方から十一時の閉店まで、ずっと飲んで酔っ払っていた。

また、野球を見るために、横浜スタジアムに行っていた。もちろん、ヤクルト・スワローズ対DeNAベイスターズの試合だ。スワローズの試合を見るために、わざわざ横浜まで行っていたのだ。何故神宮球場に行かないのかというと、目の前に僕を退学にした高校があるからだ。

さて、今の東京は訳が分からなくなってしまっていて、ここで生まれ育った人間でさえ首をかしげることが多い。特に、今渋谷を目茶苦茶にしている人達は、何を考えているのだか理解に苦しむ。

あの人達は、きっと少年期に渋谷という町を知らなかったのだろう。そうでなければ、あれほど歩きにくい町にする訳が無い。今渋谷を開発している人達の中に、子供時代を渋谷で過ごしていたという人はいるのだろうか。渋谷という町ではなくて、いいおもちゃを見つけたような感覚なのだろう。

長年渋谷に行っていた僕でさえ、今の渋谷には行きたくない。いや、行きたくないというよりも、行けない。歩き方が、分からない。僕が知っている場所にしか、行けない。

新しい土地の暮らしは、初めは心地好かった。自転車であっちこっちに行ったことも、書いたと思う。この町には、立ち食い蕎麦屋やハンバーガー屋はない。それが、困っちゃうところだ。

しかし、最近話題の業務スーパーがある。行く度に大量に買うので、重いっちゃありゃしない。隣町には、大戸屋や日高屋やサイゼリヤがある。だから、週に一度ぐらいは、隣町に行っている。

だけど、立ち食い蕎麦屋や牛丼屋はない。ああいう店がないと、なんとなく町に風情がない。こないだ、渋谷の変わっていないところを歩いていたら、僕が二〇代の頃から知っていた立ち食い蕎麦屋がまだあった。感激して、天麩羅蕎麦を頼んだ。

自転車に乗れなくなったのは、いつぐらいだったのだろう。つまり、こげなくなったのだ。転倒してしまうのだ。自転車に乗る度にころび、肘や膝が血だらけになった。

そのうち、肩から背中にかけて、痛むようになった。痛くて、夜眠ることが出来ない。どうやら、何か病にかかっているようだ。自分で病院を調べて、検査してもらった。

初めのうちは、たいしたことはないだろうということだった。しかし、痛くて夜も眠れないほどになっていた身としては、納得がいかない。

もっと詳しく調べて欲しいと、頼んだ。すると、ついに出てきた。肺癌、肝臓癌、腎臓癌。それが、骨に転移している。それが何を意味するのか、僕でも分かる。ゴー・ジョニー・ゴー・ゴー！　というしかない。

そういうことが分かったのが、去年の秋の十月だったと思う。それが判明してから子供達に伝えたら、何故早く教えてくれなかったのかと泣かれて困った。

CamScannerでスキャン

それからこの一年の間に、四回入院している。だいたい、一回の入院で、一週間くらいだろう。先日は、二週間だった。だから、今年の夏の暑さは知らない。ずっと病院にいたから。暑かったんだって？

入院も度重なると、慣れてくる。それが、僕は売店へ行って、ポテトチップスを買ってくることだった。なんのことはない。ただの買い食いである。ポリポリ、パリパリ。それを食べながら、テレビを見る。テレビを見るしか、やることがない。テレビを見るには、テレビ・カードというものを買わなければならない。これが約1時間で100円くらい。料金もかさばるものである。

また、野球や相撲を見る。こないだは、オリンピックをやっていた。野球はわからないけど、こういう身体になると、相撲の力士は異常に見える。あんなに太っていて、身体にいいわけがない。力士が短命だということを、よく聞く。急に、相撲への興味がなくなった。だいたい、両国国技館にも、横浜スタジアムにも、もう行けない。だって、あんな階段だけのところは、歩けない。しかし、今まで充分見てきたから、もういいといえばいいが、ずいぶん行ったもんな。

本を読むのは、病室に適さない。初めの頃、なかなか『現誠の月』を入院に持ってきたが、しかし、第一巻を読んだら、もう読まなくなった。面白いのだろうな。あれは。

冒頭から家族が殺されて、妹と二人だけになるという設定は無理があるような気がする。すわまでのストーリーがあっただろうと、思う。それだけで、一冊分くらいになるだろうし。

それじゃあ面白くないか。

午後、ベッドに座って、窓から病院の外を眺めながら、ポッキーとポテト・チップスを食べる。ポリポリ、パリパリ。あたしゃ、これからどうなっちゃうんだろう。ポリポリ、バリバリ。体重を計ってみたら、五十八キロだった。病気になる前は、六十五キロはあったと思う。ダイエットするなら、病気になるしかない。癌なら、いうことはない。

一年経って、ようやく原稿を書く気になった。というよりも、書かなければならないと、強く思った。

一九七二年、二十一歳のときに、「ロッキング・オン」の創刊に参加した。現在二〇二一年、七十歳になって、これからどうなるのかまったく分からない。あと一年でも二年でも、生きていくつもりでいる。しかし、これだけは分からない。

とりあえず、長年の御愛顧を感謝して、読者に病状を伝えたいと思った。今迄、ありがとうございました。

もうすぐ、ビートルズの『レット・イット・ビー』の、新しいヴァージョンが発表されるという。それを見なければ、死ぬに死ねない。

〈二〇二一年十一月号〉

CamScannerでスキャン

本書について
松村さんの十冊目

米田郷之

本書は二〇二三年三月十二日に亡くなった、音楽評論家であり、作家、そして歌手（彼の表記に倣うと）だった松村雄策氏の十冊目の著書となります。

ここでは、この本を出すに至った経緯を中心に書こうと思います（松村氏は「ロッキング・オン」のファンの方々同様、「松村氏」ではなくずっと「松村さん」というニュアンスの存在だったので、以降「松村さん」と表記いたします）。

私が松村さんと知り合ってから三十年以上になります。きっかけは、松村さんに「青春小説作品をテーマにした書下しエッセイ集を作りたい」という手紙を書いたこと。読んだ彼から電話で「じゃあ会おうか」と言われ、指定されたのが一九八九年四月二十八日、ニール・ヤングの来日公演の開演前。場所は渋谷、ＮＨＫそばの喫茶店「フレンチ・クオーター」でした。たまたまこの日に二人ともニール・ヤングを観に行く予定があったのです。

その初対面以降、単独著書で編集を担当したのは一冊でしたが、私が編集を担当したプロレス本、女子プロレス本、さらには松村さんからお声がかかったプロレスの新団体立ち上げの際のパンフ制作、そして「文藝別冊　ニール・ヤング」……などなど、さまざまな形で一緒に仕事をしました。また、松村さんに誘われていろいろなライヴに行きました。プロレスや野球も、そして講演ツアーで九州から帰ってくる彼と、私が帰省で立ち寄る岡山で落ち合って、内田百閒の実家などをめぐったこともありました。そういえば、ニール・ヤングが出た年のフジ・ロックでは、松村さんはロッキング・オンの取材、私は別の雑誌の取材でしたが、何度も行って慣れている彼に案内してもらい、ついて回りました。今、そんなことが思い出されてきます。

とはいえ、たまに電話しては会って飲む、これが一番多かった。あまりお酒は強くない私ですが、松村さんは「飲めよ」とか無理強いする人ではまったくなく、毎回「お互い手酌でいこうな」と言ってくれていたので、飲めなくてもずっと夜遅くまで気楽にしゃべっていられたのでした。

これから本書に関わりのある記憶を辿っていきますが、発言や出来事の日時をそこそこ詳しく記せているのは、松村さんの体調を心配してというのもあるのですが私が忘れっぽいものですから、電話や話した内容を記録する（具体的にはFacebookを「自分のみ公開」という設定にし、日記代わりに使ってそこに書いておく）ようにしていたからです。

まずは、なぜわざわざ「十冊目」と強調しているのか、あたりから始めていきます。

現在までの彼の著作（共著・監修他を除く）を刊行順に並べてみると――

『アビイ・ロードからの裏通り』（一九八一年、ロッキング・オン→ちくま文庫）
『岩石生活（ロックンロール）入門』（一九八三年、ロッキング・オン→ちくま文庫）
『苺畑の午前五時』（一九八七年、筑摩書房、書下し小説→ちくま文庫→小学館文庫）
『リザード・キングの墓』（一九八九年、ロッキング・オン→角川文庫）
『悲しい生活』（一九九四年、ロッキング・オン／未文庫化）
『それがどうした風が吹く』（二〇〇〇年、二見書房／未文庫化）
『ビートルズは眠らない』（二〇〇三年、ロッキング・オン→小学館文庫）
『ウィズ・ザ・ビートルズ』（二〇一二年、小学館→小学館文庫）
『僕を作った66枚のレコード』（二〇一七年、小学館／未文庫化）

——となります。計九冊です。

また、本書にも収録されている「ボブ・ディランのある季節」（「ロッキング・オン」二〇一七年十二月号）には——

「十月九日の当日には、一歩も外に出ないでうちの中でおとなしくしていた。十七歳のときには考えもしなかった六十六歳になったけれど、もう少しなんとかしたい。単行本を九冊出しているから、なんとか十冊にはしたい。出来るかな。」

CamScannerでスキャン

――とあります。

書かれたのは、ちょうど松村さんが最初の脳梗塞で倒れた一年後。それまでも文章の中に「いつまで生きられるのか」のような表現は見受けられましたが、この脳梗塞がきっかけで具体的な「十冊」という言葉となって出てきたのかもしれません。

「十冊にはしたい」――しかし、松村さんとの付き合いの中で、これを生の言葉で聞いたのは、その数年後でした。

二〇二〇年一月五日、獣神サンダー・ライガーの引退試合を観るために松村さんに誘われて東京ドームに行った帰り、一杯やることになり、水道橋は混んでいるだろうからと、御茶ノ水までの坂を歩いて向かうことにしました。冬です。おまけに強い風が吹いていて寒くてしょうがない。どうしても早足になる私に、途中で「待ってくれよー、俺、老人で、病人なんだからさー」と松村さんらしくない弱音を耳にし、とはいえもう半分以上は来ちゃっていて戻るに戻れず、結局何度も立ち止まりながらたどり着いたのが居酒屋「笑笑」でした。店の中がまぶしいほどに明るくて、ものすごくあたたかかった。

この店で松村さんから「米田、俺、本をまだ九冊しか出してないんだよ」「十冊目を出したいんだよ」と言われました。今でも覚えていますが、「十冊目を」の前に念を押すように「生きてるうちに」とおっしゃいました。しかし、私には一年前に脳梗塞で倒れた人の言葉ではあ

るけれど、その時は切実な「生きてるうち」とは感じられず、一つの強調としての表現、あるいは、松村さんが自分自身を鼓舞するつもりで言っているのだと受け止めていました。実際そうだったのではないかと思います。

とはいえ、長きにわたってお付き合いさせていただき、お世話になった著者が「出したい」と言っているのです。わかりました、その方向でやっていきましょう。そう確認して、その日は別れたのでした。

この時の私の立場といえば——その前年に長く勤めた出版社（『それがどうした風が吹く』を編集担当した会社）を退職し、ニール・ヤングの翻訳本を出すために一人で会社（ストランド・ブックス）を作っておりました。

後日、さて、何をどうしようか、と相談した際に松村さんからまず出てきたのが、『僕を作った66枚のレコード』の完全版（以下、完全版と略す）でした。本書の文中にも名前が登場する「レコード棚いっぱいの名盤から」という連載を元にまとめたこの本に収められているのは実は連載全体の半分程度。どうやら文庫化の予定はないという話だから、全部を入れた完全版として文庫でも単行本でもかまわないのだが、どうだろうか？　という提案でした。

早速、単行本、文庫両方向を想定した企画書を私が書き、数社の出版社に持ち込みました。しかし結果的にはどこも通りませんでした。

私の力不足だと思います。しかし、各社の反応を分析した結果、既刊本の完全版の出版はむ

ずかしいかも――そう判断するまでにも時間はどんどん経っていき、その間に予期せぬ事態が起きていました。

それを知ったのは二〇二〇年十二月二十日の電話でした。

着信記録があったので折り返し電話をすると、松村さんから「体のいろんな部位にガンが見つかり、ステージ四だと言われた。来週から検査入院なんだ」と伝えられました。とにかく「あの松村さん」がガンだというのがすぐにピンとは来なかったというのもありましたが、「え……」という反応が相手にとっていいわけではないし、むしろわざと軽く受け止めた風に装って話そうと考えました。それで淡々と完全版の企画が通らなかったことを伝えました。

残念な報告をして謝ると、松村さんは「いや、ありがとね」と逆に気を遣ってくださったので、そこで企画を通してくれない現実への反抗、というか、意地がメラメラと湧いてきて、だったら「親本ありきというのが企画の可否に影響するのなら、いっそ、新しいエッセイ集にしませんか?」と提案してみたのです。すると、「単行本未収録の原稿ならたくさんある」「『僕を作った66枚のレコード』の時に調べたら二十年分はあったよ」と松村さんの声がなんだか前向きになったように聞こえました。それで、ようやく「十冊目」が「新しいエッセイ集」という方向に変わったのです。

松村さんの体調に関しては、さらに四日後の十二月二十四日にまた電話で「検査入院は終えて、来年五日に病院に行く」と聞かされました。

エッセイ集に入れる文章について訊ねたら「多分部屋のあそこにあるだろうというのはわかるんだけど、ダンボールに入っていて、自分がこういう状態なので探せない。落ち着いたら、家族に開けてもらおうと思っている」という返事でした。

さらに年が明けた二〇二一年一月十七日、留守電が入っていたので折り返すと――(日記によると)

- ケータイを持った(!)。
- 一月十九日から二月二日までの間、治療のため入院する。
- その間に家族が「ロッキング・オン」など原稿関係を出しておいてくれることになっている。
- 山口瞳関係他「ロッキング・オン」以外の原稿は見つけた。キヨシローに関する文章も。残りは「ロッキング・オン」のもので。

――ここまで話した後、突然どうだと言わんばかりの大きな声で「タイトルは、もう決めてるんだぜ!『僕の樹には誰もいない』なんだ」と松村さんが言ったのです。「『それがどうした風が吹く』の時みたいに、先にタイトル決めて、内容を埋めていく形で」と。この時、ほんとに嬉しそうでした。これが本書のタイトルが決まった瞬間でした。

その約三週間後、松村さんは二度目の脳梗塞で倒れ、救急車で搬送、幸い一命をとりとめま

CamScannerでスキャン

す。

以降、ほぼ一年間は、具体的な内容や進め方の打ち合わせをするにも、松村さんが治療のための入退院を繰り返していたので、折りを見ては電話をして体調や病院の予定やいつ電話をすればいいかを確認するのが精一杯で、なかなか進められませんでした。

ただ、「ロッキング・オン」に松村さんの原稿が載らなくなり、読者からの心配の声は日に日に強くなっていました。そこで、今まで公表していなかった病気のことを書いた「Still Alive And...」という「松村雄策の文章」が久々に、二〇二一年十一月号（十月七日発売）に掲載されました（本書にも収録）。

原稿を書いたことは聞いていましたが、一読した私は、涙しました。すぐに電話をして「こんなに長い原稿を、それもいつもの松村さんらしい文章だし。よく書きましたね」と伝えました。松村さんは「いや、病院は同室の人たちが夜眠れなくて昼間寝てるから、その間に書いたんだけどね」と、秘密をこっそり教えるみたいに話してくれました。

ただ、この文章の内容そのもの（つまり病気の現状）については、口に出すのが怖くてそれ以上は触れられませんでした。

そして、二〇二二年を迎えます。

一月二十八日、二十一時四十分に松村さんからの着信があったことがわかり、二十一時五十九分に電話した、と私の日記にあります。その続きを一部書き出すと――

・ステッキを使っている。トイレには頑張っていける。
・一日中ベッドに座ってる。楽しみはタバコ五本とビール一本。でも味覚がやられてるから味がしない。けど、酔っ払う。
・本（本書のこと）のために「ロッキング・オン」を出してるけれど読めない状態。
・一番最後の（最新の、という意味だと思う）本の奥付以降のものからとってあるから。「ロッキング・オン」以外五、六本あるから。コピーとってあるから使っていいから。

そして三月十二日――。

当日、近所に出ていた私にご家族から電話があったのは十三時半ちょっと前くらいでした。「訪問介護のかたより血圧が六十くらいで、水分も摂れず、薬も飲めない状態」だと連絡があったと。「このまま入院してしまうと誰にも会えなくなってしまうので連絡をしました」とおっしゃった。一旦自宅に帰り、すぐに松村さんの部屋に向かいました。

私が到着する前、すでに「ロッキング・オン」創刊時代からの盟友・渋谷陽一氏が先に来られていました。渋谷氏のほうから気を遣って私に話しかけてくださって、「なぜ私がここにいるのか」「どういう関係なのか」は説明したけれど、思い返せば、ちゃんとした挨拶もできず名刺さえも渡し忘れ、本当に失礼なことをしたとあとで反省しました（後日、葬儀の際にようやく実現できた）。ただ、その時はもう、目の前の松村さんのことで頭がいっぱいで、ただひ

たすら話しかけていたように思います。

とはいえずっといるわけにもいかないし、松村さんも落ち着かないだろうから「本のことは大丈夫です、ちゃんとやりますから」「また、来ますからね」とだけ言って部屋を辞したのは十六時半でした。実は一月二十八日の電話で松村さんに「生きているうちに会えないかもしれないから」と言われていたので、こうして会えた喜びをかみしめながら帰途につきました。

翌朝目を覚ますと同時に、メールで亡くなられたことを知りました……。

葬儀も終わって、十冊目の約束を少しでも早く果たすべく、原稿をまず集めないと——と動き始めようとした私でしたが、そこではたと考え込んでしまいました。

それは、一月二十八日の電話の「一番最後の本の奥付以降のものからとってあるから……」「ロッキング・オン」以外五、六本あるから。コピーとってあるから使っていいから」が気になっていたからです。

松村さんが亡くなられた後、私は、[illegible]

[illegible]

ったりと、なかなかに有意義な時間を過ごせました。
それでもその「コピー」というのはなかなか見つからず、結局、見つかったのは、切り抜き作業によって原稿がほぼ集まってからのことでした。
それは、二〇〇〇年からの「ロッキング・オン」掲載分のコピーをクリップでまとめたものでした（ただし、二〇〇九年まで）。
まずはこれに従って二〇〇〇年以降の文章からセレクトしようと考えました。そして約二十年分の原稿に目を通し、私なりの評価をしていきました。
結果的に、これは面白いから入れたい！　というものが九十八本残りました。松村さんのこれまでのエッセイ集の作り方から考えても、四十本ぐらいで一冊、――と考えていたのですが、その倍近く。でも、これ以上、半分以下に絞るなんてもう無理だ……困ってしまいました。
再び悩んでいた頃に、ご遺族の一人から「新しいものから選んでしまえばいいのでは？」というメッセージをいただきました。
そうか、新しいもの、か。シンプルだけれど、ものすごく納得しました。最新刊になるんだから、新しいものから選んで当然か。
私は、これに迷うことなく乗りました。頭を切り替えて、じゃあ、直近から始めてどこまで遡ればスムーズにいくだろうか、という形で考えることにしました。
松村さんの著書を読んでこられたかたならご存じだと思いますが、過去のエッセイ集「リザード・キングの墓」も「悲しい生活」も冒頭には「十二月八日」にからんだ文章が置かれております。

そして、なんと、二十年間のちょうど半分あたり、二〇一〇年二月号に「七〇年目の十二月八日に向けて」という文章があったのです！　それで、二〇一〇年以降に書かれた文章から選ぶ、と決めました（一本だけ二〇〇九年十二月号のものが例外的に入っているのは、松村さんがどういう人なのかという紹介として使おうという考えからです）。
あとはテーマに沿ってゆるめに分類し、全体を前半、幕間（?）、後半に分けて、各々時系列で並べていくというふうにしました。

――そうやってできたのが本書なのですが、補足しておきたいことがあります。
①松村さんの言っていた「ロッキング・オン」以外の原稿、というのは、全部、二〇一〇年以前のものだったので、今回は見送ることにしました。山口瞳氏のこと、キヨシローさんの完全復活パンフの原稿、さらにはムーンライダーズ三〇周年に寄せたもの、早川義夫さん
の文章など面白いものばかり

ります。

そして、なんと、二十年間のちょうど半分あたり、二〇一〇年二月号に「七〇年目の十二月八日に向けて」という文章があったのです！　それで、二〇一〇年以降に書かれた文章から選ぶ、と決めました（一本だけ二〇〇九年十二月号のものが例外的に入っているのは、松村さんがどういう人なのかという紹介として使おうという考えからです）。

あとはテーマに沿ってゆるめに分類し、全体を前半、幕間（？）、後半に分けて、各々時系列で並べていくというふうにしました。

――そうやってできたのが本書なのですが、補足しておきたいことがあります。

①松村さんの言っていた「ロッキング・オン」以外の原稿、というのは、全部、二〇一〇年以前のものだったので、今回は見送ることにしました。山口瞳氏のこと、キヨシローさんの完全復活パンフの原稿、さらにはムーンライダーズ三〇周年に寄せたもの、早川義夫さんについての文章など面白いものばかりでしたが、発表時期の離れたものを入れることは、本の流れとして違和感を生むのと、今収録できなくても、いずれ、アーカイヴ的なものが作れることにでもなれば、正しい場所に置くことができるから、それまではちょっと眠っていてもらおう、という判断からです。

②マメな松村さんらしく、掲載誌には、チェックして修正の朱字を入れたものがいくつかありました（それは本書の文章に反映させました）。

③松村さんが特に好きなミュージシアンのうち、ニック・ロウに関するものを今回は入れられませんでした。そのことが一番気になっています。他にもっといい原稿がありすぎて。ここらへん、もちろん私の好み（ミュージシアンに対する、ではありません）がセレクションに影響していることは否定できませんが、松村さんが私に任せてくださったことですので、そこはご理解いただければ幸いです。

松村さんは、真っ当さの通じる、気遣いの人でした。権威主義というか、立場をかさに着てエバる人を嫌っており、腹黒かったり裏で暗躍してる、あるいはビジネス的な論理だけで人を動かそうとする——ような人を軽蔑していました。ここらへん、私の人の好みとものすごく共通点がありました。

音楽を語るのに、こういう独自の形になる。自分語り——などと片づけるのは簡単でしょうが、彼の場合は自分から始まって、結局外（世間）に向かって開かれた書き方になっています。そして、何よりもこの読んでいくうちにからめとられていくような、そしてクセになりそうな絶妙な語り口、時間を超えたいつ読んでもいい面白さ……。松村さん亡き後、ツイッターで「松村さんの原稿を読むためにロッキング・オンを買っていた」というつぶやきを見かけましたが、まさに彼の文章にはそういう魅力があったのだと思います。

松村さんの単行本未収録エッセイはまだまだ多くあります。願わくば、本書をきっかけに松村雄策という書き手が再評価され、アーカイヴ、特集本などがどんどん刊行されていきますよ

うに――十冊目という言い方をあえてしているのは、十一冊目、十二冊目が出て欲しいという気持ちだからです。これで終わりじゃないし、終わらせるつもりもないからです。

最後に私事ですが。昔、「ビートルズは眠らない」の書評をある雑誌に書いたら、「これが書評っていうもんだ、と（同書の）編集担当に言ってやったよ！」とすごく褒められました。その私の名前の入った書評のコピーがきちんと保存してあるのを見つけた時、私はこみあげるものを押えきれませんでした。

帯の藤本国彦さん、鈴木慶一さんの推薦文にもあるように私にとっても、「ビートルズに人生を狂わされた」一人である「松村雄策は眠らない」のです――。

最後の最後になりましたが、松村さんと私で勝手に走り始めたこの企画をご理解いただき、単行本収録を快諾してくださった株式会社ロッキング・オン様、いろいろな形で常に私を励まし、作業にも協力して背中を押し続けてくださった――亮さん、朋子さん、郁子さん、英子さんにこの場を借りて感謝いたします。ありがとうございました。

〈追記〉
この謝辞のチェックをご遺族にお願いしたところ、松村さんのお子さんたちから、読者のみなさんに向けて最後に付け加えておいて欲しいと、次のような文章を預かりましたので、そのまま掲載いたします。

＊

「父が亡くなって初めて、私たち子供は父がこんなにたくさんの人達に愛されて、支えられて生きてきた事を知りました。
悲しみの中、その事実が私たちの励みになり、とても嬉しかった事を覚えています。
今まで父を応援して下さった皆様、長い間本当にありがとうございました。」